

東京都文京区

小日向三丁目東遺跡 第2地点

—拓殖大学文京キャンパス整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010

学校法人拓殖大学
大成エンジニアリング株式会社



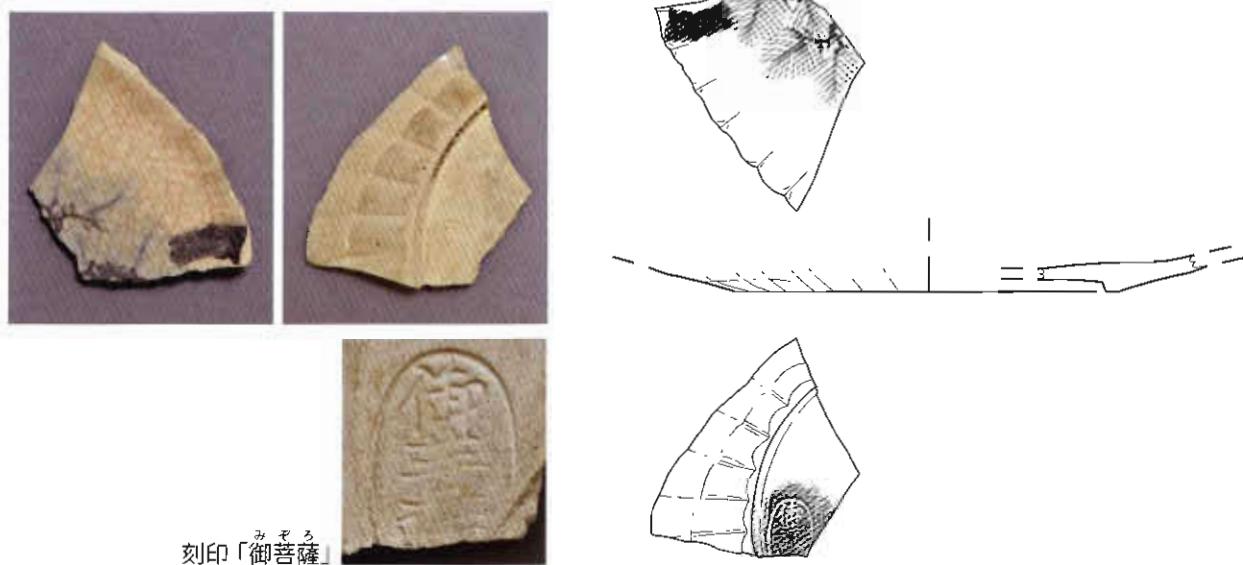
調査区全景（南から）

卷頭図版 2



09号遺構・P12出土家紋瓦(九曜文)

【07号遺構出土遺物】(B-KHN3E-02-07-02)



刻印「御菩薩」

【08号遺構出土遺物】(B-KHN3E-02-08-04)



実測図 S=2/3

例　　言

1. 本書は、東京都文京区小日向三丁目4番14号地内に所在する小日向三丁目東遺跡（文京区No 107 遺跡）第2地点の埋蔵文化財調査報告書である。なお、本調査地点は小日向台町遺跡（文京区No 69 遺跡）に一部含まれるが、遺跡の性格から小日向三丁目東遺跡として報告する。
2. 本調査は、拓殖大学文京キャンパス整備事業に伴い、学校法人拓殖大学、文京区教育委員会、大成エンジニアリング株式会社の三者が「協定書」を取り交わし、文京区教育委員会の指導の下、学校法人拓殖大学から大成エンジニアリング株式会社が調査の委託を受け実施した。調査対象面積は約 220 m²である。
3. 本調査の発掘調査から報告書刊行までに要した費用は、学校法人拓殖大学が負担した。
4. 調査及び本書作成にあたっては、谷川章雄氏（早稲田大学人間科学学術院教授）及び文京区教育委員会教育推進部庶務課長、同課文化財保護係職員によって構成された文京区埋蔵文化財発掘調査指導会議の指導を受けた。
5. 発掘調査期間は、平成21年8月3日から同年9月4日までである。
6. 整理調査および報告書作成は、平成21年9月7日に学校法人拓殖大学内の発掘調査事務所において開始し、9月24日からは大成エンジニアリング株式会社府中事務所において行い、平成22年6月30日の報告書刊行をもって終了した。
7. 発掘調査は山中リュウが担当し、整理作業から報告書作成は山中・牧野麻子・青池紀子・富田静香が分担した。本文は池田悦夫・山中・南 隆哲（文献調査）・阿部常樹（自然科学分析）が執筆し、文責を文末に記した。
8. 本調査地点に関する文献調査を南 隆哲氏（法政大学人文科学研究科日本史学専攻）に依頼し、第3章に掲載した。
9. 04号遺構出土の貝類の分析を阿部常樹氏（國學院大學 研究開発推進機構 共同研究員）に依頼し、第4章に掲載した。
10. 遺物集計表の作成は、池田悦夫氏の指導のもと、鈴木啓介・小野田恵・林 純子が行った。
11. 遺物観察表は、池田悦夫氏の指導のもと、山中が作成した。
12. 本調査において得られた諸資料は、文京区教育委員会に移管され、収蔵・活用される予定である。
13. 発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々や諸機関からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

清水建設株式会社 東京都教育庁 文京区教育委員会 有限会社久松興業

調査体制

調査機関	大成エンジニアリング株式会社 埋蔵文化財調査部	発掘調査参加者
理事	安孫子昭二（学術指導）	坂上直嗣 原みちる 青木重人 荒瀬誠夫 川村麻記 佐次 幹
顧問	服部敬史（学術指導）	田原 浩 富下伸一 箕輪泰滉 森田名都美
調査部長	早川 泉	整理調査参加者
調査課長	河野一也	東 早花 加藤宏美 上條房善 川村麻記
工務課長	渡辺宏司	栗山結花 小林幸子 佐藤謙介 白井順子
調査担当者	山中リュウ	丹 和美 中村君江 藤瀬和枝 松嶋 淳
整理調査員	青池紀子・富田静香・牧野麻子・ 美濃部達也	森田名都美 柳田美須穂 山下映子

目 次

巻頭図版

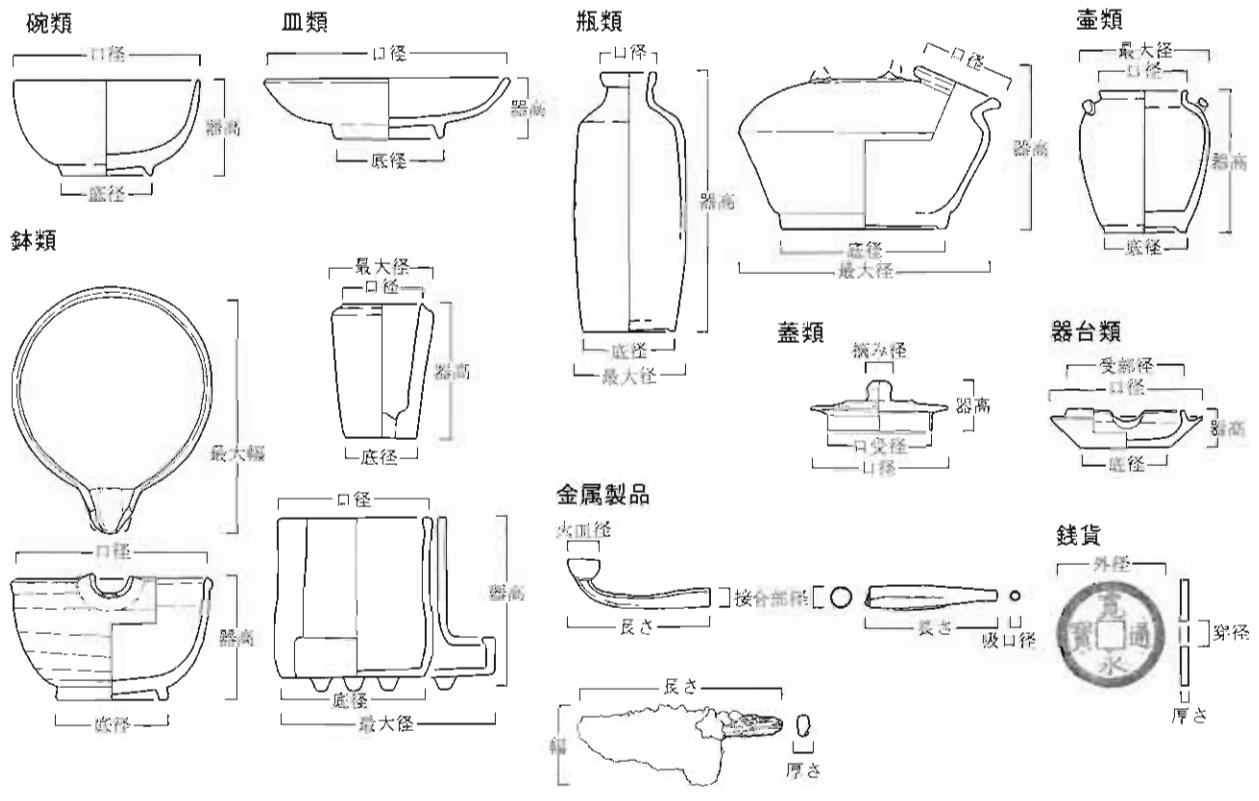
例言	i
目次・凡例	ii
凡例図	iii
序章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と調査経過	1
第2節 調査目的と調査方法	2
第1章 遺跡の概観と立地	3
第1節 地理的・歴史的環境と周辺の遺跡	3
第2節 調査地点における基本層序	4
第2章 遺構と遺物	6
第1節 概要	6
第2節 遺構と遺物	6
第3章 文献資料に見る当調査区の様相	32
第1節 当調査区域の土地利用の変遷	32
第2節 当該区の様相—拝領者・施設の視点から—	33
第3節 地図・絵図からみる当該地の地理的様相	35
第4章 04号遺構出土の貝殻群の分析	39
第5章まとめ	42
遺構一覧表	46
遺物集計表	47
報告書抄録	

凡 例

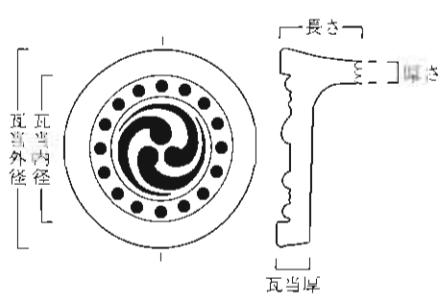
1. 背表紙の略号は、文京区の埋蔵文化財発掘調査報告書の通し番号を表す。
2. 遺跡名の略号は、「B-KHN3E-02」とし、遺物等の注記にはこれを用いた。
3. 本書中の挿図の縮尺は、原則として遺構図は1/40、遺物実測図は1/3で掲載し、上記と縮尺が異なる場合は個別図に明示した。
4. 本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面(T.P.)である。また、遺構全体図中の座標値は、世界測地系(新国家座標)に基づき、作図段階で設定したものである。したがって、個別遺構図に記した標高・方位はすべてこの座標系と一致する。
5. 上記の座標を基準とし、調査区全域に5mピッチでグリッドを設定した。
6. 遺構番号は、遺構確認段階で任意に、01号から順に付した。ピット(小穴)は遺構略号「P」を用い、P01から順に付した。発掘調査後、攪乱や同一遺構と判断したものは欠番とした。欠番は11号遺構・P08・P15・P22である。
7. 遺構図における線種・線号は以下の通りである。
調査区(実線・0.4mm)、遺構の上端(実線・0.3mm)、遺構の中端(実線・0.2mm)、遺構の下端(実線・0.1mm)、攪乱(一点鎖線・0.1mm)、復元線・隠れ線(破線)
8. 遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、稜線は破線、破損部は、推定復原状態を実線・破線、釉薬などの表面装飾は一点鎖線で示した。但し、釉薬の掛け分けは二点鎖線で示した。
9. 遺構図中のトーンの表示は以下の通りである。この他は各図中に示した。
 : 地山  : 磯
- 10.土層観察表のうち、「締まり」「粘性」については、「強い○」「中位○」「やや弱い△」「弱い×」、砂礫等の混人物については、「多量」「中量」「少量」「微量」の4段階に細分して表記した。
- 11.遺物観察表は、形状分類・推定製作地等の表記に関しては、主に『市谷本村町遺跡』新宿区市谷本村町遺跡調査団(1995)、『内藤町遺跡』第Ⅱ分冊 新宿区内藤町遺跡調査会(1992)、『南山伏町遺跡』新宿区南山伏町遺跡調査会(1997)を参照した。寸法に関しては、1mm単位で表した。重量に関しては、台秤と電子秤を用いて1g単位まで計測した。
- 12.遺構一覧表・遺物観察表の計測値で用いている「*」は推定値、「>」は現存値を表す。

凡 例 図

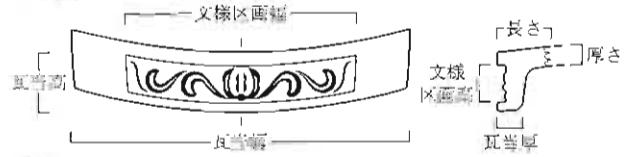
遺物の計測部位



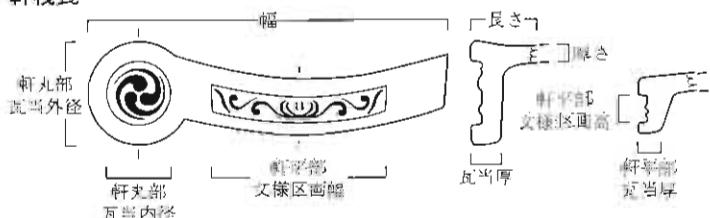
軒丸瓦



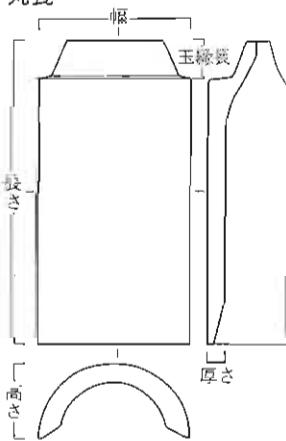
軒平瓦



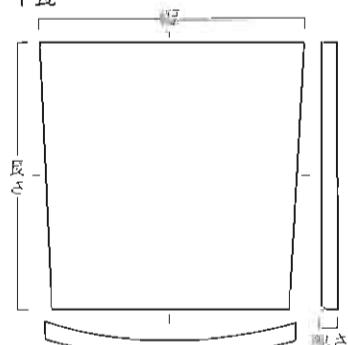
軒棧瓦



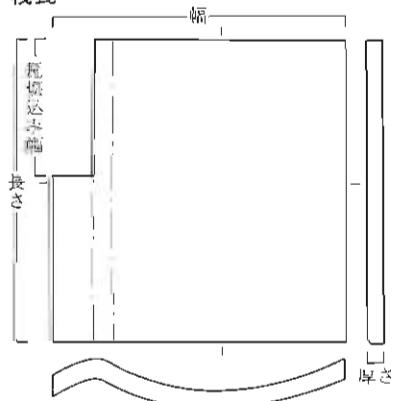
丸瓦



平瓦



棧瓦



序章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と調査経過

1. 調査に至る経緯

学校法人拓殖大学（以下「事業者」という。）は、東京都文京区小日向三丁目4番14号地点において、事業者（以下「個人事業者」という。）による学校施設の建築を随時実施し、既に、一部建築予定地において発掘調査が実施されている。

本年度の計画地点における工事着手に先立ち、文京区教育委員会（以下「区教委」という。）に対し当該地における埋蔵文化財存否確認の照会があった。

区教委は当該地が近世の遺跡であることと同時に、照会地が文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するため、開発事業にあたり法に基づく届出を要する地域である旨の回答を行った。

それを受け、事業者から試掘調査を行うことで合意

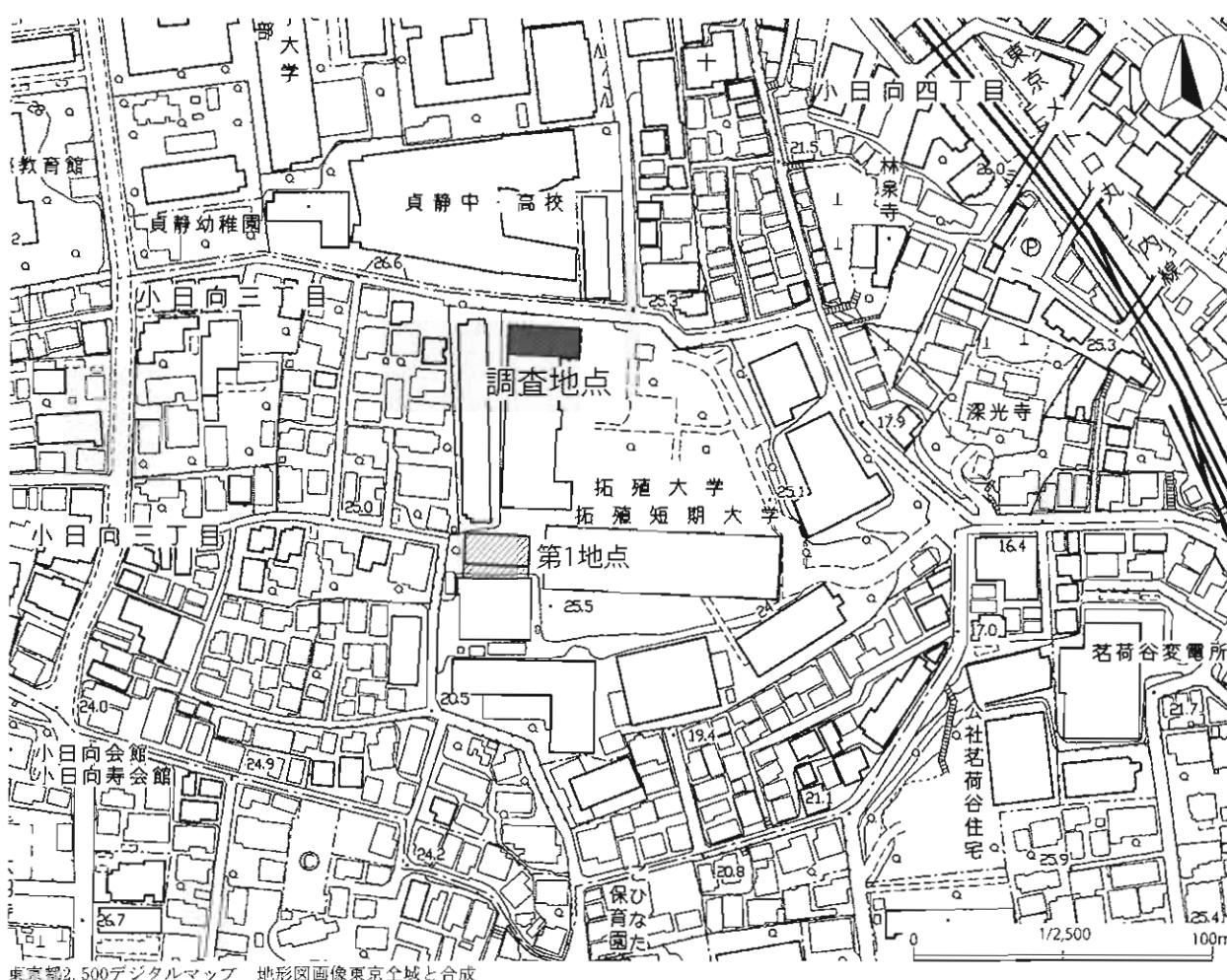
を得るとともに、平成21年5月22日付東京都教育長宛「第93条第1項の規定に基づく届出」が事業者から区教委に提出された。

試掘調査は平成21年6月30日に実施された。その結果、近世の遺構・遺物が検出されたため、区教委は事業者に対して、発掘調査を行う必要性のある旨を回答した。

試掘調査の結果を踏まえ、区教委と事業者の間で本格調査を行うことで合意を得た。このことを受けて、事業者、区教委、大成エンジニアリング株式会社の三者による本格調査に関わる協定書が締結された。

事業者と大成エンジニアリング株式会社との間で委託契約を結び、大成エンジニアリング株式会社から同年7月28日付東京都教育長宛「法第92条第1項の規定に基づく発掘届」が区教委に提出され、平成21年8月3日より本格調査が実施された。

（池田悦夫）



第1図 調査地点の位置

2. 調査経過

発掘調査は、平成 21 年 8 月 3 日から同年 9 月 4 日まで行った。事前に行われた試掘調査の結果をもとに、8 月 3 日から 5 日にかけて重機による表土掘削を行った。近現代の搅乱部分の掘削が終了した後、人力により遺構確認作業を行った。

発掘調査から報告書刊行までの調査経過は以下の通りである。

【発掘調査】

平成 21 年 8 月 3 日	表土掘削開始、遺構確認作業開始
8 月 4 日	基準点測量
8 月 6 日	遺構調査開始（土捨ての関係から一部を先行して調査）
8 月 7 日	先行調査部分の全景写真撮影
9 月 2 日	基本層序実測
9 月 3 日	調査区全景写真撮影
9 月 4 日	発掘調査終了

【整理調査】

平成 21 年 8 月 12 日	発掘調査と平行して遺物洗浄開始
8 月 19 日	発掘調査と平行して遺物の集計・計量開始
8 月 25 日	発掘調査と平行して遺物接合開始
9 月 9 日	遺物注記開始、遺構図面整理開始、報告書原稿執筆開始
9 月 17 日	遺物実測・遺物観察表作成開始
10 月 21 日	遺物分類開始
10 月 30 日	文献調査開始
平成 22 年 4 月 20 日	遺物写真撮影開始
5 月 12 日	遺構図トレース開始
5 月 17 日	報告書編集作業開始
6 月 30 日	報告書印刷・製本終了

第2節 調査目的と調査方法

1. 調査目的

本調査は、拓殖大学文京キャンパス整備事業に伴う事前調査であり、同地内における埋蔵文化財の実態を明らかにすることを目的として実施された（第 1 図）。調査対象面積は約 220 m²である。

当該地は『東京都遺跡地図』の「小日向三丁目東遺跡（文京区 No. 107 遺跡）」および「小日向台町遺跡（文京区 No. 69 遺跡）」として認知されており、縄文時代・古墳時代・奈良時代の遺跡の他、近世では大名屋敷（下屋敷）が所在していた（第 2 図、第 1 表）。

本調査は、同地の埋蔵文化財の記録保存であり、発掘調査・整理調査を通じて、遺構・遺物の質・量的な実態を調査することを第一とした。

2. 調査方法

【発掘調査】

①表土掘削・遺構確認

重機による表土掘削後、遺構確認面での検出作業を人力で行った。

②基準杭設定

遺構を記録する基準となる国家座標（世界測地系第 IX 系）の基準点杭を敷地内に設定した。

③遺構番号

遺構の存在を確認した時点で、任意に 01 号から順に付した。なお、掘削後、隣り合う遺構と同一と判断した場合や、搅乱と判断した遺構は欠番とした。

④遺構図作成

平面図は、トータルステーションによる観測とデータ取得を行い、「遺構くん」（株式会社 CUBIC 製測量用ソフト）を使用し、記録・図化した。土層断面図はすべて手実測により作成し、整理段階において平面図との整合を図った。

⑤写真記録

写真による記録は、デジタルカメラ及び 35 mm 一眼レフカメラ（ネガカラーフィルム）で撮影した。

⑥遺構調査

遺構は原則として長軸に沿って半截し、堆積状態の観察、分層、断面図化、断面写真撮影を行い、その後、完掘、完掘写真撮影及び平面図化を行った。

【整理調査】

遺構図面は、測量データを基に全体図を作成した。個別の遺構図は、全体図と手実測によって作成した土層断面図を合成し作成した後、報告書に掲載する遺構を選定し、掲載遺構のデジタルトレースを行った。

報告書に掲載する遺構の選定は、文京区教育委員会の指導の下、遺構の性格・遺存状態、遺物の出土量・遺存状態・年代観などを考慮し行った。なお、それ以外の遺構は個別に掲載はしなかったが、遺構一覧表（第 27 表）で概要を示した。

遺物は洗浄後、材質毎に大別し、計測・計量を行った。接合作業後、報告書掲載遺構を中心に図化対象遺物を抽出した。接合は遺構内・遺構間で確認した。図化対象遺物の抽出は、文京区教育委員会の指導の下、原則として復原実測が可能な遺物の中から、遺構の特徴を反映していると思われるものを中心に行った。遺物注記後、実測図・觀察表の作成を開始した。遺物注記は、図化対象遺物については、手書きで行い、その他の遺物は注記マシンを用いた。

図化対象遺物は、実測図を作成した後、スキャナーで読み込み、デジタルトレースを行った。染付けの施された陶磁器などは写真撮影し、画像処理後、遺物トレース図と合成した。

（山中リュウ）

第1章 遺跡の概観と立地

第1節 地理的・歴史的環境と周辺の遺跡

本遺跡は、武蔵野台地の東端、小日向台地の頂部・尾根上に立地しており、東側に小石川谷、西側に音羽谷、南側に神田（江戸）川の流路とその流域に展開する沖積低地を望んでいる。台地面は南側・東側へ向かって傾斜しているが、今回の調査地点は台地のやや内側にあたるため、標高約 26.3 m でほぼ平坦である。

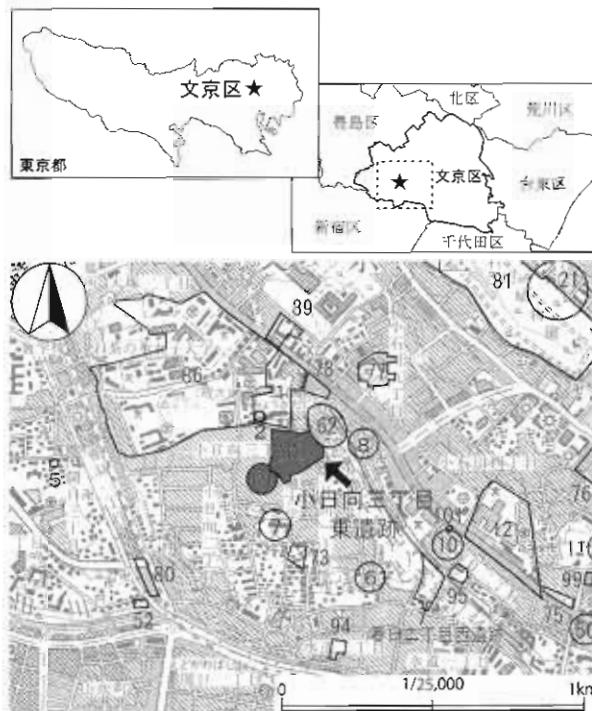
本遺跡は、平成 20 年（2008）に遺跡の南西側にあたる約 264 m² が調査されている（大成エンジニアリング株式会社 2009）。合計 48 基の遺構が検出され、8,513 点の遺物が出土した。遺構は、すべて近世に属し、遺物は、縄文時代・弥生時代の土器、古墳時代から平安時代の土師器・須恵器、近世の陶磁器・土器・瓦などが出土した。縄文・弥生時代は、遺構が検出されず、遺物の出土点数も少ない。古墳時代から平安時代は、遺構は検出されなかったものの、90 点近い遺物が出土したことから、付近に集落のあった可能性がある。近世は、地下室や井戸などの遺構が検出され、多数の陶磁器類が出土した。文献調査の結果、近世前期には上野国高崎藩安藤家の下屋敷範囲の一部で、寛文 2 年（1662）以降は美濃国大垣新田藩戸田家の下屋敷であったことがわかった。18 世紀前葉以降は、調査範囲の大部分が旗本の武家屋敷となり近代に至ったようである。遺跡の位置は、江戸の中心にあたる江戸城から北西へ約 3.5 km であり、江戸の範囲内（御府内）では場末に近いといえる。近世前期から近代に至る絵図を見ていくと、当初からすでに多くの武家屋敷や寺社が描かれており、西側の農地へ徐々に市街地化しながら近代へ至った様子が見て取れる（第 3 章参照）。

現在までに、本遺跡の周辺では旧石器時代から近世までの遺構や遺物が発見され、調査されている（第 2 図）。旧石器・縄文・弥生時代では、小日向台町遺跡（No. 73）において旧石器時代の礫群と石器ブロック、縄文時代の陥し穴、弥生時代の竪穴住居跡が確認されている。平成 20 年（2008）に調査された春日二丁目西遺跡では、旧石器時代の石器ブロック、縄文時代の陥し穴、弥生時代の土坑などが確認されている。大塚遺跡（No. 1）でも縄文時代の陥し穴が確認されている。三軒町遺跡（No. 78）では縄文時代の土器・石器の出土が確認されている。また、大塚町遺跡（No. 86）や小日向四丁目に所在する貝塚（No. 8）からも縄文時代の遺構・遺物が確認されている。伝通院裏貝塚（No. 11）では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されている。

古墳・奈良時代では、大塚遺跡や伝通院裏貝塚において古墳時代後期の竪穴住居跡が確認されており、小日向台町遺跡において奈良時代の竪穴住居跡が確認されている。

中世では、春日二丁目西遺跡において墨館に関わる可能性のある溝や道路状遺構が確認され、小日向台町遺跡において「まいまいいず井戸」が確認されている。

今回調査の主体となる近世では、大名・武家屋敷の調査として、本遺跡の北側に大塚遺跡、三軒町遺跡、大塚窪町遺跡（No. 89）などがあり、南側では、小日向台町遺跡、春日二丁目西遺跡などの調査例がある。調査事例の



国土地理院 1 : 25,000 東京主部・東京西部地形図より作成

第 2 図 小日向三丁目東遺跡の周辺の遺跡

第 1 表 小日向三丁目東遺跡の周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	研究者	遺跡の概要	時代
1	大塚	大塚一丁目	谷包廻地 地下式土坑 古墳・奈良	
2	大塚古墳	大塚一丁目 (省静守園)	台地 古墳（円墳？） 古墳？	
3	高田差町	間口二丁目	白地縞邊 包廻地 縄文	
4		小日向一丁目	古地縞邊 包廻地 縄文	
5		小日向一丁目 (小日向台町小学校)	古地縞邊 包廻地 縄文	
6		小日向四丁目 (皆雲寺)	台地縞邊 亂塚 縄文	
7		春日二丁目	台地・里敷 亂塚 近世	古事記・近世
8		小石川二丁目 (伝通院裏貝塚) (宿院学園)	台地縞邊 貝塚？ 縄文・弥生	
9		久堅町	小石川四丁目	台地 首塚・扇塚（近） 地下式土坑・井戸 縄文・近世
10		小石川植物園 丸山家・葬門	台地縞邊 貝塚・武家塙 縄文（中・後・後）・敷（近） 住居（近） 土塙 志世	
11		春日一丁目 (伝通院前)	台地 亂塚（近） 地下式土坑 近世	
12		長光寺	間口二丁目	台地 社寺 近世
13		若狭谷町	小日向四丁目	台地 社寺（草）（近） 地下式土坑 中・近世
14		小日向台町	小日向二・三丁目	台地・集落・礼寺 縄文・古墳・奈良・近世
15		小日向台町	小日向一丁目	台地 亂塚 近世
16		小石川三丁目	台地 社寺 近世	
17		小石川二丁目	台地 社寺 近世	
18		小石川五丁目	台地 乱塚 近世	
19		小日向四丁目	台地 亂敷 近世	
20		傳通院裏貝塚	台地 亂敷・墓地 近世	
21		白山二・四丁目	台地 亂敷・その他（縄） 住居（近） 土塙 縄文・近世	
22		大塚町	人塚一丁目	台地 亂敷 縄文・弥生・近世
23		大塚指町	大塚一丁目	台地 亂敷 近世
24		水道二丁目	台地 亂敷 近世	
25		金富町	春日一丁目	台地 亂敷 縄文・弥生・近世
26		小石川一丁目	台地 社寺 近世	
27		北	台地 亂敷	竹生・近世
28		春日一丁目	台地 亂敷・周敷	竹生・古墳・奈良・近世
29		小日向二丁目	台地 亂敷・周敷	縄文・古墳・奈良・近世

増加とともに、当時の様領者の変遷や、武家屋敷での生活の様子が徐々に明らかになりつつある。寺社地としては、本遺跡の北東側に茗荷谷町遺跡（No.62）、智香寺跡・光岳寺跡（No.77）などが確認されている。近世から現代まで存続している寺院としては、本遺跡に隣接する東側に深光寺、北東側に林泉寺がある。

以上のように、本遺跡周辺では旧石器時代から近世までの遺構・遺物が確認されており、古くより人々の生活が営まれていたことがわかっている。近世以前の発見例が少ないと、それ以後の土地の改変により多くが失われたためであろう。近世を含めそれぞれの遺跡の全体像を把握するためには、今後も地道な調査成果を積み重ねていく必要がある。

第2節 調査地点における基本層序

本調査区は、既存の建物（A館の北側部分）を解体した跡地にあたり、調査区内には旧建物のコンクリート基礎

が格子状に残されていた。コンクリート基礎の下部には、建物の廃材等を多量に含む暗褐色土の表土が約0.2m堆積し、その下には褐色土を主体とする盛土が約0.15m堆積する。盛土は主に調査区西側で頭著であるが、中央から東側にかけては、表土が厚く堆積していたため確認されなかった。

現地表面から約0.5mで自然堆積層となる。調査区西側では武蔵野台地の基本層序第Ⅲ層に相当するソフトローム層が僅かに確認されたが、中央から東側にかけては第Ⅳ層に相当するハードローム層が確認され、本層が今回調査における主要な遺構確認面である。

基本層序の観察は、南西隅の調査区西側壁面で行った（第3図）。現地表面から約3.1mまで掘削し、第ⅩⅢ層（武蔵野ローム）を確認した。各層厚は比較的薄いものの、台地上の安定した水平堆積である。（山中）

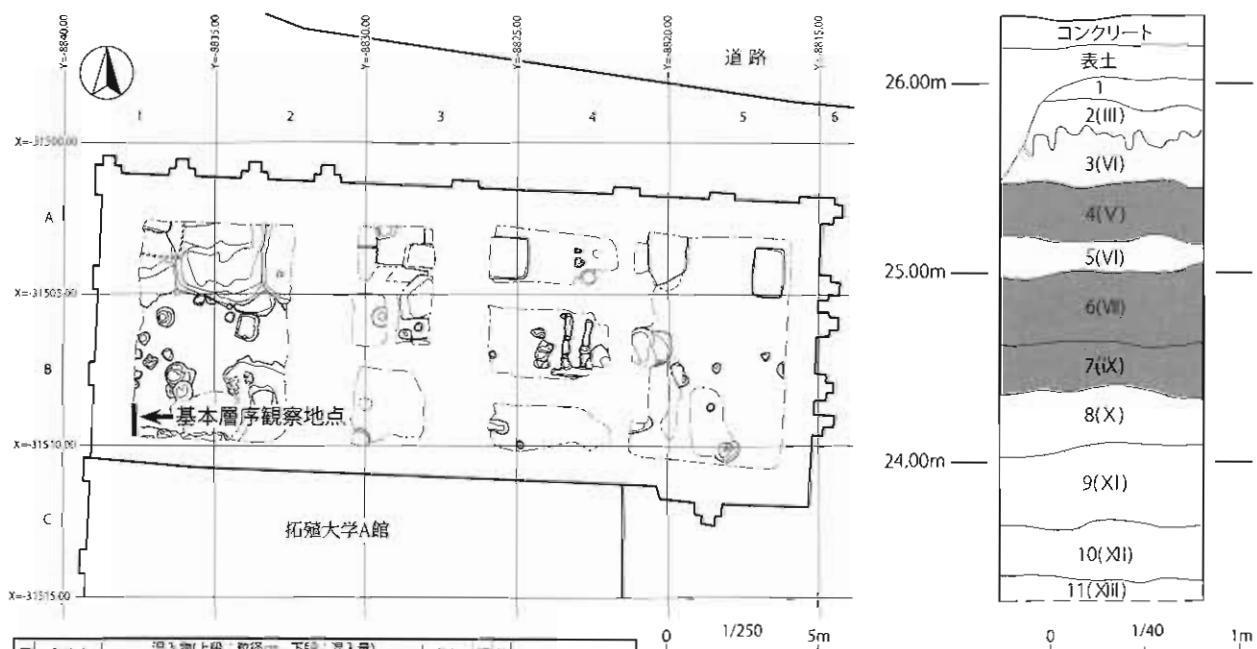
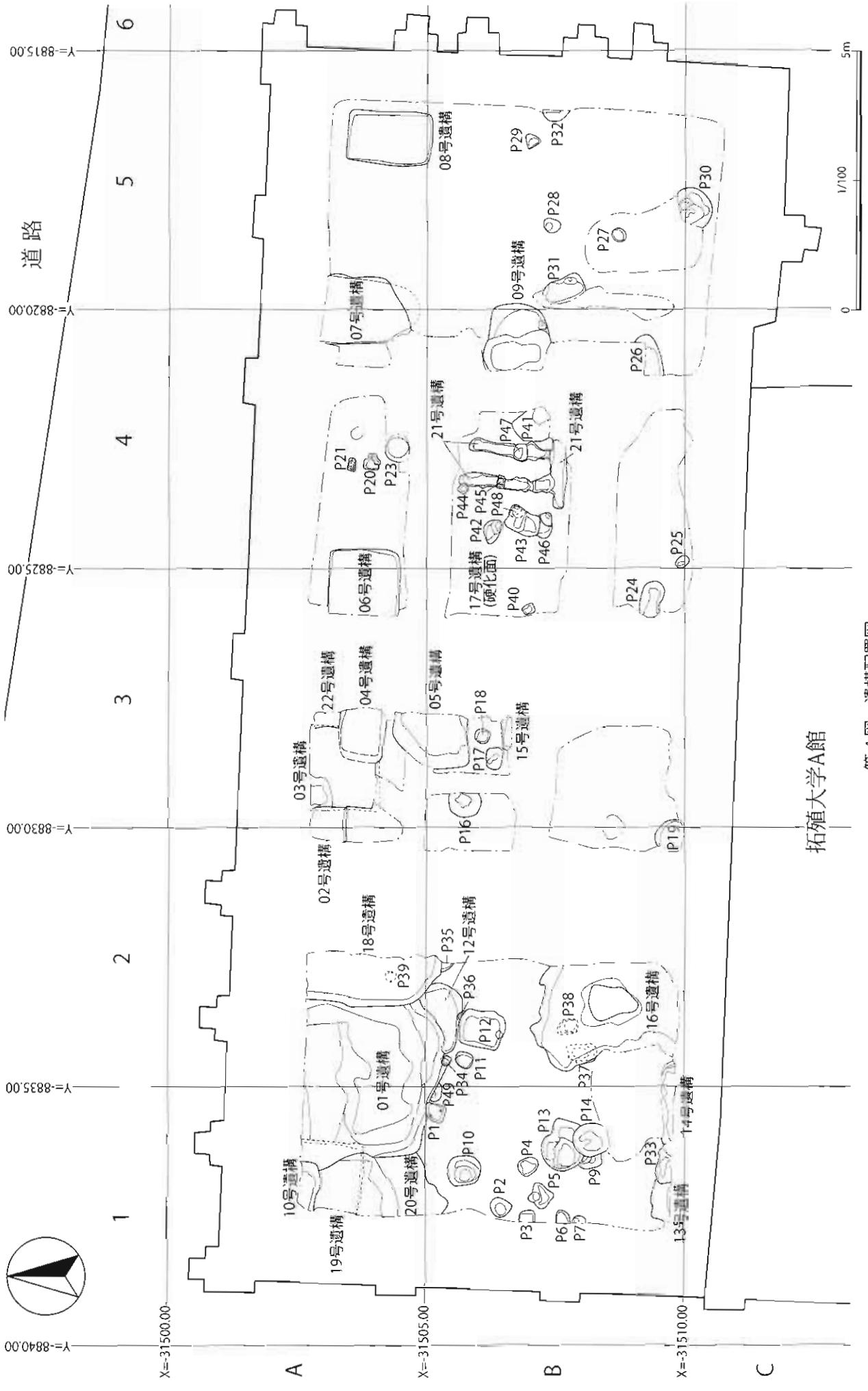


写真1 基本層序観察地点（東から）

第3図 基本層序観察地点



A

B

C

第2章 遺構と遺物

第1節 概要

今回の調査では、合計 67 基の遺構が検出された(第4図、第27表)。内訳は、上坑 14 基、植栽痕 3 基、硬化面 1 箇所、溝状遺構 1 条、小穴(ピット)46 基、性格不明 2 基である。出土した遺物や覆土の様子から、すべて近世の遺構と考えられる。土坑には、ローム土の採掘を目的として掘られたと思われる大型の土坑(01号遺構)や、食用の貝(マガキ)を大量に廃棄した土坑(04号遺構)などがある。

本報告書では、上記の遺構のうち、土坑 9 基、植栽痕 2 基、硬化面 1 箇所を選定し、次節において詳細を述べる。

遺物は、総数 8,819 点(197.611g)が出土した(第28・29表)。内訳は、磁器 747 点(7.306g)、炻器 274 点(13.207g)、陶器 1,254 点(29.473g)、土器 2,896 点(32.548g)、瓦 997 点(88.943g)、鉄製品 360 点(1.743g)、銅製品 52 点(131g)、石製品 50 点(4.118g)、ガラス製品 19 点(516g)、その他(近世以前を含む)2,170 点(19.626g)である。他に、04号遺構から出土した大量の貝類(テンバコ 7 箱、59.433g)がある。

本報告書では、上記の遺物のうち、大名屋敷という遺跡の性格を反映していると思われるものを中心に 85 点を抽出し、次節において詳細を述べる。04号遺構出土の貝類については、一部を詳細に分析し、その成果を第4章に掲載している。

第2節 遺構と遺物

■ 01号遺構(土坑)

位 置: 本遺構は、調査区北西側の A・B-1・2 グリッドに位置する(第5図、写真2~4)。12号・19号・20号遺構、P49 を切り、10号・18号遺構、P1・P34・P39 に切られる。また、東側は攪乱に切られ、北側は調査区外に延びる。遺構確認面までの深さは、現地表面から約 0.66 m 下であり、標高は約 25.85 m である。主軸方位は N-88°-E である。

形 態: 本遺構は土坑である。平面形は東側が攪乱に切られ、北側が調査区外に延びているものの、不整長方形を呈するものと推測される。壁面はやや外傾して立ち上がり、断面形は U 字形を呈する。北側の調査区壁際に西から東へ緩やかに下るスロープを有する。底面・壁面・スロープ部分ともに未調整であり、工具痕と思われる凹凸が顕著である。これらのことから、本遺構はローム土を採掘するために掘り込まれた土採り穴と考えられる。

規 模: 東側が攪乱に切られ、北側が調査区外に延びているため、全体の規模は不詳であるが、確認された規模は、長軸約 4.24 m 以上 × 短軸約 2.73 m 以上 × 深さ約 0.91 m を測る。

覆 土: 覆土は 5 層に区分される。1 層は、暗褐色上

を主体とし、遺物は少ない。2・3 層の遺物群に蓋をするための埋め土と推測される。2・3 層は、遺物を多く含み、本遺構の廃絶後にごみ穴として転用されたことをうかがわせる。4・5 層はロームブロックをマーブル状に含み、遺物は少ない。遺構廃絶当初に投げ込まれた埋め土と考えられる。

検出遺物: 総破片数 2,529 点、総重量 43.808g。材質別の点数は、磁器 124 点(1,039g)、炻器 58 点(2.527g)、陶器 317 点(9.057g)、土器 753 点(11.200g)、瓦 176 点(17.323g)、鉄製品 128 点(630g)、銅製品 21 点(40g)、石製品 13 点(267g)、その他 939 点(1.725g) である(第17・18図、第2・3表、写真5・6)。

01 から 04 は磁器の皿・碗である。01 は、肥前産の輪花皿で、見込に筆書きによる五弁花文が描かれている。02 は、端反形の碗で、中国の景德鎮産である。03 は、端反形の白磁碗で、中国の徳化窯産である。口縁部の釉薬は拭い取られている。底部に「吉」の陽刻がある。04 は、肥前産の碗で、見込にコンニャク印判による五弁花文が描かれている。

05 から 08 は陶器の碗・鉢・片口である。05 は、美濃・瀬戸産の腰折碗で、口縁の一部を打ち欠いて灯明具に転用している。06 は、产地は不詳であるが、高台の高い碗である。灰釉が施され、胎土は灰白色を呈する。07 は、京都・信楽産の鉢である。灰釉が施され、外面の腰下は無釉である。08 は、美濃・瀬戸産の片口である。御深井釉が施され、外面の腰下は無釉である。

09 から 11 は土器の焼塩壺と蓋である。09 は、焼塩壺の蓋で、型打成形され、内面に布目が残っている。10 は、蓋受けの小さい深桶形の焼塩壺で、外面に「泉漬伊織」の陰刻が施されている。11 は、蓋受けのない浅桶形の焼塩壺で、ロクロ成形されている。

12・13 は陶器・炻器の擂鉢である。12 は、美濃・瀬戸産の陶器で、鉄釉が施されている。13 は、堺・明石産の炻器で、鉄泥が施され、胎土は赤褐色を呈する。

14 は陶器の双耳壺である。美濃・瀬戸産で、内・外面に御深井釉が施されている。

15 は炻器の瓶である。備前産で、破片であるため判読は出来ないが、底部に陰刻が施されている。

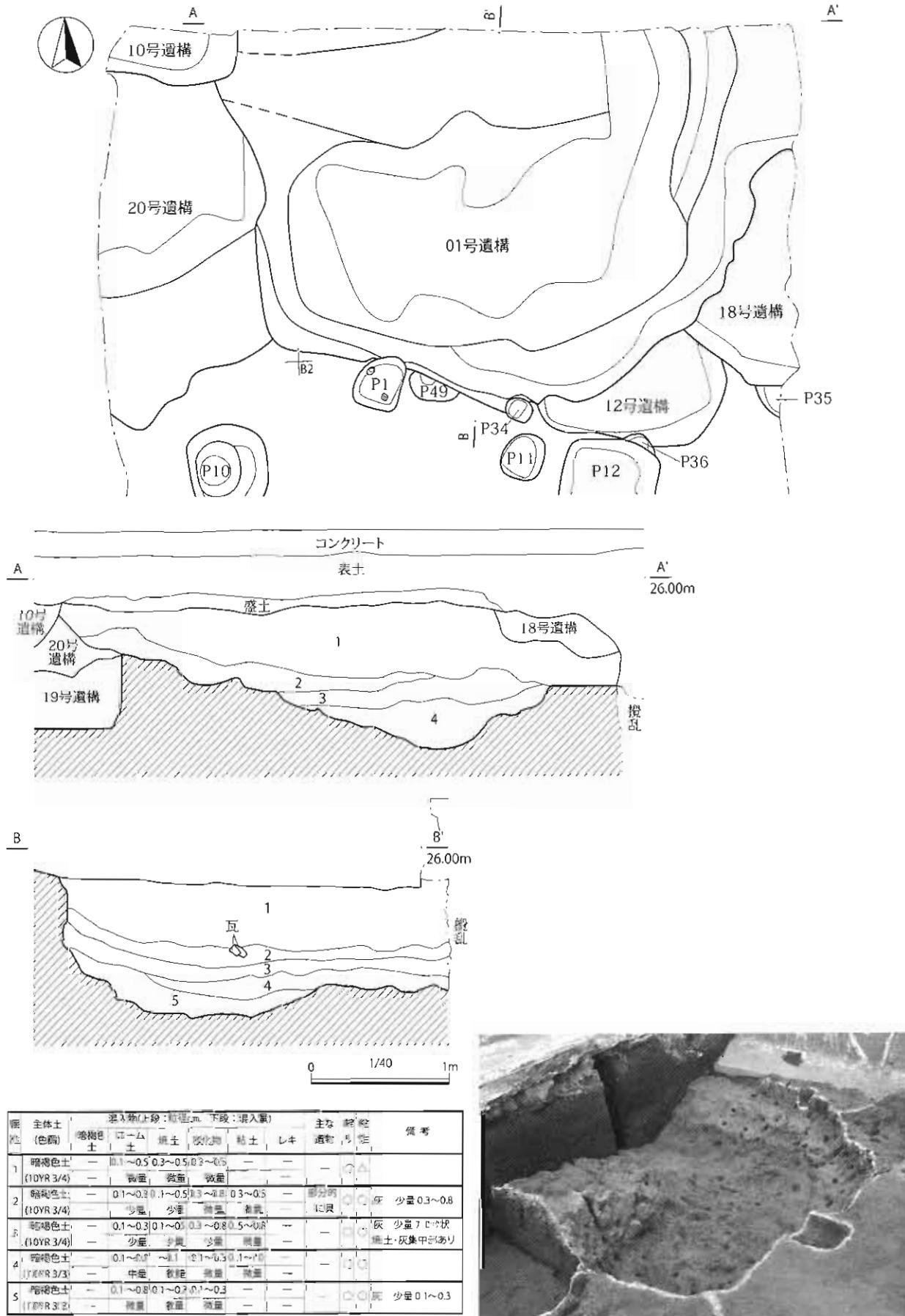
16 は陶器の水滴である。京都・信楽産で外面に黄釉が施される。内面は無釉である。

17 は炻器の瓶である。備前産で、外面に鉄泥が施されている。内面は無釉である。

18・19 は土器・炻器の灯明具である。18 は、在地産の土器の灯明皿である。内面に「ちり」の墨書きがある。19 は、炻器の灯明受皿である。志戸呂産で、鉄泥が施され、口縁部に煤が付着している。

20・21 は上器の焜炉・十能である。20 は、竈形の焜炉で、内面には煤が付着している。21 は、十能の柄の部分である。

22・23 は陶器の徳利・灰吹である。22 は、美濃・瀬



第5図 01号遺構

写真2 01号遺構完掘(南西から)



写真3 01号遺構土層断面(東から)



写真4 01号遺構遺物出土状況(北から)

戸産の高田徳利で、胴部に焼成時の溶着痕がある。23は、美濃・瀬戸産の灰吹で、口縁部に敲打痕が多数認められる。

24は、恵比寿像の土製品で、在地産である。

遺構時期:17世紀後葉から19世紀初頭の遺物が出土した。18世紀後葉から19世紀初頭が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は18世紀後葉から19世紀初頭以降と推測される。

■第03号遺構(土坑)

位置:本遺構は、調査区北側のA-3グリッドに位置する(第6図、写真7~9)。02号・22号遺構を切り、04号遺構に切られる。また、北側は調査区外へ延びる。確認面までの深さは、現地表面から約0.71m下であり、標高は約25.77mである。主軸方位はN-84°-Eである。

形態:本遺構は土坑である。平面形は、北側が調査区外に延びるが、長方形を呈するものと思われる。断面形は、やや内傾した箱形を呈する。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直である。底面・壁面とともに平滑に調整され、コーナーはほぼ直角に曲がる。底面の北西隅に小穴状の窪みが認められる。

規模:北側が調査区外へ延びているため、全体の規模は不詳であるが、確認された規模は、長軸約1.53m×短軸約1.27m以上×深さ約1.03mを測る。底面に掘り込まれた窪みの規模は、長軸0.66m×短軸0.43



写真5 01号遺構出土遺物①



写真6 01号遺構出土遺物②

m以上×底面からの深さ0.22mを測る。

覆土:覆土は11層に区分される。1・2層は、堆積の状況から別遺構の掘り込みである可能性を考えられるが、平面の観察では確認できなかった。3層から5層は、暗褐色・黒褐色土を主体とし、灰がブロック状に含まれている。7・8層は、ロームブロックが他の層よりも多く含まれており、遺構廃絶当初に投げ込まれた埋め土の可能性を考えられる。9層から11層は、底面北西隅に掘り込まれた窪みの堆積土である。10層は、褐色土を主体とし、ロームブロックが多量に含まれることから、人為的に窪みを埋め戻したものと考えられる。

1・2層以外はほぼ水平に堆積しており、丁寧に埋め戻された様子がわかる。

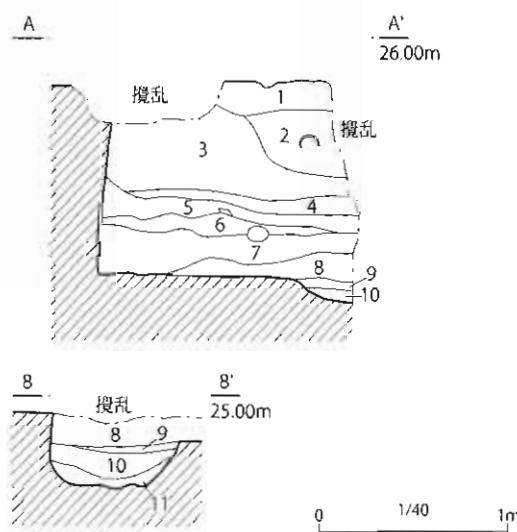
検出遺物:総破片数228点、総重量13.101g。材質別の



写真7 03号遺構完掘(南東から)



層位 (色調)	混入物(上段:粉砂質、下段:混入量)					主な 遺物	検出 性	備考
	暗褐色土	ローム	焼土	炭化物	粘土			
1 (10YR 3/3)	-	0.1~0.3	0.1	0.1~0.5	0.1~0.3	-	-	○△別遺構の可能性あり
2 (10YR 2/3)	-	0.1~0.3	0.1~0.3	0.1~0.5	-	-	-	△○別遺構の可能性あり
3 (10YR 3/3)	-	0.3~0.5	0.3~0.8	~0.5	0.5~0.8	-	-	△○灰少量 2.0~3.0cm で検
4 (10YR 2/3)	-	0.3~0.8	0.3~0.5	~0.5	-	-	-	△○灰微量 0.5~0.8cm
5 (10YR 3/3)	-	0.3~1.0	~0.5	~0.5	-	-	-	○△灰微量 0.3~0.5cm
6 (10YR 3/4)	-	0.3~0.8	~0.5	0.3~0.8	0.3~0.5	-	-	△○灰多量 5.0cm厚
7 (10YR 3/3)	-	0.3~1.0	0.3~1.0	0.3~0.8	-	-	-	○○
8 (10YR 3/4)	-	0.3~0.6	0.1~0.5	~0.3	-	-	-	○○
9 (10YR 3/3)	-	0.5~1.0	-	0.1~0.5	-	-	-	○○底面ピット
10 (10YR 4/4)	-	0.1~2.0	-	-	-	-	-	○○底面ピット
11 (10YR 3/4)	-	0.3~2.0	0.1~0.3	0.1~0.5	-	-	-	△○底面ピット



第6図 03号遺構

点数は、磁器 35 点 (225g)、炻器 14 点 (306g)、陶器 38 点 (584g)、土器 79 点 (1,280g)、瓦 26 点 (2,973g)、鉄製品 20 点 (97g)、銅製品 4 点 (2g)、石製品 3 点 (566g)、その他 9 点 (7,068g) である。

磁器では、肥前産の小碗（雨降文）などが出土している。炻器では、唐津産の碗（雑巾手）や鉢（三島手）などが出土している。陶器では、美濃・瀬戸産の徳利などが出土している。

遺構時期: 17世紀前葉から18世紀中葉の遺物が出土した。18世紀中葉が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は18世紀中葉以降と推測される。

■第04号遺構（土坑）

位置: 本遺構は、調査区北側の A - 3 グリッドに位置する（第7図、写真10）。03号・22号遺構を切る。また、東側は攪乱に切られる。遺構確認面までの深さは、現地表面から約 0.71 m 下であり、標高は約 25.77 m である。

形態: 本遺構は土坑である。平面形は、東側が攪乱



写真8 03号遺構土層断面（東から）

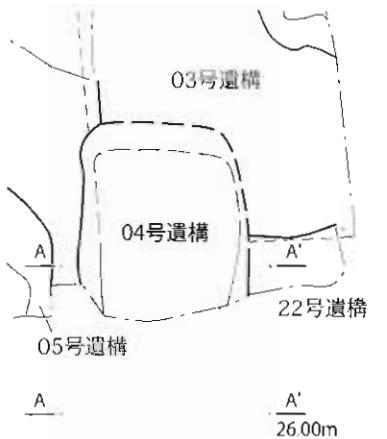


写真9 03号遺構付帯施設土層断面（南から）

に切られるものの、隅丸長方形を呈するものと推測される。断面形は、U字形を呈する。底面・壁面とともに未調整であり、工具痕が顕著に残る。覆土下層に大量の貝類（マガキ主体）が堆積していたことから、それらを廃棄するために掘られた廃棄土坑と考えられる。

規模: 東側が攪乱に切られるため、全体の規模は不詳であるが、確認された規模は、長軸約 1.90 m × 短軸約 1.04 m 以上 × 深さ約 0.65 m を測る。

覆土: 調査において、重複する3号遺構と混同し、同時に掘削してしまったため、詳細な土層の観察はできなかった。現場での所見では、下層に廃棄されたと思わ



第7図 第04号遺構

れる大量の貝類が堆積し、その上に蓋をするように、遺物の少ない暗褐色土が堆積していた。

検出遺物：総破片数 113 点、総重量 1,455g。材質別の点数は、磁器 5 点 (29g)、炻器 2 点 (5g)、陶器 9 点 (206g)、土器 34 点 (85g)、瓦 10 点 (1,032g)、鉄製品 53 点 (98g) である (第 19 図、第 4 表、写真 11)。

01 は、陶器の半球碗である。京都・信楽産で、透明釉が施され、外面の腰下は無釉である。

02 は、磁器の水滴である。肥前平戸産で、外面に鉄絵が施されるが、破片であるため内容は不詳である。

遺構時期：18世紀前葉から 19世紀初頭の遺物が出土した。18世紀後葉から 19世紀初頭が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は 18世紀後葉から 19世紀初頭以降と推測される。

■第 05 号遺構 (土坑)

位置：本遺構は、調査区中央付近の A・B - 3 グリッドに位置し、遺構上面の一部と東側は攪乱に切られる (第 8 図、写真 12・13)。遺構確認面までの深さは、現地表面から約 0.63 m 下であり、標高は約 25.79 m である。

形態：本遺構は土坑である。平面形は、東側が攪乱に切られるため不詳である。断面形は、U 字形を呈する。底面・壁面ともに未調整であり、工具痕が顕著に残る。このことから、本遺構はローム土を採掘するために掘り込まれた土採り穴と考えられる。

規模：東側が攪乱に切られるため、全体の規模は不詳であるが、確認された規模は、長軸約 1.42 m × 短軸約 1.01 m 以上 × 深さ約 1.35 m を測る。

覆土：覆土は 7 層に区分される。1・2 層は、暗褐色土を主体とし、焼土・炭化物の他に灰の小ブロックを微量含んでいる。3 層は、褐色土を主体とする土に多量



写真 10 04号遺構完掘 (東から)



写真 11 04号遺構出土遺物

のロームブロックが含まれる。4・5 層は、暗褐色・褐色土を主体とし、他の層に比べ粘性が強い。6 層は暗褐色土を主体とし、凹レンズ状に堆積していることから、自然埋没と考えられる。7 層は、暗褐色土中に多量のロームが含まれており、遺構廃絶当初に埋め戻された土と考えられる。

検出遺物：総破片数 282 点、総重量 16,202g。材質別の点数は、磁器 35 点 (449g)、炻器 20 点 (1,180g)、陶器 72 点 (3,049g)、土器 86 点 (3,118g)、瓦 57 点 (8,224g)、鉄製品 4 点 (114g)、銅製品 2 点 (16g)、石製品 2 点 (21g)、その他 4 点 (31g) である (第 20 図、第 5・6 表、写真 14)。

01・02 は陶器の碗・蓋物である。01 は、美濃・瀬戸産の腰折碗である。長石釉が施され、外面の腰下は無釉である。02 は、半筒形の蓋物で、京都・信楽産である。

03 は鉄製の出刃包丁である。把手の部分に僅かに木片が残存している。

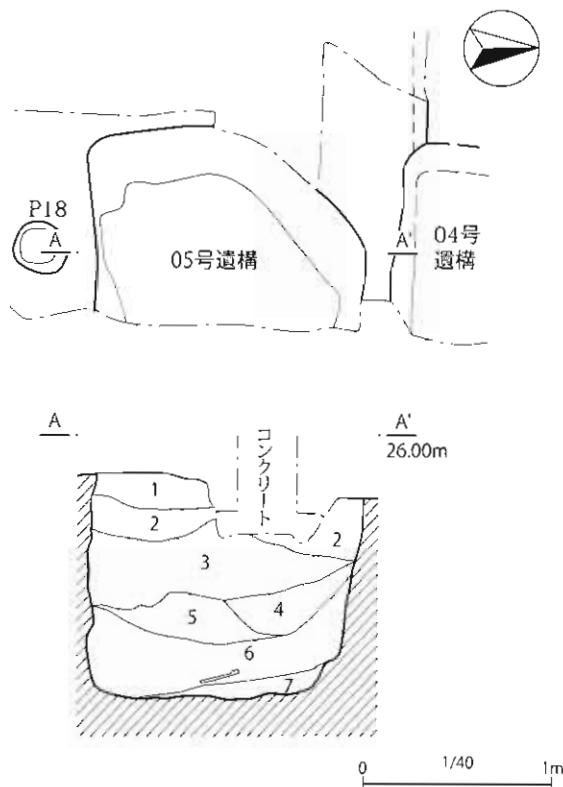
04 は土器の灯明受皿である。在地産と推測され、キラが施されている。

05・06 は陶器の溲瓶・徳利である。05 は、美濃・瀬戸産の溲瓶で、覆土 5 層中より完形で出土した。06 は、美濃・瀬戸産の高田徳利で、胸部に「庄」の釘書きがある。

07・08 は磁器の仏飯器である。両者とも肥前産で、07 は墨付けに墨書がある。08 は見込に振り物が観察される。

遺構時期：17世紀末葉から 19世紀中葉の遺物が出土し

た。18世紀後葉から19世紀中葉が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は18世紀後葉から19世紀中葉以降と推測される。



第8図 第05号遺構



写真12 05号遺構完掘(東から)



写真13 05号遺構土層断面(東から)

番 位 (色調)	主体土 土	混入物(上段:粒径cm、下段:混入量)				主な 遺物	総 数 り 性	備考
		暗褐色土	ローム	焼土	炭化物			
1 [(10YR 3/4)]	—	0.3~0.8 少量	0.2~0.8 微量	0.1~0.8 少量	~0.3 微量	—	—	○○灰 微量 0.3~0.8
2 [(10YR 3/4)]	—	0.3~1.5 少量	0.3~0.5 微量	0.3~0.8 微量	~0.3 微量	—	—	○○灰 微量 0.3~0.8
3 [(10YR 4/4)]	—	0.5~0.3 多量	~0.3 微量	~0.3 微量	0.5~0.8 少量	—	—	△○
4 [(10YR 3/4)]	—	0.3~0.8 少量	~0.3 微量	—	~0.3 微量	—	—	○○
5 [(10YR 4/4)]	—	0.3~1.0 中量	~0.3 微量	~0.3 微量	~0.3 微量	—	—	△○
6 [(10YR 3/4)]	—	0.3~0.8 微量	0.5~0.8 微量	0.3~1.0 微量	~0.3 微量	—	—	○○
7 [(10YR 3/4)]	—	0.5~1.0 多量	—	—	—	—	—	△○



写真14 05号遺構出土遺物

■第06号遺構(土坑)

位 置：本遺構は、調査区北側のA-3・4グリッドに位置し、西側が攪乱に切られる(第9図、写真15・16)。遺構確認面までの深さは、現地表面から約0.89m下であり、標高は約25.76mである。主軸方位はN-87°-Wである。

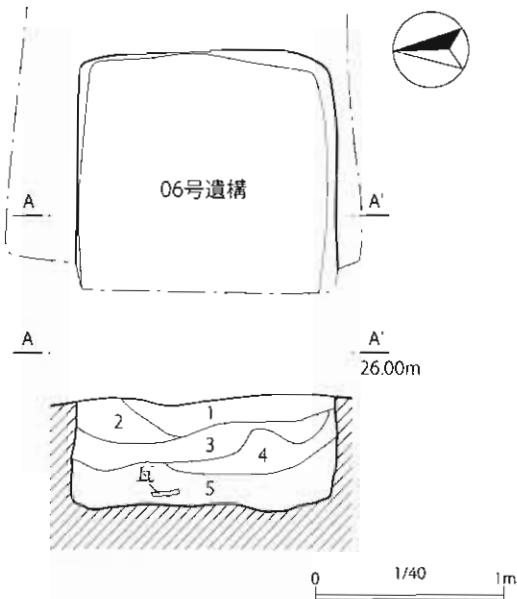
形 態：本遺構は土坑である。平面形は、西側が攪乱に切られるものの、長方形を呈するものと思われる。断面形は、箱形を呈する。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直である。底面・壁面ともに平滑に調整され、コーナーはほぼ直角に曲がる。

規 模：西側が攪乱に切られるため、全体の規模は不詳であるが、確認された規模は、長軸約1.38m以上×短軸約1.27m×深さ約0.63mを測る。

覆 土：覆土は5層に区分される。1層は、暗褐色土を主体とし、ロームブロックを中量含む。2層から4層は、土色や混入物の量は異なるものの、不規則な堆積を呈することから、人為的に埋め戻されたと考えられる。5層は、暗褐色土を主体とし、ロームブロック・焼土・炭化物・灰を微量から少量含んでいる。凹レンズ状を呈することから、自然埋没と考えられる。

検出遺物：総破片数222点、総重量3,192g。材質別の点数は、磁器14点(278g)、炻器3点(154g)、陶器27点(1,070g)、土器144点(649g)、瓦1点(742g)、鉄製品22点(47g)、銅製品3点(11g)、石製品5点(234g)、その他3点(7g)である(第21図、第7・8表、写真17)。

01は磁器の蓋物である。肥前産で、高台に砂目がある。



層位 (色調)	混入物(上段:粒径cm、下段:混入量)				主な遺物	腐・粘 り性	備考
	暗褐色土 [10YR 3/4]	ローム 土	灰土	炭化物			
1 [10YR 3/4]	—	0.3~1.0	~0.1	~0.5	0.5~1.0 少量	—	○○灰 少量 0.5
2 [10YR 3/4]	—	~0.1	~0.5	0.5~1.0	~0.1 微量 中量 少量	—	○○灰 微量 0.1~0.5
3 [10YR 5/3]	—	~0.3	—	~1.0	—	—	○○灰 多量 0.1~0.5 微量 微量 少量
4 [10YR 5/3]	—	0.3~0.5	~0.2	~0.3	~0.3 微量 微量 微量	—	○○灰 微量 0.5
5 [10YR 3/4]	—	0.1~1.0	~0.3	0.5~1.0	—	—	○○灰 微量 0.3 微量 灰土 少量

第9図 第06号遺構



写真 17 06号遺構出土遺物

02・03は土器の灯明皿・灯明受皿である。両者とも在地産で、02の灯明皿の内面と、03の灯明受皿の底部及び口縁部に煤が付着している。

04は陶器の徳利である。美濃・瀬戸産の高田徳利で、胴部に釘書きがある。

05は煙管の雁首である。羅字の左側に繋ぎがあり、火皿には煙草が付着している。

06は陶器の香炉である。美濃・瀬戸産で、外面に鉄釉が施され、内面及び底部は無釉である。

遺構時期: 17世紀末葉から18世紀中葉の遺物が出土した。17世紀末葉から18世紀中葉が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は17世紀末葉から18世紀中葉以降と推測される。

■第07号遺構(土坑)

位置: 本遺構は、調査区北東側のA-4・5グリッドに位置し、南西側の一部が攪乱に切られ、北側は調査区外へ延びる(第10図、写真19~21)。遺構確認面までの深さは、現地表面から約0.87m下であり、標高は約25.48mである。主軸方位はN-4°-Eである。

形態: 本遺構は土坑である。平面形は、北側が調査区外へ延び、南西側が攪乱に切られるが、隅丸長方形を呈するものと思われる。断面形は、箱形を呈するが、南側のみ壁面に半円形の掘り込みがありオーバーハングしている。このため底面形は、隅丸長方形を呈する。底面は平坦であり、西側・東側の壁面はほぼ垂直である。底面・壁面とともに平滑に調整され、南側のオーバーハング部分のみ未調整で工具痕が残る。

規模: 北側が調査区外へ延び、南西側が攪乱に切られるため、全体の規模は不明であるが、確認された規模は、長軸約1.62m以上×短軸約1.26m×深さ約0.81mを測る。オーバーハング部分は、壁面より奥行き約0.28mを測る。

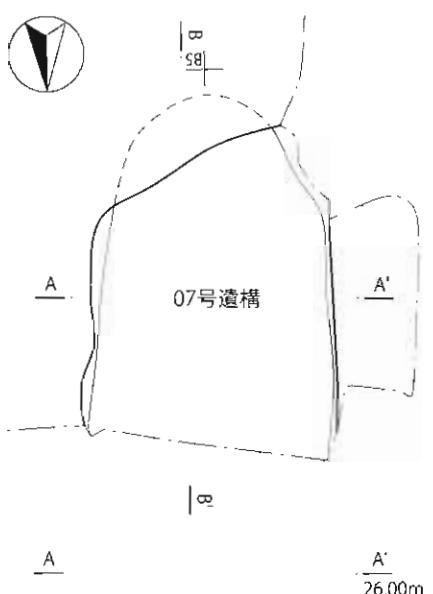
覆土: 覆土は4層に区分される。1層は、褐色土を主体とし、ロームブロックを中量含む。2・3層は、褐色土を主体とし、遺物は主にこの層から出土した。4層は、暗褐色土を主体とし、ロームブロックを中量含む。覆土の堆積状況は凹レンズ状を呈する。



写真 15 06号遺構完掘(南西から)



写真 16 06号遺構土層断面(西から)



層 主 体 土 位 (色調)	種 場 色 土	測定値(上段:粒径cm. 下段:混入量)				主な 遺 物	繊 維 性	備 考
		ローム	鐵 土	炭化物	粘土			
1 (10YR 4/4)	—	0.1~1.5	0.3~0.5	0.5~1.0	—	—	—	△△
2 (10YR 4/4)	—	0.3~0.8	0.3~2.0	0.3~0.8	—	—	—	○○
3 (10YR 4/4)	—	少量	中量	少量	—	—	—	△△
4 (10YR 3/4)	—	0.5~3.0	~0.5	~0.3	—	—	—	△△



写真 19 07号遺構完掘(北から)

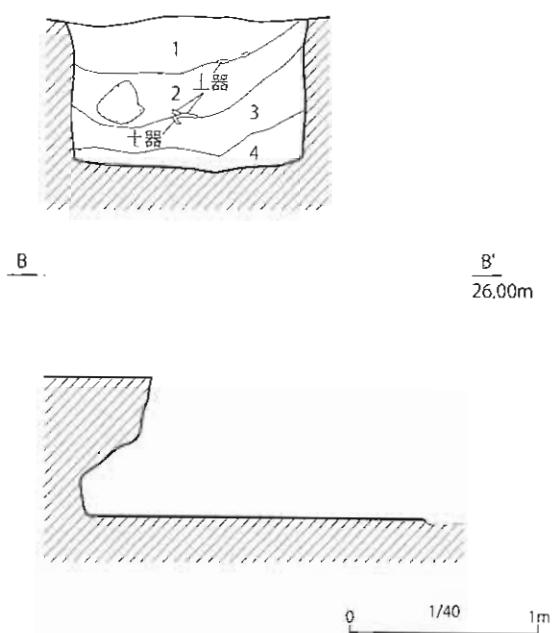


写真 20 07号遺構土層断面(北から)



写真 18 07号遺構出土遺物



写真 21 07号遺構オーバーハング部分(北から)

検出遺物：総破片数 435 点、総重量 8,661g。材質別の点数は、磁器 44 点 (555g)、炻器 16 点 (308g)、陶器 97 点 (2,992g)、土器 262 点 (3,809g)、瓦 8 点 (694g)、鉄製品 1 点 (7g)、銅製品 3 点 (12g)、石製品 3 点 (278g) その他 1 点 (6g) である (第 22 図、第 9 表、写真 18)。

01 から 04 は陶器・土器の皿である。01 は、京都・信楽産の陶器で、見込に目跡がある。02 は、京都・信

楽産の陶器で、底部に「御菩薩」の陰刻がある。03・04は、在地産の土器かわらけ皿である。

05・06は磁器・陶器の碗である。05は、白磁の丸碗で、肥前産である。06は、陶器の碗で、产地は不詳であるが、胴部に白泥による象嵌が施されている。胎土は灰白色である。

07・08は磁器・陶器の鉢である。07は、肥前産の磁器で、見込に擦痕が認められる。08は、美濃・瀬戸産の陶器で、御深井釉が施される。外面の腰下は無釉である。09は陶器の蓋である。外面に鉄釉が施され、胎土は乳褐色である。

10は土器の焙烙である。在地産で、胴部に煤が付着している。

11は陶器の徳利である。美濃・瀬戸産の高田徳利で、胴部に「中」の釘書きがある。

12は美濃・瀬戸産の陶器である。半截竹管によるヘラ削りを縦位に5箇所施し、外面に御深井釉を施している。

13は陶器の香炉である。美濃・瀬戸産で、外面に灰釉が施されている。底部及び内面は無釉である。

遺構時期：17世紀後葉から18世紀前葉の遺物が出土した。17世紀後葉から18世紀前葉が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は17世紀後葉から18世紀前葉以降と推測される。

■第08号遺構(土坑)

位置：本遺構は、調査区東側のA・B-5グリッドに位置する(第11図、写真22・23)。遺構確認面までの深さは、現地表面から約0.81m下であり、標高は約25.60mである。主軸方位はN-6°-Eである。

形態：本遺構は土坑である。平面形は、長方形を呈する。断面形は、箱形を呈する。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直である。底面・壁面とも平滑に調整され、コーナーはほぼ直角に曲がる。

規模：確認された規模は、長軸約1.64m×短軸約0.96~1.02m×深さ約0.43~0.47mを測る。

覆土：覆土は7層に区分される。1層は、ローム土を主体とし黄味を帯びる。2層から5層までは、暗褐色土を主体とし、ローム粒・炭化物・焼土粒を少量含む。

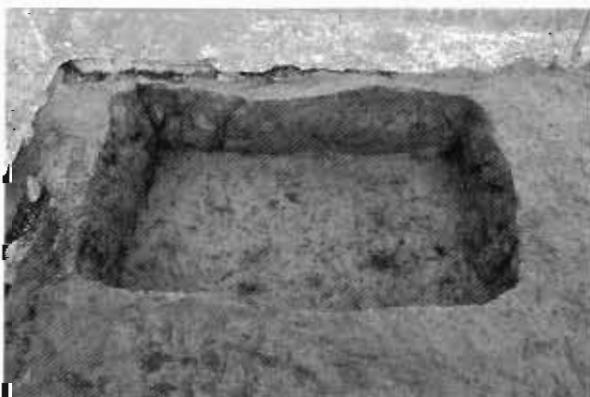
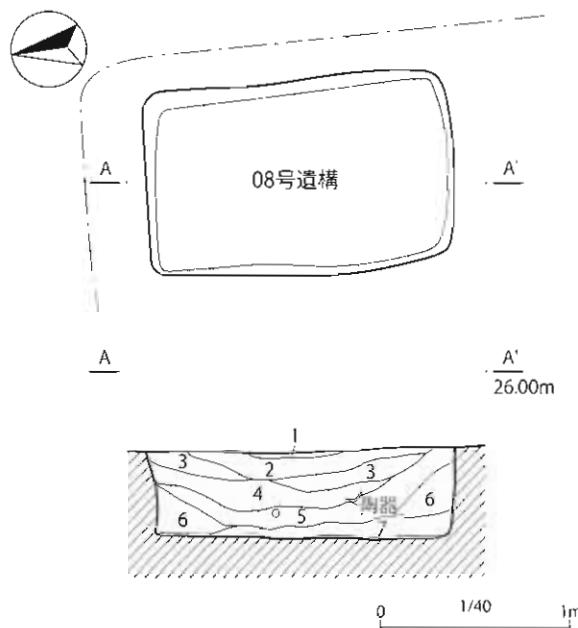


写真22 08号遺構完掘(西から)



層 位 (色調)	混入物(上段: 粗颗粒、下段: 混入物)				主な 構 造物	備 考
	土 土	ローム 粒	焼土	炭化物		
1 (1)	—	—	—	—	—	ロームブロック層
2 (10YR 3/4)	0.5~1.0 少量	0.3~0.8 微量	0.5~0.8 微量	—	—	灰 少量 0.3~1.0
3 (10YR 3/4)	0.3~1.0 中量	0.1 微量	0.3~0.8 微量	—	—	灰 微量 ~0.1
4 (10YR 3/3)	0.1~0.3 微量	~0.1 微量	0.1~0.3 微量	—	—	灰 微量 0.5~1.0
5 (10YR 3/3)	0.1~0.3 少量	~0.1 微量	0.3~1.0 微量	—	—	灰 微量 0.5
6 (10YR 4/4)	0.1~0.3 中量	~0.1 微量	0.5~1.0 微量	—	—	—
7 (10YR 4/6)	0.1~0.3 多量	~0.1 微量	0.1~0.3 微量	—	—	—

第11図 08号遺構

特に5層は、炭化物・焼土粒を部分的に多く含む。6・7層は、暗褐色土を主体とし、ローム粒を多く含み、黄味を帯びる。覆土の堆積状況は、凹レンズ状を呈する。

検出遺物：総破片数955点、総重量11.638g。材質別の点数は、磁器19点(562g)、炻器54点(2.224g)、陶器54点(1.810g)、土器801点(4042g)、瓦7点(2.663g)、鉄製品13点(149g)、石製品4点(176g)、その他3点(12g)である(第23図、第10・11表、写真24)。

01から04は磁器・陶器の碗である。01は、肥前産



写真23 08号遺構土層断面(西から)



写真 24 08号遺構出土遺物

の磁器で、丸碗の口縁部破片である。02は、肥前産の磁器半球碗である。底部に染付の銘が確認できるが、破片であるため詳細は不明である。03は、肥前波佐見産の磁器で、くらわんか手の碗である。見込にコンニャク印判による五弁花文が描かれている。底部に崩し文字で「大明年製」の銘がある。04は、京都・信楽産の陶器で、杉形の碗に鉄釉と呉須を用いて松文を描いている。

05・06は陶器・炻器の鉢である。05は、肥前産の京焼風陶器で、底部に「富永」の銘が陰刻されている。見込には楼閣山水文が描かれている。06は、肥前唐津産の陶器で、三島手の鉢である。丸形折縁で、見込に砂目が、高台に目跡が観察される。

07は、在地産土器の火鉢である。

08は磁器の紅猪口である。肥前産で、口縁部外周に雨降文が描かれている。

09は、美濃・瀬戸産の陶器の徳利である。胴部上半を打ち欠き、おはぐろ壺に転用している。また、高台の一部を打ち欠いて、破断面に墨書による「匁」の銘がある。

10は、石製品の基石である。素材に頁岩を用いている。
遺構時期：主に17世紀後葉から18世紀中葉の遺物が出土した。17世紀末葉から18世紀中葉が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は17世紀末葉から18世紀中葉以降と推測される。

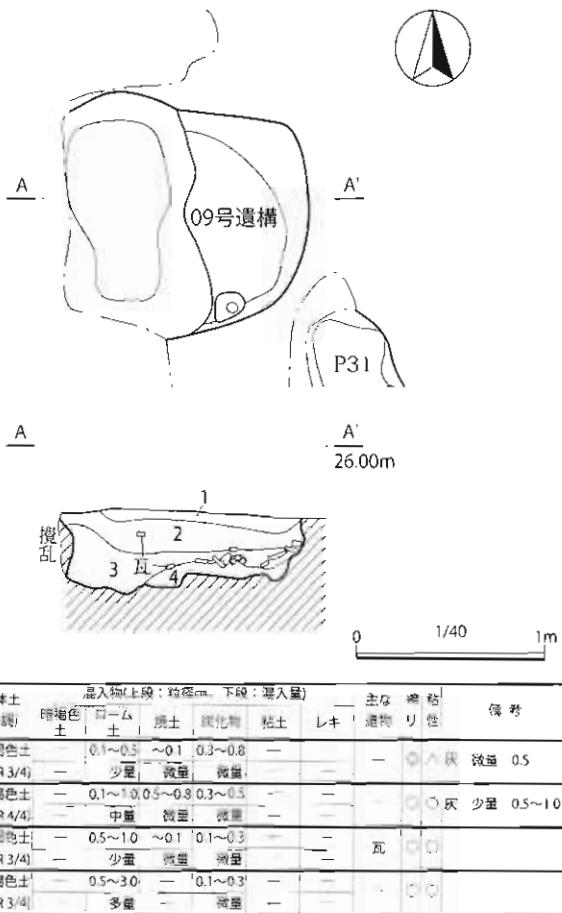
■第09号遺構（植栽痕）

位置：本遺構は、調査区東側のB-4・5グリッドに位置し、西側が攪乱に切られる（第12図、写真25・26）。遺構確認面までの深さは、現地表面から約0.83m下であり、標高は約25.62mである。

形態：本遺構は植栽痕である。平面形は、西側が攪乱に切られるが、楕円形を呈するものと思われる。断面形は、U字形を呈する。底面・壁面ともに未調整であり、木根の跡や一部に工具痕がみられる。このため、底面・壁面とともに凹凸が顕著である。

規模：西側が攪乱に切られるため、全体の規模は不明であるが、確認された規模は、長軸約1.25m以上×短軸約1.22m×深さ約0.41mを測る。

覆土：覆土は4層に区分される。1層は、暗褐色土



第12図 09号遺構



写真 25 09号遺構完掘 (南から)

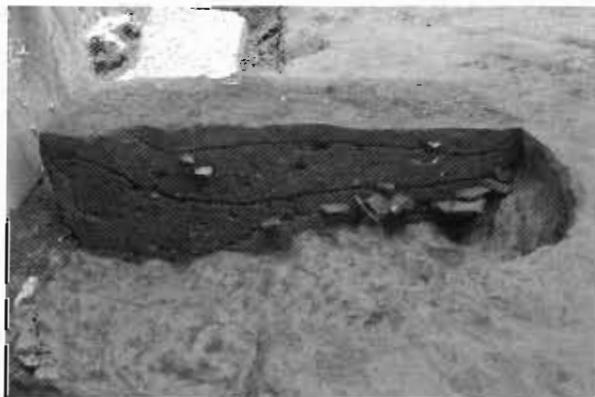


写真 26 09号遺構土層断面 (南から)

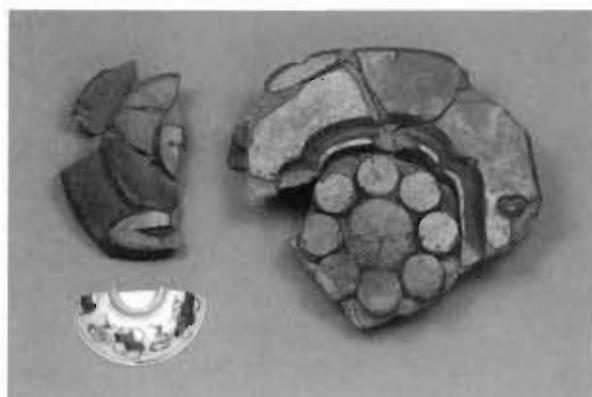


写真 27 09号遺構出土遺物

を主体とし、ローム粒・焼土・炭化物に加え、灰を微量に含む。2層は、褐色土を主体とし、ロームブロックを中量含む。1層同様に灰を含む。3層は、暗褐色土を主体とし、ロームブロック・焼土・炭化物を含む。4層は、ロームブロックを主体とし、暗褐色土・炭化物を微量含む。3層からは瓦が多数出土した。植木を移植した後の窪みに瓦を廃棄したものと考えられる。

検出遺物：総破片数 377 点、総重量 24.956g。材質別の点数は、磁器 23 点 (281g)、炻器 5 点 (347g)、陶器 49 点 (728g)、土器 9 点 (257g)、瓦 248 点 (23,274g)、鉄製品 3 点 (32g)、その他 40 点 (37g) である (第 24 図、第 12 表、写真 27)。

01・02 は鬼瓦である。01 は、瓦当に戸田家の家紋である九曜文が用いられている。02 は、破片であるため詳細は不明であるが、01 と同一個体である可能性も考えられる。瓦は、上記のほかにも多数出土しており、01 とは別個体の鬼瓦破片 (家紋部分の一部のみ) などがある。

その他の遺物としては、美濃・瀬戸産磁器の端反碗蓋などが出土している。

遺構時期：17世紀後葉から19世紀中葉の遺物が出土した。19世紀前・中葉が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は 19世紀前・中葉以降と推測される。

■第 16 号遺構 (植栽痕)

位置：本遺構は、調査区南西側の B-2 グリッドに位置する (第 13 図、写真 28・29)。P37・P38 を切る。また、東側が攪乱に切られ、南側は調査区外へ延びる。遺構確認面までの深さは、現地表面から約 0.52 ~ 0.64 m 下であり、標高は約 25.78 m である。

形態：本遺構は植栽痕である。平面形は、南側が調査区外へ延び、東側が攪乱に切られるが、ドーナツ形を呈するものと思われる。断面形は、皿状を呈する。底面・壁面ともに木根による凹

凸がみられる。底面・壁面ともに未調整であり、一部に工具痕がみられる。

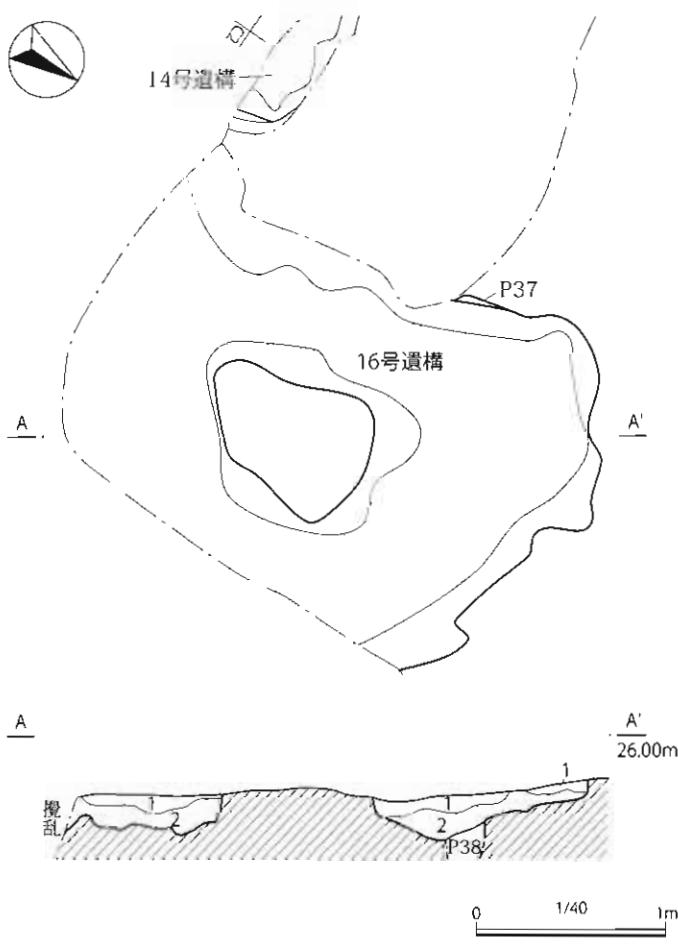
規模：南側が調査区外へ延び、東側が攪乱に切られるため、全体の規模は不明であるが、確認された規模は、長軸約 2.69 m 以上 × 短軸約 1.90 m × 深さ約 0.25 m を測る。

覆土：覆土は 2 層に区分される。いずれも暗褐色土を主体とし、ロームブロックを中量から多量含む。覆土の堆積状況は四レンズ状を呈する。

検出遺物：総破片数 23 点、総重量 941g。材質別の点数は、磁器 2 点 (11g)、陶器 6 点 (53g)、土器 2 点 (8g)、瓦 12 点 (859g)、銅製品 1 点 (10g) である。

いずれも小破片で出土量も少ないながら、肥前産の磁器碗や抉りの浅い丸瓦などが出土している。

遺構時期：検出された遺物は、18世紀中葉から明治時代のものを含むが、遺物量が僅かであるため詳細は不明である。



層	主体土 色(調)	混入物(上段:粗・多、下段:細・少)				主な 細 粒 物 理 的 性	備考
		褐褐色 土 (10YR 3/4)	ローム 土	焼土	炭化物		
1	-	0.1~1.0 中量	-	~0.3 微量	-	-	○ ○
2	暗褐色土 (10YR 3/4)	-	0.5~3.0 多量	-	~0.3 微量	-	○ ○

第 13 図 16号遺構

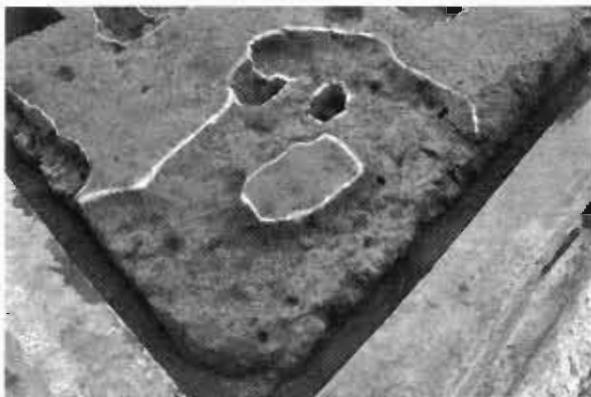


写真 28 16号遺構完掘 (南東から)



写真 29 16号遺構土層断面 (東から)

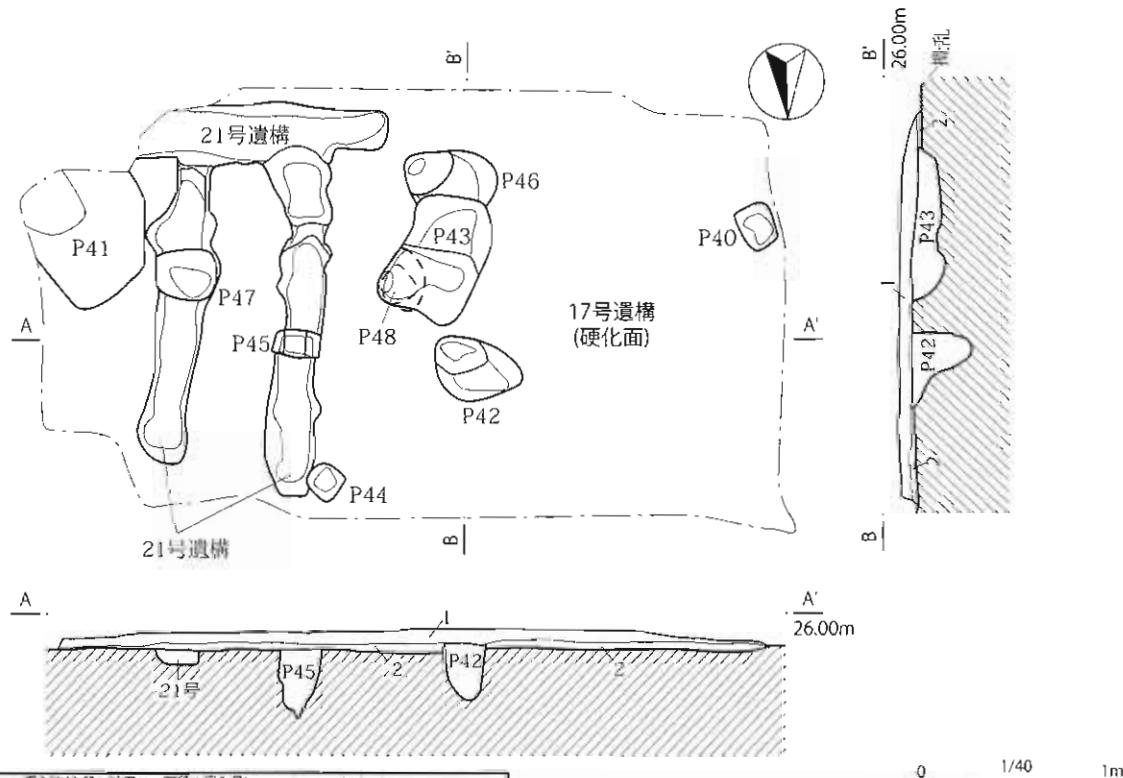
■第17号遺構(硬化面)

位置: 本遺構は、調査区中央やや東寄りのB-3・4グリッドに位置し、四方を攪乱(コンクリート基礎)に囲まれた範囲の全面で確認された(第14図、写真30・31)。硬化面は3面検出され、第2面はP42・P43に切られる。第3面はローム面直上にあたり、P40・P44に切られる。他に、21号遺構、P41・P45・P46・P47が検出されたが、ローム面同様に上面が硬化していることから、第3面はこれらの遺構を切っていると考えられる。遺構確認面までの深さは、現地表面から第1面までは約0.84m(標高25.92m)、第2面までは約0.92m(標高25.84m)、第3面までは約0.97m(標高25.79m)である。

形態: 本遺構は硬化面である。合計3面確認された。硬化面はいずれも平坦であり、ほぼ水平である。

規模: 四方が攪乱に切られるため、全体の範囲は不明であるが、確認された規模は、東西約3.93m×南北約2.26mを測る。層厚は、第1面から第2面上まで約0.08m、第2面上から第3面上まで約0.05m、第3面からロームまで約0.04mである。

堆積土: 硬化面を形成している堆積土は2層に区分される。1層は、第1面から第2面上までの堆積土で、褐色土を主体としている。2層は、第2面から第3面のローム上までの堆積土で、暗褐色土を主体としている。いずれも粘性はやや弱く、締まりは非常に強い。



層 位 (色調)	主堆土 土 (色調)	混入物(上段・粒径cm、下段・混入量)			主な 粘 性 物 質 レキ シ	固 結 性 能 力 考 察	
		褐 色 土 (10YR 4/4)	暗褐色 土 (10YR 3/4)	ローム 土 中量 微量	焼 土 微量 微量	灰化 物 微量 微量	
1	褐色土 (10YR 4/4)	—	—	0.1~0.3 0.1~0.5	—	—	—
2	暗褐色土 (10YR 3/4)	—	—	0.3~0.5 0.1~0.5	—	—	—

第14図 17号遺構



写真30 17号遺構完掘(東から)



写真31 17号遺構土層断面(北東から)

検出遺物:瓦なども含めてすべて細かく割れており、小破片ばかりであった。

第1面から第2面上の堆積土中から、総破片数106点、総重量716gが出土した。材質別の点数は、磁器20点(48g)、炻器1点(1g)、陶器29点(117g)、土器15点(20g)、瓦16点(392g)、鉄製品11点(27g)、石製品1点(1g)、ガラス製品9点(35g)、その他4点(75g)である。

肥前産の磁器碗や近代のガラス製品などが出土している。

第2面から第3面上の堆積土中から、総破片数74点、総重量483gが出土した。材質別の点数は、磁器11点(23g)、陶器37点(139g)、土器15点(43g)、瓦10点(275g)、鉄製品1点(3g)である。

外面に、一筆書きされた蛸唐草文が描かれた肥前産の磁器碗や器高の低い土器の焙烙などが出土している。

遺構時期: 第1面は、18世紀中葉から明治時代の遺物が出土した。19世紀前・中葉(幕末から明治時代)が量的主体をなすことから、この時期に使用された硬化面と推測される。

第2面は、18世紀中葉から19世紀中葉の遺物が出土した。19世紀前・中葉が量的主体をなすことから、この時期に使用された硬化面と推測される。

第3面は、遺物の出土がないものの、第2面との関係から、19世紀前・中葉以前に使用された硬化面と推測される。

■第18号遺構(土坑)

位置: 本遺構は、調査区北西側のA・B-2グリッドに位置する(第15図、写真32・33)。01号・12号遺構、P35・P39を切り、東側が攪乱に切られ、北側は調査区外へ延びる。遺構確認面までの深さは、現地表面から約0.68m下であり、標高は約25.76mである。主軸方位はN-6°-Eである。

形態: 本遺構は土坑である。平面形は東側が攪乱に切られ、北側が調査区外へ延びるため不詳である。断面形は、皿状を呈すると推測される。底面には凹凸がみられ、壁面はやや外傾して立ち上がる。底面・壁面ともに未調整である。

規模: 東側が攪乱に切られ、北側が調査区外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、確認された規模は、長軸約2.52m以上×短軸約0.98m以上×深さ約0.23~0.32mを測る。

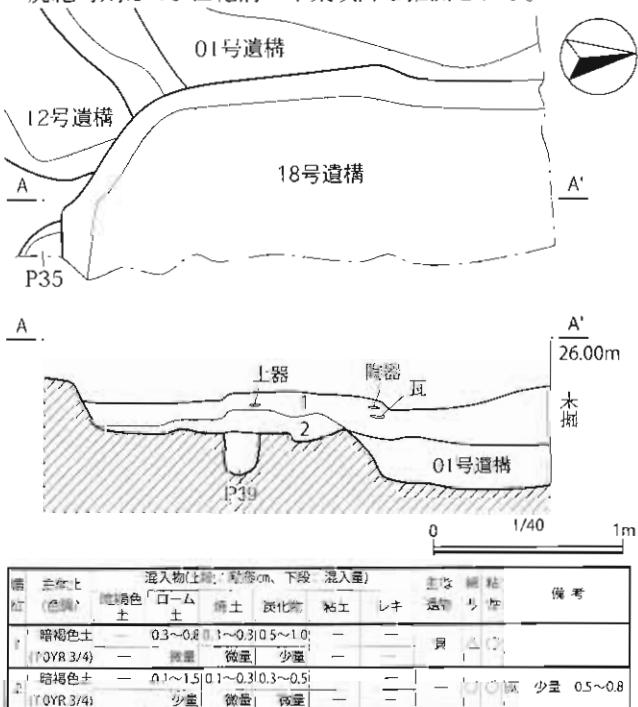
覆土: 覆土は2層に区分される。いずれも暗褐色土を主体とし、1層からは貝類が多く出土した。覆土の堆積状況は、ほぼ水平である。

検出遺物: 総破片数839点、総重量14.546g。材質別の点数は、磁器33点(262g)、炻器12点(408g)、陶器87点(1,326g)、土器101点(735g)、瓦131点(8,828g)、鉄製品16点(67g)、石製品5点(2,350g)、その他454点(570g)である(第25図、第13表、写真34)。

01は、土製品の人形で、在地産である。

その他の遺物としては、器高の低い土器の焙烙や、鉛透明釉の施された灯明皿などが出土している。

遺構時期: 17世紀末葉から19世紀中葉の遺物が出土した。19世紀前・中葉が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は19世紀前・中葉以降と推測される。



第15図 18号遺構



写真32 18号遺構完掘(南東から)



写真33 18号遺構土層断面(東から)



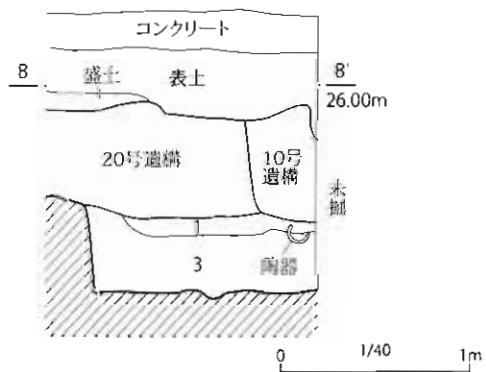
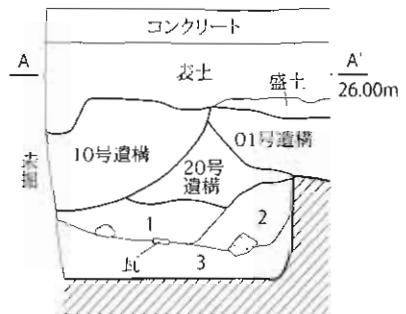
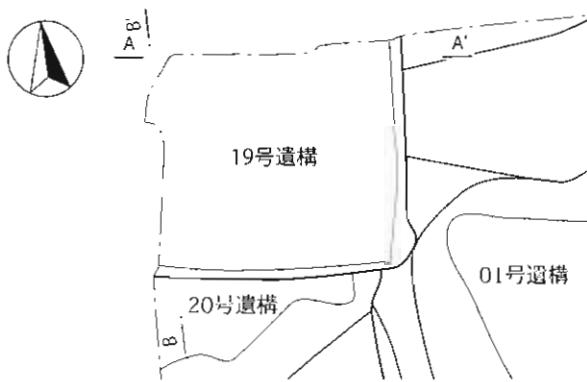
写真34 18号遺構出土遺物

■第19号遺構(土坑)

位置：本遺構は、調査区北西側のA-1グリッドに位置する(第16図、写真35・36)。1号・10号・20号遺構に切られる。また、北側と西側は、上部がコンクリート基礎に覆われており掘削することができなかった。遺構確認面までの深さは、現地表面から約0.90m下であり、標高は約25.37mである。主軸方位はN-83°Eである。

形態：本遺構は土坑である。平面形は北側と西側が掘削できなかったものの、長方形を呈するものと思われる。断面形は、箱形を呈する。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直である。底面・壁面ともに平滑に調整され、コーナーはほぼ直角に曲がる。

規模：北側と西側が掘削できなかったため、全体の



層 位 (色調)	混入物(上段: 約0.8cm、下段: 混入量)			全厚 cm	縦 幅 cm	横 幅 cm	備考
	暗褐色土	ローム	焼土				
1 (10YR 3/2)	-	0.1~0.5	0.1~0.8	0.1~0.8	-	-	○△
2 (10YR 3/4)	-	微量	少量	少量	-	-	貝など△○ 遺物多数出土
3 (10YR 3/6)	暗褐色土	0.1~0.5	0.1~0.8	0.1~0.8	-	-	△○ 灰微量 0.3~0.5
	中量	少量	微量	-	-	-	

第16図 19号遺構

規模は不明であるが、確認された規模は、長軸約1.38m以上×短軸約1.20m以上×深さ約0.70mを測る。

覆土：覆土は3層に区分される。1・2層は、暗褐色土を主体とし、3層との境において遺物や貝類が多数出土した。このことから、本遺構廃絶後にごみ穴として使用されたことが窺われる。3層は、暗褐色土を主体とし、ロームブロックを中量含む。覆土の堆積状況は、凹レンズ状を呈する。

検出遺物：総破片数1,240点、総重量19,179g。材質別の点数は、磁器158点(978g)、炻器28点(2,078g)、陶器85点(1,368g)、土器238点(2,768g)、瓦13点(2,382g)、鉄製品38点(204g)、銅製品4点(17g)、石

製品 5 点 (35g)、その他 671 点 (9,349g) である (第 26・27 図、第 14・15 表、写真 37)。

01・02 は磁器の皿である。両者とも肥前産で、01 は、見込にコンニャク印判による五弁花文が施されている。底部には「大明年製」の銘がある。破断面に漆継の痕跡がある。02 は、底部に渦「福」の銘がある。高台には砂目があり、高台内には目跡がある。

03 から 05 は土器の灯明皿・皿である。03 は、在地産の灯明皿である。口縁部に煤が付着している。04・05 は、在地産のかわらけ皿である。05 の上に 04 が伏せた状態で出土した。

06 から 08 は陶器の碗である。06 は、美濃・瀬戸産の陶器である。御深井釉を施し、高台は無釉である。07



写真 35 19号遺構完掘 (西から)



写真 36 19号遺構土層断面 (南から)



写真 37 19号遺構出土遺物

は、京都・信楽産の陶器半球碗で、金泥などを用いて菊花文の色絵を施している。08 は、京都・信楽産の陶器で、白泥などで施釉している。胴部に墨書により「一□ちりぬ 床□」とある。

09 は土器の焼塙壺蓋である。型打成形され、内面に布目の痕跡がある。

10 は磁器の鉢である。肥前産で、外面に笹文が描かれている。

11 は煙管の吸口である。

遺構時期：17世紀前葉から18世紀中葉の遺物が出土した。18世紀前・中葉が量的主体をなすことから、遺構の廃絶時期は18世紀前・中葉以降と推測される。

■その他の出土遺物 (第 28 図、第 16 ~ 18 表、写真 38)

近世の遺物のうち、上記に掲載した遺構以外の遺構から出土した遺物や、表上・試掘から出土した遺物の中から特徴的なもの 5 点を抽出した。また、近世以前の遺物から 3 点を抽出した。

01 は表土から出土した。磁器の鉢で、肥前産である。底部に染付けにより「大明宣德年製」の銘がある。

02 は表土から出土した。炻器の擂鉢で、堺・明石産である。

03 は 10 号遺構から出土した。在地産土器の灯明皿である。内・外間に煤が付着している。

04 は 13 号遺構から出土した。常滑産の陶器壺である。

05 は P12 から出土した。軒桟瓦の瓦当部分である。瓦当文様は、戸田家の家紋である九曜文を用いている。

06 は 07 号遺構から出土した。古墳時代後期の土師器である。甕の胴部で、外面の輪積み痕上にキザミを施している。

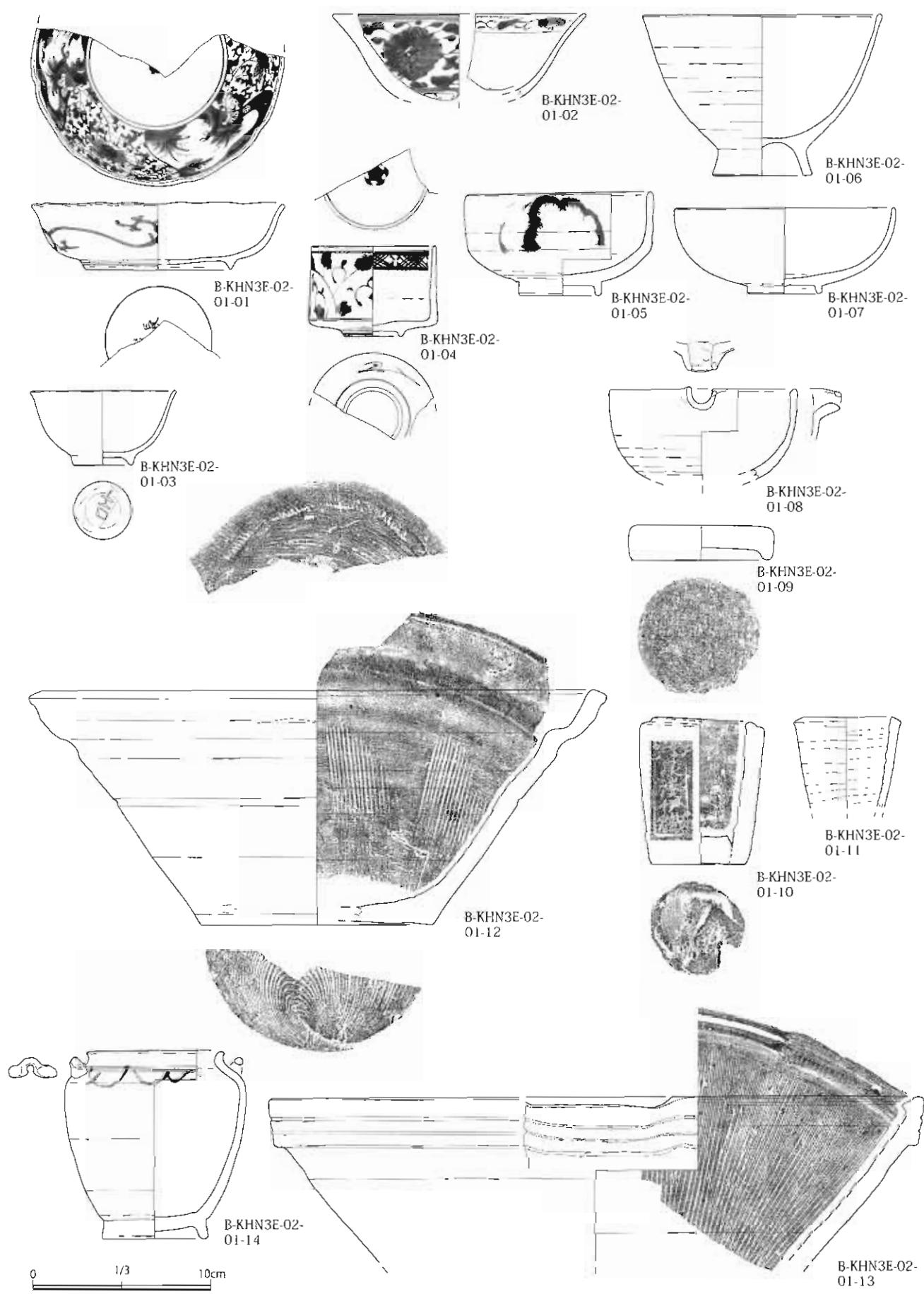
07 は 01 号遺構から出土した。古墳時代後期の須恵器である。高杯の脚部で、外面の裾部に自然釉が付着している。

08 は 06 号遺構から出土した。平安時代の須恵器で、甕の頸部から肩部である。内面に自然釉が付着している。

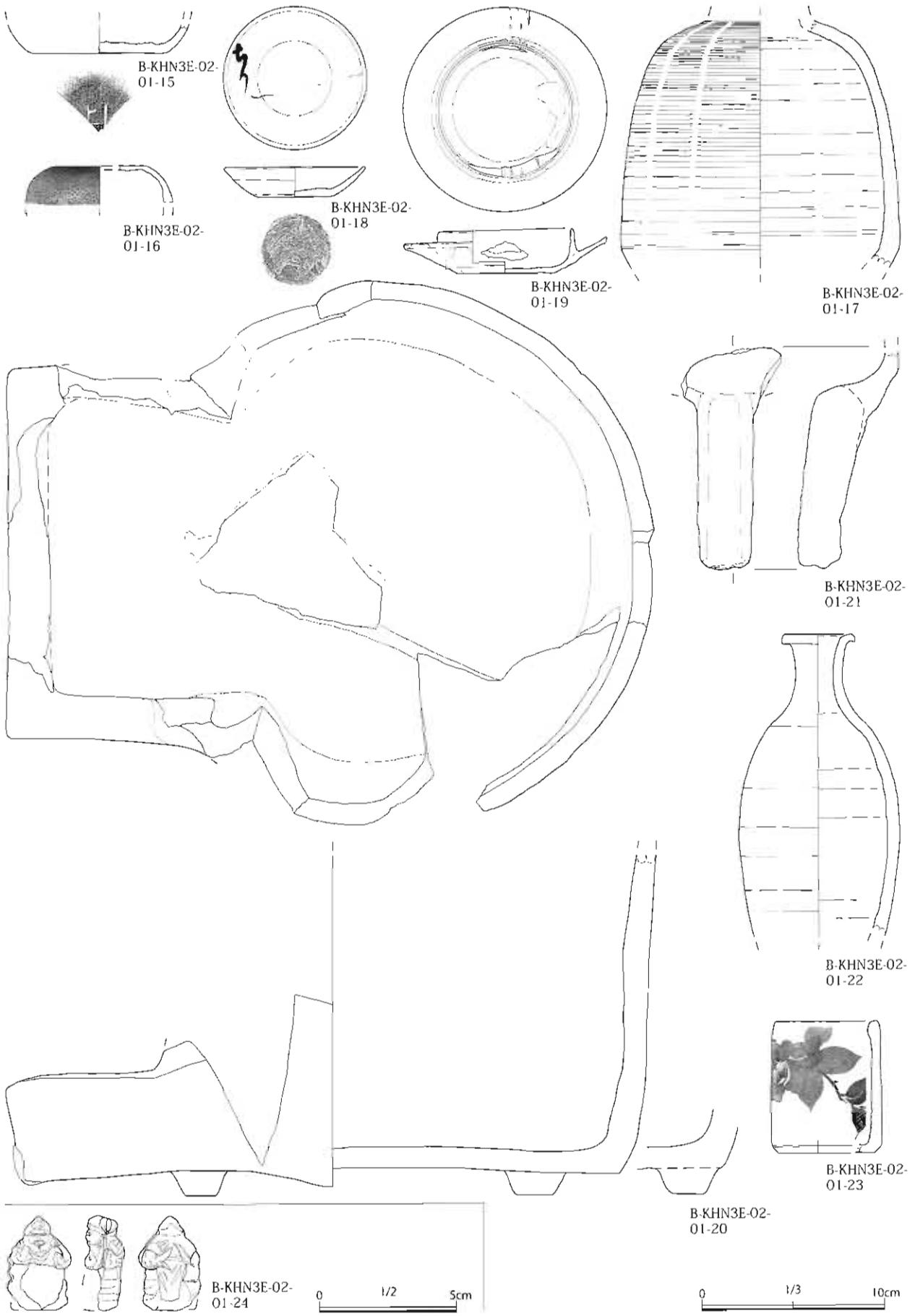
(山中)



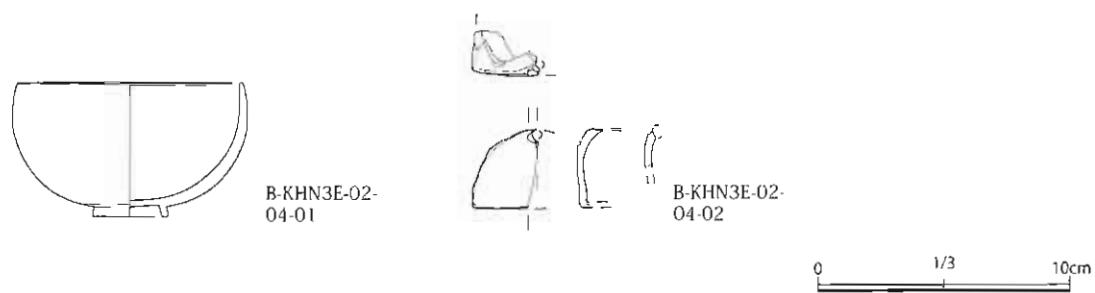
写真 38 その他の出土遺物 (近世)



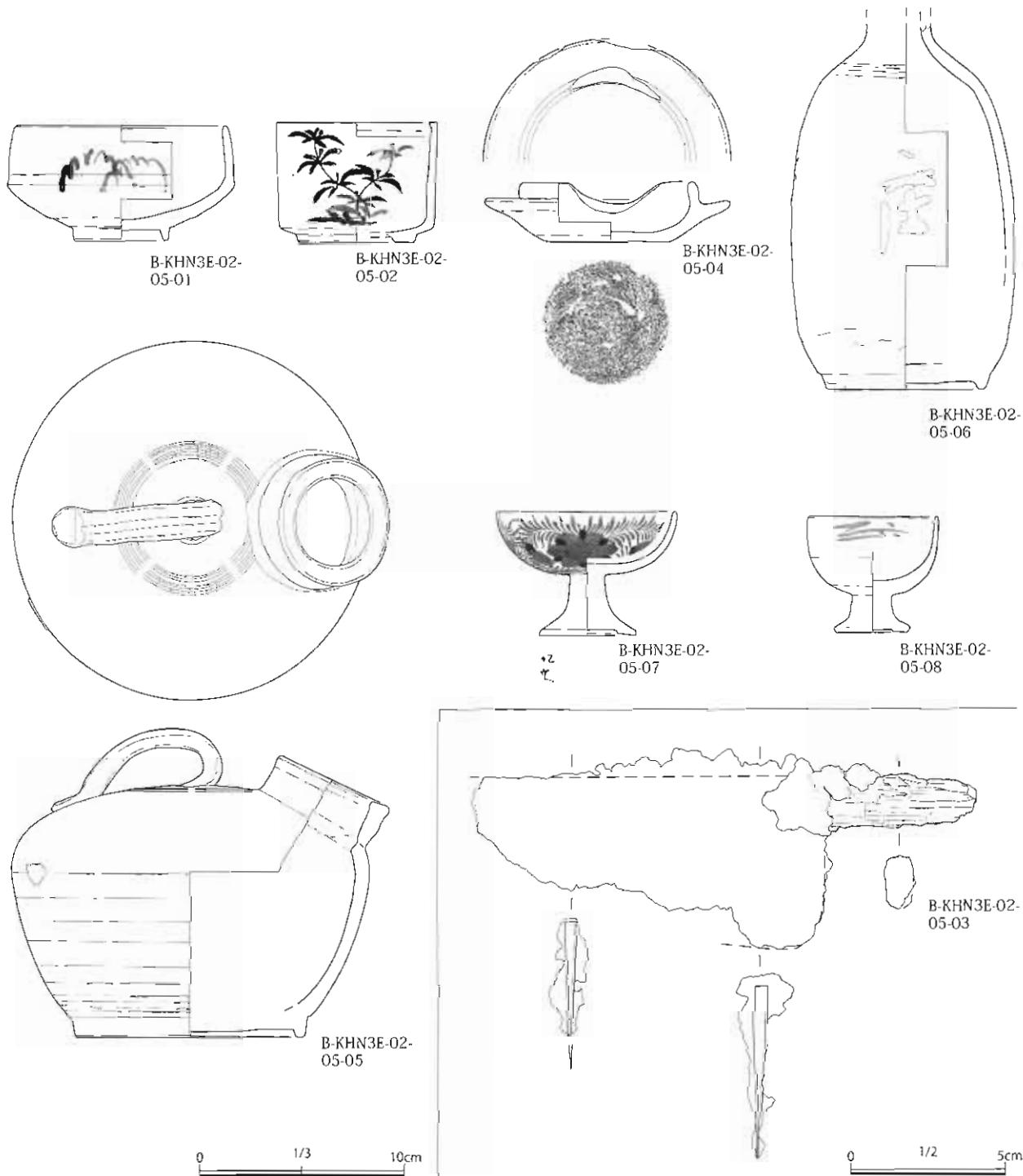
第17図 01号遺構出土遺物(1)



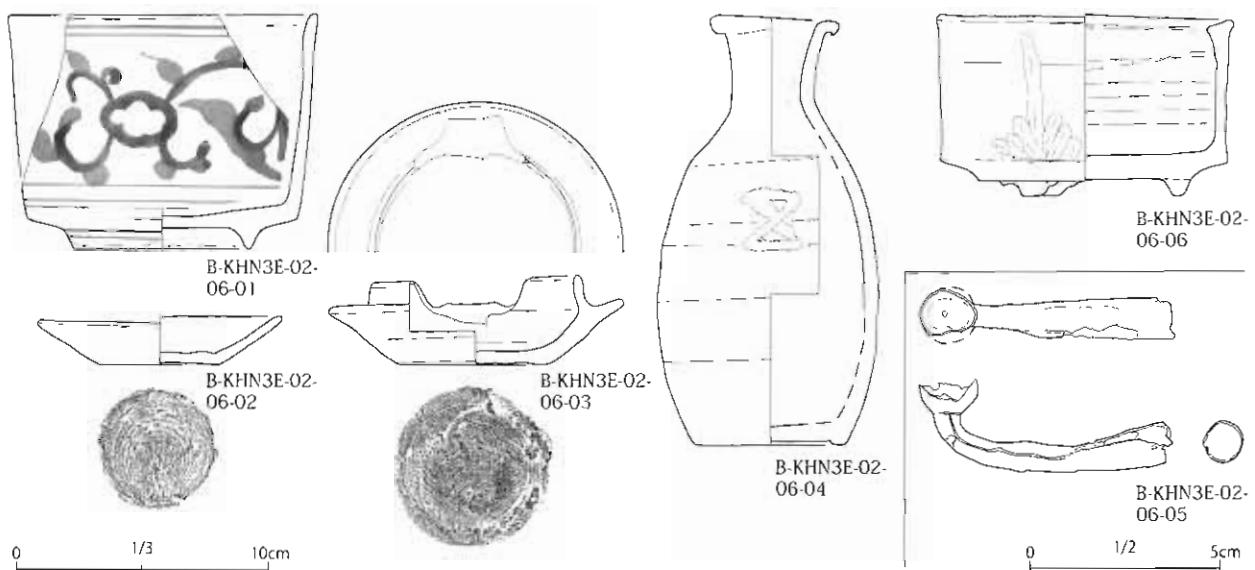
第 18 図 01 号遺構出土遺物 (2)



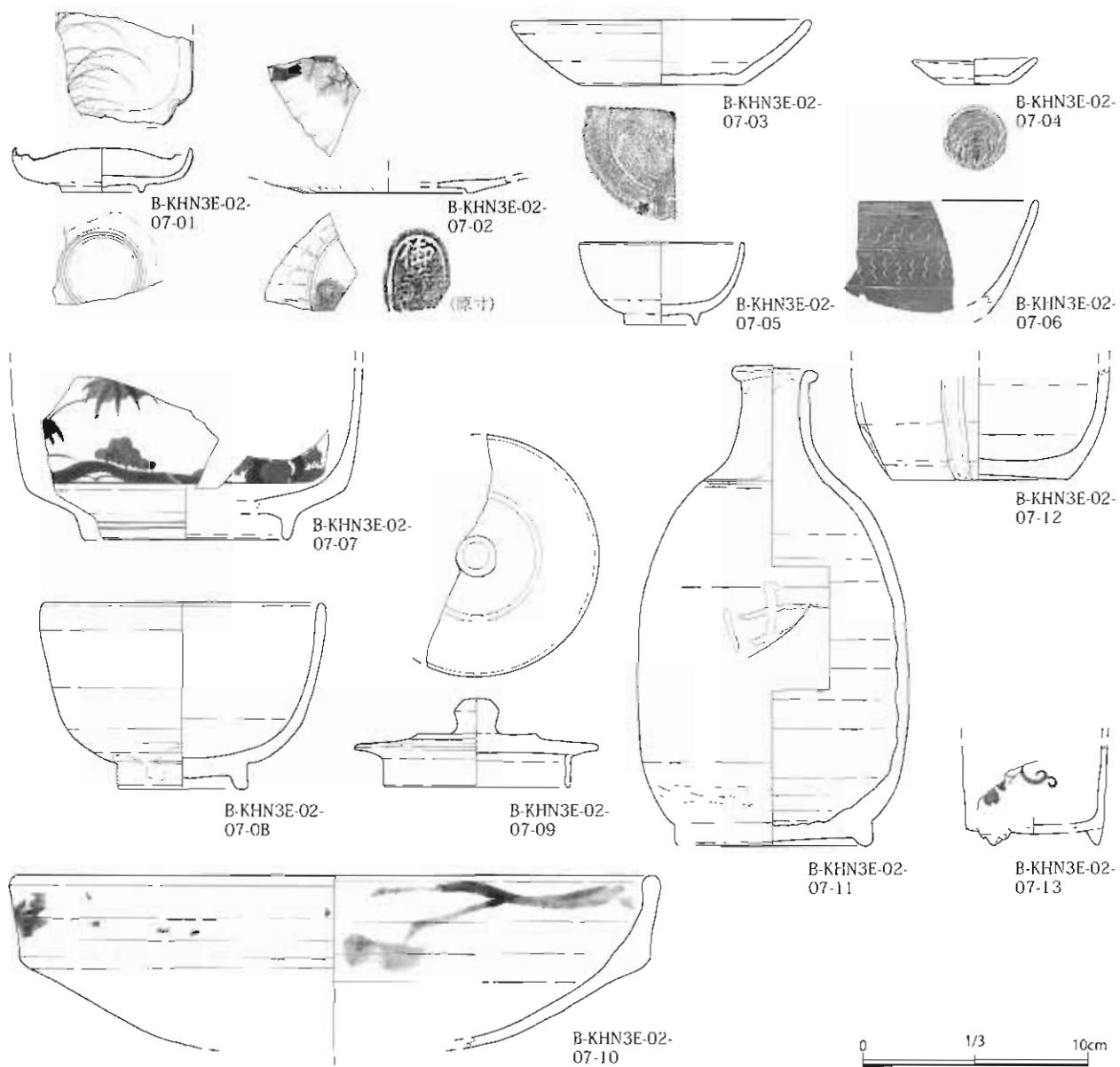
第19図 04号遺構出土遺物



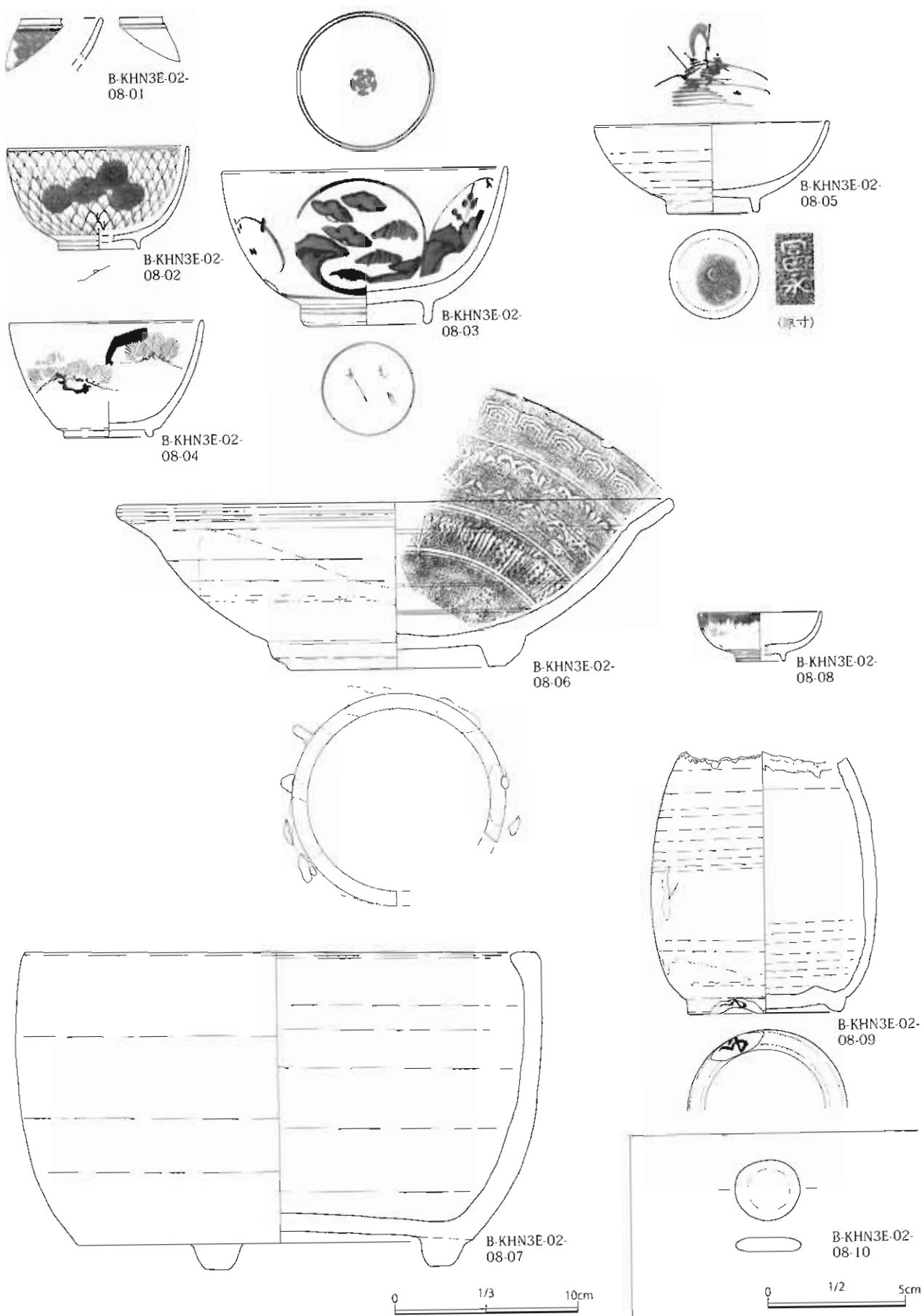
第20図 05号遺構出土遺物



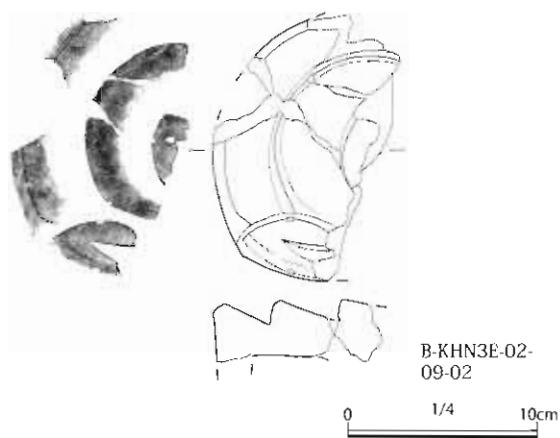
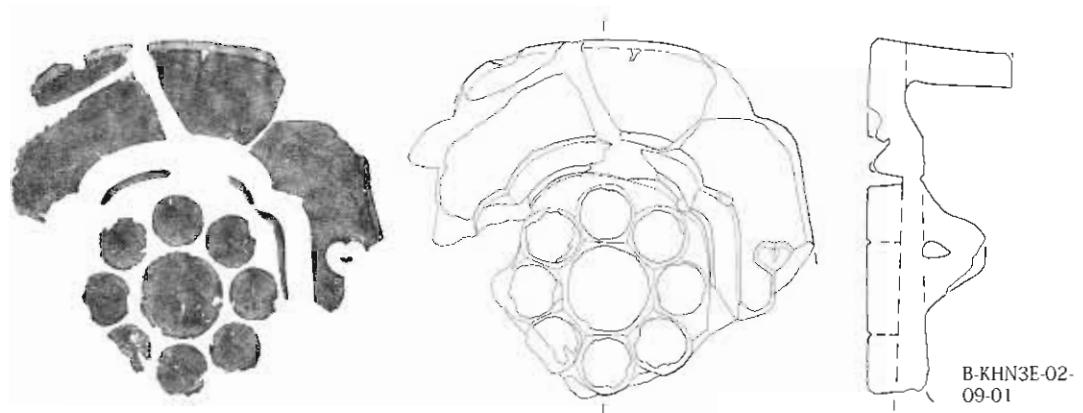
第21図 06号遺構出土遺物



第22図 07号遺構出土遺物



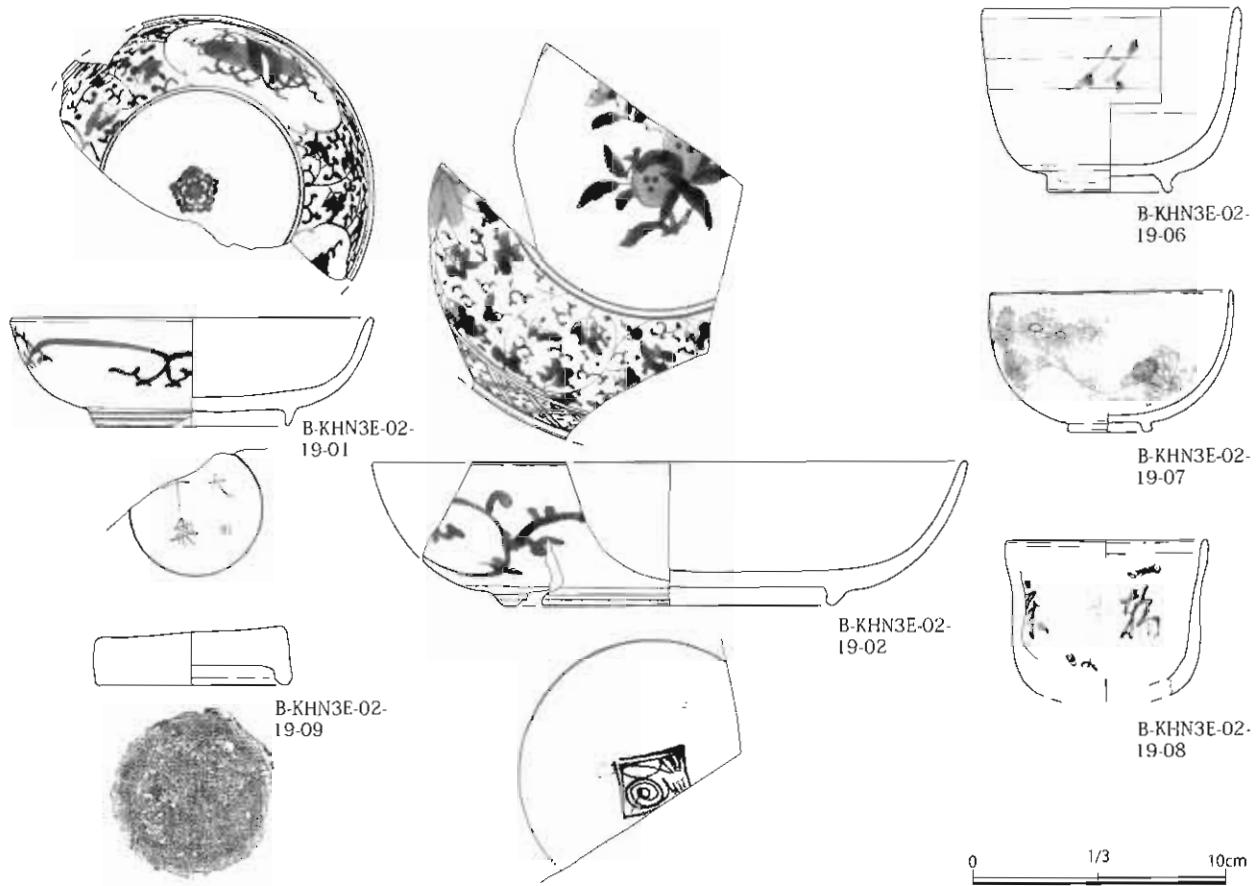
第23図 08号遺構出土遺物



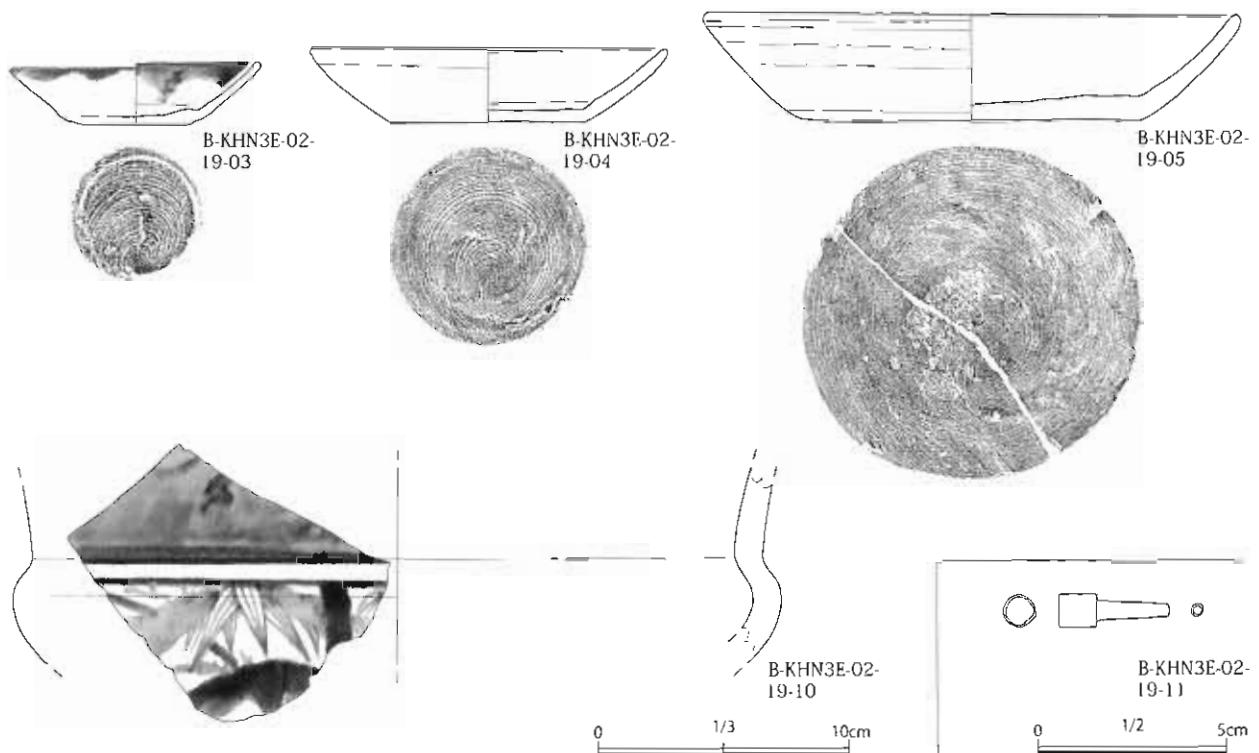
第24図 09号遺構出土遺物



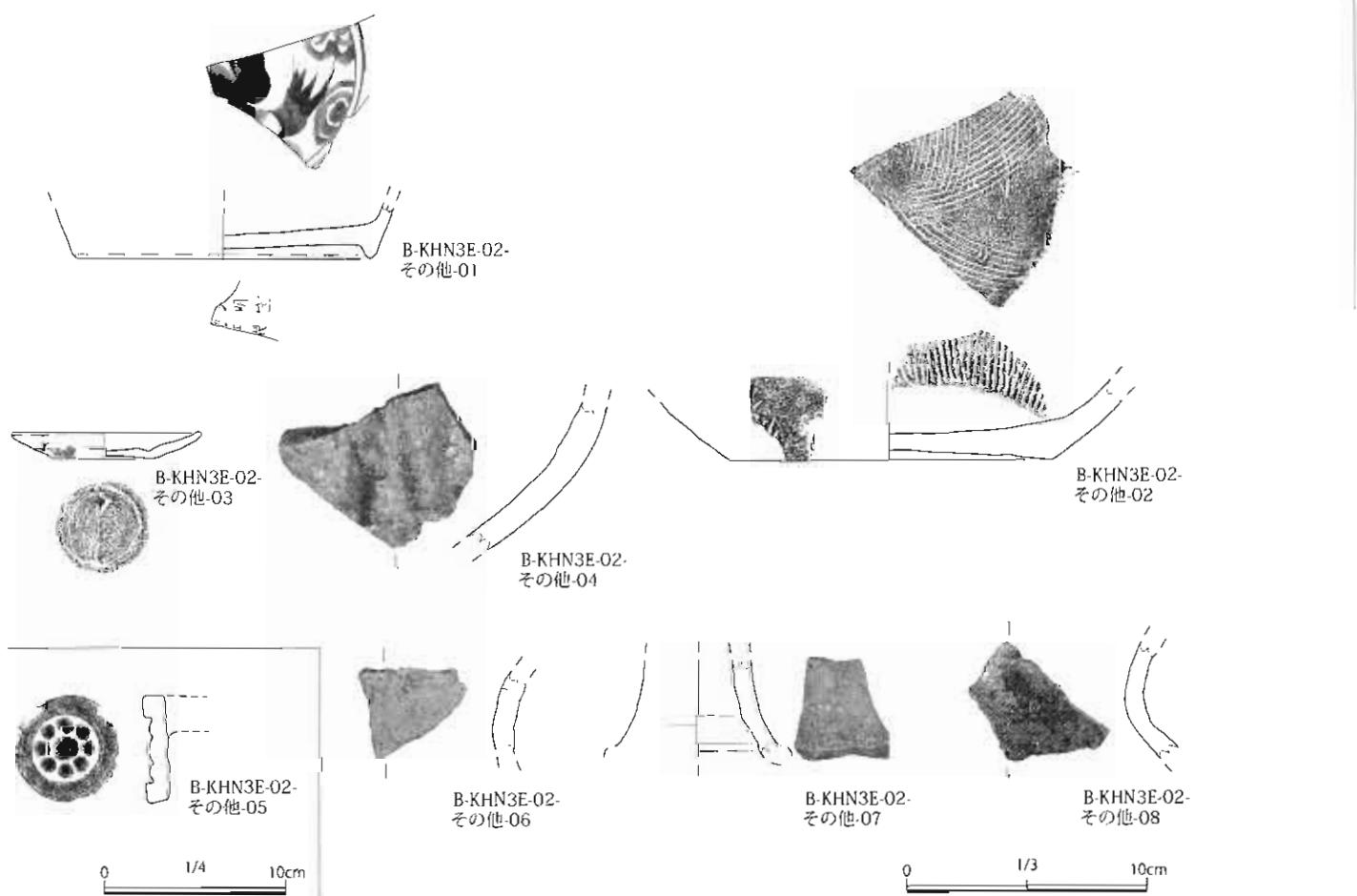
第25図 18号遺構出土遺物



第26図 19号遺構出土遺物(1)



第27図 19号遺構出土遺物(2)



第28図 その他の出土遺物

第2表 01号遺構出土陶磁器類観察表

No.	出土位置	材質	器種	形状特徴			寸法(mm)		重量(g)	寸法	装飾		胎土色	印・縞	推定製作地	備考			
				口径	脚高	底径	横幅	厚さ			内:模様外:文	モチーフ	描画特徴						
B-KHN3E-02-01-01	No.17	磁器	皿	楕円形 輪花	*140	27	*80	105		型打 削り高台	兔付 真頬(透明 釉)	内:圓内花唐草 文、見込み 外:如意頭唐草文 蟹	集描き	白色	高口裏口	紀州			
B-KHN3E-02-01-02	一括	磁器	碗	楕円形	*142	27	-	78		ロクロ 削り高台	青花 真頬(透明 釉)	内:線内唐草? 外:牡丹唐草?	集描き	白色		中国	景德镇		
B-KHN3E-02-01-03	括	磁器	碗	楕円形	78	42	33	55		型打	-	高台内一組 脚 山線留白試 い取り	内:一 外:一	白色	模制口沿	中国	磁化寮		
B-KHN3E-02-01-04	一括	磁器	碗	半筒形	*69	51	*50	46		ロクロ 削り高台	青花 真頬(透明 釉)	内:線内四方繩 文、見込み「重慶 白五年花」 外:草文、櫻花折 枝文	集描き ヨンニナク 削利(五井花)	白色		紀州	最大径*72mm		
B-KHN3E-02-01-05	No.10	陶器	碗	腰折形	102	58	44	187	253	ロクロ 削り高台	铁绘(真写 模制升輪)	内:一 外:花文	集描き 腰下無輪	黄色色	美濃、 瀬戸	共輪一部打欠 打明具に転用			
B-KHN3E-02-01-06	括	陶器	碗	-	*134	29	58	182		ロクロ 削り高台	-	内:一 外:一	-	灰色色		不詳			
B-KHN3E-02-01-07	一括	陶器	碗	浅丸形	*121	41	36	115		ロクロ 削り高台	灰柱	内:一 外:一	腰下無輪	黄白色	京都、 信楽				
B-KHN3E-02-01-08	一括	陶器	片口	丸形 口縁切込	*104	50	-	49		ロクロ 貼付	-	内:一 外:一	腰下無輪	黄色色	美濃、 瀬戸	最大径*116mm, 片口前長さ15mm 瀬戸			
B-KHN3E-02-01-09	括	土器	堆塗器	深腹高深 情形高深 口吹有	口受深 76	29	-	135		型打 内面有孔	-	内:一 外:一	-	赤褐色		不詳			
B-KHN3E-02-01-10	括	土器	堆塗器	深掘形 蓋受け付	52	83	51	252	115	板作り 笠底成込み	-	内:一 外:一	-	赤褐色	一重棒内 「泉津伊藏」	不詳	最大径70mm		
B-KHN3E-02-01-11	一括	土器	堆塗器	浅情形 蓋受け付	*49	*51	-	29		ロクロ(左 凹輪)	-	内:一 外:一	-	赤褐色		不詳	最大径*60mm		
B-KHN3E-02-01-12	一括	陶器	擂鉢	筒錐形	*810	132	*130	630		ロクロ 脚部ヘラ削 り、右開軸 各切込	-	内:一 外:一	内:腰 脚下触拭 取り	黄白色	美濃、 瀬戸	内面直径18本/40 mm、瀬戸			
B-KHN3E-02-01-13	No.38	陶器	擂鉢	口縁外折 三棱	*660	192	-	416		ロクロ 脚部ヘラ削 り	鉄足	内:一 外:一	内面腰口	赤褐色 (砂粒含 む)	壺・明石	内面幅11.6cm 壺			
B-KHN3E-02-01-14	一括	陶器	壺	灰耳	73	104	58	254		ロクロ(右 凹輪) 付高台	-	内:一 外:不詳	董描き 阿鉢脚及 腰下無輪 内面施釉	灰白色	美濃、 瀬戸	进入径105mm 美濃			
B-KHN3E-02-01-15	一括	陶器	壺	-	-	215	*71	28		ロクロ(右 凹輪) 蓋底部切込 ヘラ削り	灰泥	内:一 外:一	大捲 内面腰口	暗刻「口」	備前				
B-KHN3E-02-01-16	一括	陶器	水滴	変形 桶子(桶 橋)形	長さ *60	幅 *30	高さ *20	12		垂押貼合	一 黄釉	内:一 外:一	内面無釉	黄色色		京都、 信楽			
B-KHN3E-02-01-17	一括	陶器	瓶	腰折形	-	*136	-	237		ロクロ	一 鉄足	内:一 外:一	横罫平行状 態内面無釉	灰色	備前	最大径*150mm			
B-KHN3E-02-01-18	No.11	土器	灯明受皿	半形 輪高台	78	16	38	19		ロクロ 左開軸切込	-	内:一 外:一	-	褐色		在地	内面墨書「わり」		
B-KHN3E-02-01-19	一括	陶器	灯明受皿	脚清ア リ(2脚所 無)高台	112	24	52	82		ロクロ(左 凹輪) 貼付・糊子 窓へラ削り	一 鉄足	内:一 外:一	-	赤褐色		赤丹品	受部径75mm 口縁折断有		
B-KHN3E-02-01-20	上層	土器	瓶	圓 底 灰被き 口 3足	-	*186	287	2,290		型打 足貼付・ヘ ラ削り	-	内:一 外:一	-	赤褐色		在地	最大幅35mm 内面煤材着		
B-KHN3E-02-01-21	括	土器	十能	-	長さ >121	幅 *154	厚さ 38	139		手造り 貼付	-	内:一 外:一	-	赤褐色		在地			
B-KHN3E-02-01-22	一括	陶器	瓶	撫肩形 口縁折断 字形	39	2165	-	136		ロクロ 脚部ヘラ削 り	一 灰釉	内:一 外:一	-	淡白色 (砂粒含 む)		美濃、 瀬戸	最大径*88mm 美濃、脚部游離 度>1		
B-KHN3E-02-01-23	一括	陶器	灰吹	情形 無蓋合	*56	77	*82	79		ロクロ 底部張切込 ヘラ削り	白釉 灰被	内:一 外:横文	董描き 腰下無輪	灰白色	美濃、 瀬戸	内面施釉、口縁 腰折打痕			

第3表 01号遺構出土土製品観察表

No.	出土位置	材質	種別	形状特徴	寸法(mm)			重量(g)	備考		
					横	幅	厚		横	幅	
B-KHN3E-02-01-24	一括	土製品	像	悉比耆	高さ125	幅23	厚さ15	11	前後型合せ	板子:赤褐色	在地 中空

第4表 04号遺構出土陶磁器類観察表

No.	出土位置	材質	器種	形状特徴	寸法(mm)				成形・調整	装飾			印・縫	推定製作地	備考	
					口径	器高	底径	重量(g)		焰付/鉢底	文様・モチーフ	装飾特徴				
B-KIN3E-02-04-01	一括	陶器	碗	半球形	889	53	29	61		ロクロ(左回転) 削り高台	内:一 外:一 透明釉	腰下無縫	淡白色		京都・信楽	
B-KIN3E-02-04-02	一括	陶器	水滴	变形半球形	長さ:17	幅:37	高さ:31	7		壓押 焰付・穿孔	铁輪・透明釉	内:一 外:一 内面有孔	白色		肥前 平戸	

第5表 05号遺構出土陶磁器類観察表

No.	出土位置	材質	器種	形状特徴	寸法(mm)				成形・調整	装飾			印・縫	推定製作地	備考	
					口径	器高	底径	重量(g)		焰付/鉢底	文様・モチーフ	装飾特徴				
B-KIN3E-02-05-01	一括	陶器	碗	腰折形	101	56	44	169		ロクロ(右回転) 削り高台	内:一 外:花文	腰折 腰下無縫	黄白色		美濃・瀬戸	最大径110mm
B-KIN3E-02-05-02	上層・中層	陶器	碗	牛丼形 幅広高台	*78	58	*57	62		ロクロ(右回転) 削り高台	内:一 外:草文	口縁・高台内 無縫	灰白色		京都・信楽	
B-KIN3E-02-05-04	下層	土器	灯明受皿	油滴半月形 削り高台	117	39	54	140		ロクロ 焰付	内:一 外:一	キャラメル	赤褐色		在地	受御形
B-KIN3E-02-05-05	中層	陶器	浅碗	肩部縦手口縁正絞形	56	100	109	952	1,648	ロクロ 削り高台 焰付	内:一 外:一 鉢付	背部沈線 腰下無縫	黄白色		美濃・瀬戸	最大径180mm 横割溶着板
B-KIN3E-02-06-06	一括	陶器	瓶	「高田播磨利」形(肩 張寸胴無 頸形)	-	177	74	662		ロクロ(右 回転) 削り高台	内:一 外:一 鉢付	腹部沈線 腰下無縫 取付 銅锣ヘラ削り	灰白色		美濃・瀬戸	最大径100mm 美濃・高田播磨利 銘書(タガネ原)(庄) 銅錠溶着板
B-KIN3E-02-05-07	上+下層	磁器	仙人舟	台底輪高台	87	69	47	87		ロクロ 削り高台	内:一 外:草花文	腰折 高台内施釉 器付無縫	白色		肥前	器付に墨書き口 口
B-KIN3E-02-05-08	上層	磁器	仙人舟	台底輪高台	64	56	36	69		ロクロ 削り高台	内:一 外:不詳	腰折 高台無縫	灰白色		肥前	波佐見? 其込み に墨書き

第6表 05号遺構出土金属製品観察表

No.	出土位置	材質	種別	形状特徴	寸法(mm)				重量(g)	備考		
B-KIN3E-02-05-03	中層	金属製品 (鉄)	包丁	出刃形	長さ:155 幅:56 刃渡厚さ:35 柄幅厚さ:10				95	把手:木片付者		

第7表 06号遺構出土陶磁器類観察表

No.	出土位置	材質	器種	形状特徴	寸法(mm)				成形・調整	装飾			印・縫	推定製作地	備考	
					口径	器高	底径	重量(g)		焰付/鉢底	文様・モチーフ	装飾特徴				
B-KIN3E-02-06-01	括	陶器	瓶	半球形	*122	92	70	237		ロクロ 削り高台	袋付 直頭・透明釉	内:一 外:草蔓文	口縁付・墨付 無縫	白色	肥前	高台砂付者
B-KIN3E-02-06-02	括	土器	灯明受皿	平底 削り高台	96	19	45	49		ロクロ 左回転系切込	一	内:一 外:一	-	赤褐色	在地	内面焼付者
B-KIN3E-02-06-03	括	土器	灯明受皿	油滴半月形 削り高台	113	36	60	111		ロクロ 左回転系切込 焰付	一	内:一 外:一	-	褐色	在地	受御径80mm 口 縁・底部焼付者
B-KIN3E-02-06-04	括	陶器	瓶	燒青形 口縁断面T字形	47	179	60	428	412	ロクロ(右 回転) ハフ・丸堅 削り・焰付	灰釉	内:一 外:一	高台内施釉 腰斬へラ削り 腰加和 城い・取付	灰白色	美濃・瀬戸	銘書(タガネ原)(口) 美濃・高田 他利
B-KIN3E-02-06-05	括	陶器	香炉	有三足 半球形	115	72	84	319	411	ロクロ(右 回転) ハフ・丸堅 削り・焰付	鉢付	内:一 外:半菊文	内面・底断無 縫	黄白色	美濃・瀬戸	

第8表 06号遺構出土金属製品観察表

No.	出土位置	材質	種別	形状特徴	寸法(mm)				重量(g)	備考		
B-KIN3E-02-06-06	一括	金製	金製匙(鍵)	環首匙首	長さ:67 幅:15 檻合斜径:12				6	上面に款記 羅字繁昌左 火腹右焼算痕		

第9表 07号遺構出土陶磁器類観察表

No.	出土位置	材質	器種	形状特徴	寸法(mm)			重量(g)	容量(ml)	成形・調整	焼付 釉薬	装飾		断土色	印・款	推定 製作地	備考
					口径	脚高	底径					文様・モチーフ	装飾特徴				
B-KHN3E-02-07-01	括	陶器	直	菱形形 方形	880	20	36	20		鑄打、 削り高台	鉄錆・透明 釉	内:草文「えさき」 外:—	單面き 腰下無釉	黄白色		京都、 信楽	見込み信跡/2
B-KHN3E-02-07-02	括	陶器	直	菱形形 菊花形?	—	18	*70	9		墨引、 削り高台	鐵錆・呉須 透明釉	内:松大 外:—	脚下無釉	黄白色	精田作内 「御青銅」	京都、 信楽	
B-KHN3E-02-07-03	括	土器	直	平底無脚 直	*133	29	*70	37		ロクロ 左回転斜切 底	—	内:— 外:—	—	褐色		在地	
B-KHN3E-02-07-04	括	土器	直	平底無脚 直	56	12	28	13		ロクロ 左回転斜切 底	—	内:— 外:—	—	褐色		在地	
B-KHN3E-02-07-05	一括	磁器	丸形 浅内	—	72	37	32	53		ロクロ 削り高台	— 白磁釉	内:— 外:—	—	白色		肥前	
B-KHN3E-02-07-06	一括	陶器	平	半圆形	—	*51	—	18		ロクロ —	— 白錆・透明白 釉	内:— 外:不明	粗面平行波 線、素面	灰白色		下詳	
B-KHN3E-02-07-07	括	磁器	朴	半圆形	—	77	*60	17		ロクロ 削り高台	— 白錆・透明白 釉	内:— 外:曲文・雅文	單面き 腰下無釉	白色		肥前	見込み肥前
B-KHN3E-02-07-08	括	陶器	朴	丸形 深内	123	83	58	270		ロクロ 削り高台	— 粗面平行波 線	内:— 外:—	脚下無釉 側面彫刻(?)	灰白色		美濃、 瀬戸	秀濃
B-KHN3E-02-07-09	一括	陶器	直	丸錆 丸底	*108	10	無み径 20	96		ロクロ 貼付	— 粗面	内:— 外:—	—	乳褐色		不詳	日光後82mm
B-KHN3E-02-07-10	一括	土器	無基、底丸 錆壁高さ4 cm前後	—	280	278	—	686		型打	—	内:— 外:—	—	褐色		在地	胴部焼付付
B-KHN3E-02-07-11	一括	陶器	直	「南田德 利」形(同 様子)直 錆	33	213	82	595		ロクロ 削り高台	— 灰錆・透明白 釉	内:— 外:—	對照標目 鐵錆・灰錆波 紋、腰下斜状、 致り	灰白色		美濃、 瀬戸	最大径122mm 対象(タガボ形)1 「中力」 南田・南田德利
B-KHN3E-02-07-12	括	陶器	不明	無高台	—	50	78	150		ロクロ(右 回転) 底部斜切後 ヘラ開口	— 粗面	内:— 外:—	牛糞竹管へ ラ削り 腰下無釉	灰白色		美濃、 瀬戸	
B-KHN3E-02-07-13	一括	陶器	青錆	有二足 半圆形 刃足	—	45	*42	13		ロクロ 貼付	鉄錆・真錆 給 灰錆	内:— 外:唐草文	單面き 型紙押捺 内面・底無 釉	灰白色		美濃、 瀬戸	

第10表 08号遺構出土陶磁器類観察表

No.	山上 位置	材質	器種	形状 特徴	寸法(mm)			重量(g)	容量(ml)	成形・ 調整	焼付 釉薬	装飾		断土色	印・款	推定 製作地	備考	
					口径	脚高	底径					内:白錆二重圓線 外:口錆二重圓 線、区间間(七宝 文)	單面き 紙糊押捺					
B-KDN3E-02-08-01	括	磁器	碗	丸形	—	223	—	4		ロクロ —	鉄錆・透明白 釉	内:白錆二重圓線 外:—	單面き 紙糊押捺	白色		肥前		
B-KHN3E-02-08-02	一括	陶器	碗	半球形	*98	55	*19	61		ロクロ 削り高台	— 白錆・透明白 釉	内:松葉端に松笠 文 外:—	單面き	白色	単面二重 圓線内不規 則	肥前		
B-KHN3E-02-08-03	一括	磁器	碗	丸形	154	85	66	139		ロクロ 削り高台	— 白錆・透明白 釉	内:見込み二重圓 線 内五井花 外:波纹(梅花文、 梵文、蔓文)	單面き コンニャク 印押(五井花)	白色	単面二重 圓線内波 紋「大 明年製」	肥前	波佐見 くわんが手	
B-KDN3E-02-08-04	括	陶器	碗	棱形	105	63	38	136		ロクロ 削り高台	鉄錆・真錆 透明白	内: 外:松文	單面き 腰下無釉	灰白色		京都、 信楽		
B-KHN3E-02-08-05	括	陶器	朴	曳丸形	*126	49	50	141		ロクロ 削り高台	鉄錆・透明白 釉	内:見込み棲闇山 水文 外:—	單面き 腰下無釉	灰白色	鉄印「喜 氣」・(○)	肥前		
B-KHN3E-02-08-06	括	陶器	朴	丸形 折 縁	300	91	117	1,343		ロクロ(左 回転) 削り高台	— 白錆	内:— 外:—	单面 腰下無釉 上口接合	赤褐色		肥前	所蔵 「喜氣」 単面二重 圓線内波 紋#7	
B-KHN3E-02-08-07	括	土器	火鉢	口錆内 圓形 二足#2	276	171	214	2,100		型打(回転 台) 貼付	—	内:— 外:—	—	褐色		在地	最大径255cm	
B-KHN3E-02-08-08	一括	磁器	折沿口 丸形	*67	27	826	18			ロクロ 削り高台	鉄錆・真錆 透明白	内:— 外:唐草文	型紙押捺?	白色		肥前	景付砂目	
B-KHN3E-02-08-09	一括	陶器	瓶	—	—	214	82	738		ロクロ 削り高台	— 白錆	内:— 外:—	腰下粗拭い 取り 内面無釉	灰白色 墨書き「牛」		美濃、 瀬戸	最大径123cm 単面二次解工 熟婆若松用 刷毛等着底	

第11表 08号遺構出土石製品観察表

No.	出土位置	材質	種類	形状特徴	寸法(mm)	重量(g)	備考
B-KDN3E-02-09-10	一括	石製品	帯刃	—	長さ:123 幅:23 厚さ:6	5	墨書き 肉身

第12表 09号遺構出土瓦観察表

No.	出土位置	材質	種別	形状特徴	寸法(mm)	重量(g)	備考
B-KIN09-02-09-01	一括	瓦	鬼瓦	-	瓦当幅:192 瓦当高:216 瓦当厚:17	1,620	瓦当:丸彫文(押印未定) 瓦上:灰先 二次焼成なし
B-KIN09-02-09-02	一括	瓦	鬼瓦	-	瓦当幅:169 瓦当高:141 瓦当厚:13	362	瓦当:一筋土:灰色 二次焼成なし

第13表 18号遺構出土土製品観察表

No.	出土位置	材質	種別	形状特徴	寸法(mm)	重量(g)	備考
B-KIN18-02-18-01	一括	土製品	瓦	人形	高さ:39 幅:21 厚さ:17	6	雨後引合せ 断土:褐色 在地:中央

第14表 19号遺構出土陶磁器類観察表

No.	出土位置	材質	形状特徴	寸法(mm)			重さ(g)	容積(cc)	底形・調査	柄付/縁裏	蓋・瓶		土様・モチーフ	装飾特徴	出土場	印・鉢	堆高製作地	備考
				口径	脚高	底径					内	外						
B-KIN19-02-19-01	一括	磁器	直 丸形	*142	43	*71	161		ロクヨ 削り高台	豪村 黒質・透明 釉	内:櫛筋内里文・花 卉草文、見込み二 重輪内五瓣花 外:如意頭唐草文 模様	織網き コニック 田町(五年 花)	白色	圓筒内7大 明牛製	肥前	深耕窯		
B-KIN19-02-19-02	一括	磁器	直 丸形	*534	62	*130	208		ロクロ 削り高台	豪村 紅葉・透明白 釉	内:花唐草文、白 綠四方擇、見込み 二重輪内五瓣花 外:唐草文模様	織網 高台内青筋	白色	二段角内 高台	肥前	高台内青筋		
B-KIN19-02-19-03	一括	土器	打明皿 無高台	37	25	49	65		ロクロ 左同輪切 底	一	内:一 外:一	-	褐色	-	在地	口藤付着		
B-KIN19-02-19-04	一括	土器	直 丸形 無高台	140	30	78	149		ロクロ 左同輪切 底	一	内:一 外:一	-	褐色	-	在地			
B-KIN19-02-19-05	一括	土器	直 丸形 無高台	210	11	135	524		ロクロ 左同輪切 底	一	内:一 外:一	-	褐色	-	在地			
B-KIN19-02-19-06	一括	磁器	直 橢張器	*100	73	44	148		ロクロ(右 回転) 削り高台?	静峰 深井井物	内:一 外:不詳	新宿 高台深井	黃白色	美濃 瀬戸	圓筒	圓筒	圓筒	
B-KIN19-02-19-07	一括	磁器	直 手取耳	*95	58	27	82		ロクロ 削り高台	英金(左・青 地) 透明釉	内: 外:花文	織網き	黃白色	京都 信楽				
B-KIN19-02-19-08	一括	磁器	碗 直外形 直柄	*78	>61	-	21		ロクロ	一 白泥胎	内: 外:文字文"一"も り直(床口)	織網き	乳白色(不詳)	京都 信楽				
B-KIN19-02-19-09	一括	土器	燒塗漆 直	口受盤 直	75	23	-	110	削打 内面布目	一	内: 外:	-	褐色	-	不詳			
B-KIN19-02-19-10	一括	磁器	鉢	-	-	-	83	-	ロクロ	块付 吳服・透明 釉	内: 外:茎文	宋椎き	白色	肥前	最大径*304mm			

第15表 19号遺構出土金属製品観察表

No.	出土位置	材質	種別	形状特徴	寸法(mm)	重量(g)	備考
B-KIN19-02-19-11	一括	金属製品 (鉢)	焼管吸口	-	長さ:130 締合部径:9 管口径:4	3	

第16表 その他の出土遺物観察表(陶磁器類)

No.	出土位置	材質	種類	形状特徴	寸法(mm)	重さ(g)	容積(cc)	底形・調査	柄付/縁裏	蓋・瓶	土様・モチーフ	装飾特徴	出土場	印・鉢	器形	備考
B-KIN19-02-その他の 他-01	表土	磁器	直	-	721	*120	46	ロクロ 削り高台	豪村 黒質・透明 釉	内:高文・茎 外:不明	織網き	白色	大根莖青 灰胎	肥前		
B-KIN19-02-その他の 他-02	表土	磁器	直	-	33	*134	142	ロクロ	一	内: 外:	内:青筋を 網目	青筋色	印未明	研石	見出小腰口 28mm	
B-KIN19-02-その他の 他-03	16号 環甌	土器	打明皿 無高台	77	11	41	38	ロクロ 左同輪切 底	一	内: 外:	-	褐色	-	狂狹	狂狹	西冬道建白
B-KIN19-02-その他の 他-04	12号 漆甌	漆器	直	-	60	-	40	ロクロ 自然胎	一 内: 外:	-	刷毛	-	常滑			

第17表 その他の出土遺物観察表(瓦)

No.	出土位置	材質	種別	形状特徴	寸法(mm)	重さ(g)	備考
B-KIN19-02- その他の 他-05	内1一部	瓦	断面	-	長さ:159 幅:76 厚さ:15 重乳瓦(瓦当幅:59 瓦当内径:36 瓦当厚:10)	前	軽火照瓦当・内側火・胎土・内色 二次焼成なし

第18表 その他の出土遺物観察表(土師器・須恵器)

No.	出土 位置	材質	種類	埋有部位	寸法(mm)	重さ(g)	容積(cc)	底形/調査/表面模様	柄付	胎土色	絞成	備考
B-KIN19-02- その他の 他-06	07号 遺構	土師器	直	胴部	-	-	-	内:ハケモードラナ 外:コマモードラナ	砂輪	外:に深い模様色 内:褐色	素	左側須器
B-KIN19-02- その他の 他-07	07号 遺構	須恵器	直	胴部~肩部	-	-	-	内:ウサギ・回輪モード 外:模様付	砂輪	外:灰オーブ色 内:オーブ色	良	右側須器
B-KIN19-02- その他の 他-08	08号 遺構	土師器	直	腹	-	-	-	内:自然胎付粘 外:粗粒ハラモードラナ	砂輪	外:灰褐色 内:灰白色	良	左側須器

第3章 文献資料による当調査区の様相

法政大学人文科学研究科日本史学専攻

南 隆哲

はじめに

本章は小日向三丁目東遺跡第2地点（以下「当該地」とする）に関する文献調査の成果について報告するものである。平成21年（2009）に当該地の南側に位置する第1地点について報告されており¹、今回はその成果を踏まえて検討する。

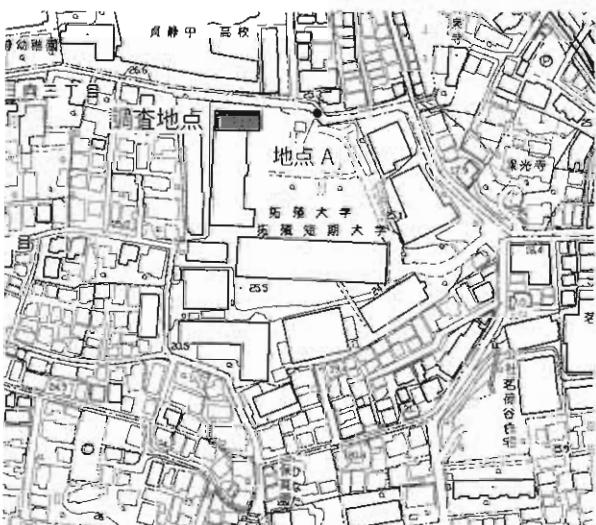
当該地は、近世には「小日向茗荷谷」と称され、安藤家下屋敷・戸田家下屋敷・東洋協会大学を経て、現在は拓殖大学の文京キャンパスの敷地となっている。

第1節では、当調査区域の土地利用の変遷をみる。第2節では、第1節の検証を基に当該地の拝領者や施設に注目して、その詳細を述べる。第3節では、残存する地図・絵図を使用して遡及的に当該区の様相を推定するものである。

なお、近世以前については史料上の制約から特に触れないものとする。

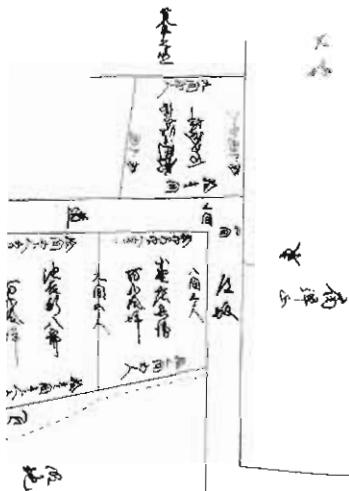
第1節 当調査区域の土地利用の変遷

ここでは、当該地を含む上地がどのように利用され、誰の手に渡り現在に至るのかを検証していきたい。検証するにあたり、当該地から西へ向かって延びている道路、すなわち現在の区道170号から173号に向かって折れ曲がった地点を【地点A】と設定する（第29図）。今回の調査区域の道幅は6.0mから6.58m程度²であり、元禄12年（1699）3月では、直接の道幅ではないが、【地点A】の向かいの道幅は4間から3間となっていることが確認できる（第30図）。この【地点A】は正保元年（1644）の「正保年間江戸絵図」にも現在の区画を明確に確認することは難しいものの、【地点A】を確認することができる（第31図）。よって、【地点A】を起点として当該地の位置関



第29図 現在の地図

（東京都2,500デジタルマップ 地形図画像東京全域と合成）



第30図 「屋敷渡預繪図証文」元禄12年3月21日
（幕府引締書807-1（国立国会図書館蔵））



第31図 「正保年間江戸絵図」
（『古版江戸図集成』巻二 1958年）

係を検証していくうえでの有効性を得られると考える。

次に、当該地の土地利用についてその変遷を述べていく。当該区は現在の文京区小口向3丁目4番14号は拓殖大学のキャンパス内に位置している。明治34年（1901）5月には、台湾協会学校（拓殖大学の前身）の校舎として使用されていた³。また、近世後期からは「戸田淡路守」の屋敷地であったことが「御府内沿革図書」の「當時之形」（享保元年）よりみることができる⁴。これより遡って、明暦3年（1657）頃に作成された「江戸大絵図」でも「安藤対馬守下屋敷」の名と広範囲に渡った敷地をみることができる。さらに、前掲「正保年間江戸絵図」でも「安藤右京下屋敷」を確認することができる。ここで【地点A】を起点として当該地を規定した場合でも区画の判別は難しいが、明暦の大火灾以前の当該地周辺の様相を把握するうえで貴重なものであるといえるだろう。

以上、簡単ではあるが当該地の土地利用がどのようなものであったかを検証してきた。次節では、上記のように当該地において施設・拝領者等について詳細を述べていきたい。

第2節 当該区の様相—拝領者・施設の視点から—

ここでは第1節の検証から、さらに詳細を述べていく。先に述べたように、近世前期において現在確認され得る区画の判別は難しいが第31図では【地点A】を推定することができた。それによれば、安藤家がいつ拝領したのかは不明であるが、少なくとも正保元年時には既に描かれていることから、当該地は安藤家拝領屋敷内的一部であったと考えられる。その後の寛文2年(1662)2月8日に中根正勝(1,500石、大番頭)⁵、池田長賢(6,000石、大番頭)⁶、戸田氏経(6,200石、大番頭)⁷、安藤重元(3,000石、書院番頭)⁸、岡部与賀(4,000石、大番頭)⁹、松平乗真(5,000石、大番頭)¹⁰といった大身の旗本に対して下屋敷が与えられていることがわかる。ここで拝領した中に、戸田氏経をみることができる。これは後述するが、大垣新田藩の初代藩主のことである。つまり、寛文2年2月8日より当該地は戸田家の拝領屋敷となったことがわかるのである¹¹。

以上のことから、次に当該地を検討するにあたって戸田家の下屋敷について述べていくことにする。そのことにより、当該地が如何なる様子であったのかを知ることができるであろう。まず、当該地は勿論戸田家の屋敷内や建物に関する絵図等、下屋敷の全容を知ることができる史料が管見の限りは皆無であるため、残存する史料を使用しながら当時の様子を把握していくこととする。まず、戸田家下屋敷の変遷について述べる。当時の絵図から「戸田弾正」と記された当該地を含んだ下屋敷を確認することができるが、この屋敷地について戸田弾正が改方へ「断之致家作」とあり、これが帳面に記されていなかったことから、延宝7年に稻生七郎左衛門と近藤作左衛門が改めたとある。そして、元禄8年11月29日に「家作心次第二仕、屋鋪ニ相極り」となっていることがある¹²。ここで述べられているのは「抱屋鋪」のことであり、延宝から元禄期に戸田弾正が抱え屋鋪を造築した様子が窺えると共に、その抱屋鋪が2278坪余を有していたことを知ることができる。明和6年(1769)6月5日には、大久保豊後守と切坪相対替を行っている¹³。下屋敷3,422坪余のうち1,300坪が大久保家の屋敷地となり、戸田家は深川八幡の3,000坪を相対替としている。しかし、寛政3年12月には再び元に戻っている。文政9年(1826)9月6日にも、拝領屋敷の相対替が行われており、これによれば戸田家下屋敷5,700坪のうち、700坪余が梶平之助屋敷地となっている。また、明和6年時に3,422坪余であった戸田家下屋敷が文政期には5,700坪と記され、若干の拡大がみてとれてる。

【史料1】

一 上屋敷 外桜田 弐千拾六坪 戸田淡路守
拝領 中屋敷 愛宕下袋小路 五百拾三坪余
右者田村伊豫守当分貸置
借地 愛宕下袋小路 百九坪
拝領 右者池田中務少輔拝領屋敷置 中屋敷地統二付匪込

下屋敷 小日向茗荷谷 三千式百式拾弐坪

無年資地

抱屋敷 小日向茗荷谷 弐千式百七拾八坪六合
右者下屋敷東之方地続ニ付一所ニ通込 道法日本橋迄老
里七町余

「諸向地面取調書」¹⁴より、戸田家の屋敷地について記されたものである。ここから幕末期には、外桜田上屋敷が2,016坪、愛宕下袋小路中屋敷が借地を合わせて632坪、小日向茗荷谷下屋敷が抱屋敷と合わせて5,500坪余であることがわかる。前述した抱屋敷が、下屋敷の東側に地続にあるので囲い込んでいるとされており、本調査の当該地は建物全体の北西に位置するため、直接該当はしないがいずれも下屋敷内にあると考えて良いであろう。

次に当該地の西側部分について検証していきたい。当該地の周辺は既述してきたように、安藤家から戸田家の下屋敷内とみて良いと思われるが、当該地に隣接した西側には、若干の変遷がみられる。近世のどの段階かは明らかではないが、『御府内沿革図書』の「元禄十年より十二年」において旗本である「寛半之丞」の屋敷を確認することができる。また、前掲の「屋敷渡預絵図証文」の元禄12年3月21日においても寛氏の屋敷を確認できることから、元禄10年には当該地の西には寛越前守の屋敷が造られていたと考えられる。この寛氏の屋敷はその後、嘉永7年(1854)の「小石川絵図」¹⁵にはみえず「板倉地」と記されている。安政6年にはそれもみえず、戸田家の屋敷地に戻っている。以上は第32図にまとめたので、ご参照いただきたい。



※寛家の屋敷については、「屋敷渡預絵図証文」(国立国会図書館蔵)を参考にして作成した。また、成立年月日が不明のものは破線で示す。

第32図 屋敷敷地内変遷図

大垣新田藩戸田家

前述したように、近世における当該地の大半は大垣新田藩の戸田家下屋敷であった。そこで、大垣新田藩及び初代藩主氏経から10代の氏良までを述べていきたい。

まず、初代氏経からの藩主の変遷は第33図にまとめてあるので、ご参照いただきたい。

初代大垣新田藩主の氏経は、美濃10万石大垣藩の藩主戸田氏鉄の二男である。『寛政重修諸家譜』等によれば、元和4年に召され2代将軍秀忠に仕え、16歳で小姓となり采地を賜っている。その後、加増され三河国渥美郡のうち1,500石を領し、同7年5月27日には従五位下淡路守に叙任されている。はじめ氏経は、間宮権左衛門之等の養子となっていたが、之等が蟄居の時氏鉄の請いによって之等の娘を妻としている。寛永10年8月5日に小姓組の組頭となり、12月28日三河国額田郡のうち700石を加増されている。同13年には職を辞し、寄合に列したが、翌14年の島原の乱に父氏鉄と共に従軍している。明暦元年5月7日、兄の氏信の領地である美濃石大野郡のうち新田4,000石を分知され、6,200石余を領すに至っている。万治元年閏12月18日に大番頭となり、天和元年(1681)79歳にて没している。当該地の下屋敷を拝領した人物が、この戸田氏経である。

それでは、以下その後の戸田氏の変遷を追っていきたい。2代の氏利は、寛文12年11月に家督を継ぎ6,200石を領し、元禄元年(1688)7月に致仕しているが、同11年7月13日には没している。3代の氏成は、大垣藩主氏西の二男であり、貞享元年2月16日に氏利の養子となっている。元禄元年7月10日に家督を継ぎ、兄氏定より幕府に請うて新田3,000石を分知せられ、別に采地渥美郡の新田と合わせて、計1万石を領し、渥美郡に陣屋を設けて諸侯に列している。【史料1】などに登場する「戸田弾正」とはこの人物のことである。同14年に従弟の浅野長矩の刃傷事件によって連座し、出仕を止められている。5月6日に赦免となつたが、拝謁をばかり、6月15日にゆるされている。氏成は、享保4年(1719)5月3日に没し、氏房が跡を継いでいる。

氏房は大垣藩主氏定の五男で、宝永6年(1709)氏成の養子となっている。幕臣として、享保13年に大番頭、

元文2年(1737)に奏者番、延享元年(1744)11月西之付若年寄に転じている。宝曆8年3月に致仕するも、翌9年に没している。氏房の家督を継いだ氏之は同年12月16日に遺領を継ぎ、同11年6月27日に大番頭となっている。同13年12月10日には居邸から出火したため、出仕をはばかっているが、明和7年3月4日に致仕し、翌年には没している。後に氏養が明和8年3月10日に遺領を継ぎ、天明5年(1785)4月29日に若くして没したため、氏興が7歳にて継いでいる。しかし、氏興も20歳で没してしまったため、戸田忠誠から養子を迎えた氏宥が相続している。9代藩主の氏綏は、大垣藩主氏教の四男であり氏宥の養子となり文政9年6月に家督を継ぎ、大番頭・奏者番を歴任している。10代藩主の氏良は大垣藩主氏正の二男で、安政2年(1855)に家督を相続している。明治元年(1868)には、3000石のうち大野郡野村を引き渡されており、同2年2月12日の版籍奉還後、同年5月27日に藩名を野村藩と改称し、10月22日には藩知事に任せられているが、同4年7月に廢藩置県となった。

東洋協会大学

明治期に入り、各地図で当該地の区画は把握できるものの、詳細な土地利用に関しては明らかではない。しかし、明治34年時に台湾協会学校から台湾専門学校へと新設する際、校舎を新設するため「敷地として小石川区茗荷谷三十二、三番地の官有地五千坪を選定し、借用を出願中」であり、5月16日に許可されたとある¹⁶。つまり、戸田家の下屋敷のあと当該地は官有地として国が所有していたものであったことがわかる。

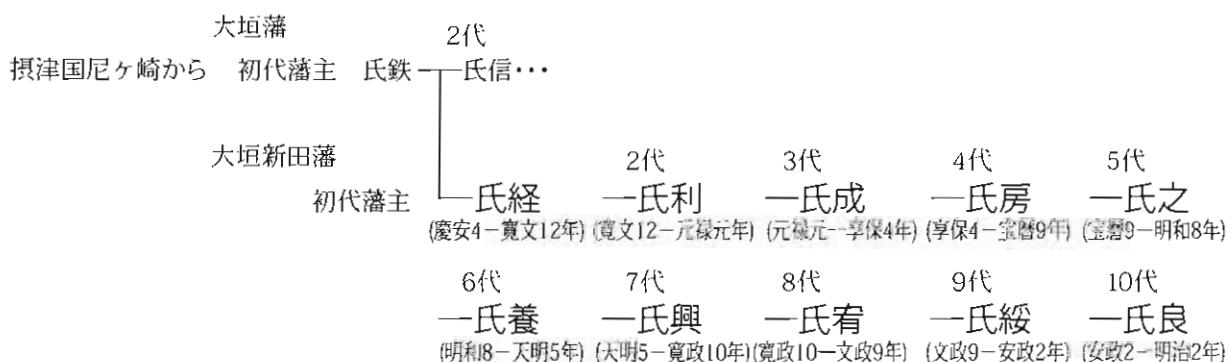
その後、当該地は東洋専門学校の敷地の一部であった。よって、当該地に校舎が新設される変遷を述べたい¹⁷。

明治31年に「台湾協会」が結成された。その目的は台湾協会規約にみることができる¹⁸。

【史料2】

臺灣協会規約

第一条 本会ハ台湾ニ関スル諸般ノ事項ヲ講究シ台湾ノ經營ヲ裨補スル以テ目的トス



- 第二条 本会ノ為サント欲スル事業ハ約左ノ如シ
- 一、台湾ノ真相ヲ闡發スル事、附視察員ノ派遣
 - 二、台湾ノ産業品及ビ台灣人民ノ嗜好ニ適スル本邦商品ヲ蒐集スル事
 - 三、台灣ニ移住シ又台灣ヨリ上游スル者ノ為メニ及ブ
限り便利ヲ与フル事
 - 四、台灣ニ関スル實業上ノ調査、紹介等ノ依頼ニ応ズ
ル事
 - 五、彼我言語練習ノ便ヲ圖ル事
 - 六、台灣会館ヲ設立スル事
 - 七、会報
 - 八、講談会
 - 九、台灣留学生ヲ監督補助スル事
 - 十、台灣ニ關スル左ノ書籍ノ蒐集（但海外各植民地ニ
關スルモノヲ集ム）
 一 通信、二 新聞、三 雑誌、
 四 著述、五 旧記、
 （後略）

このように、現拓殖大学の前身である台湾協会は外地や海外に向けての「拓殖」、「殖産興業」をその目的とし、また人材育成を基本方針としていた。

次いで同 33 年 2 月 12 日、帝国ホテルにて開かれた協会評議員会において石塚剛毅氏より「植民学校設立の建議案」が提出されている。同年 4 月 5 日麹町区富士見軒にて、上記の建議が調査されるに至り、7 月 25 日には協会学校予算、学校創設事務の経過・役員推薦が行われており、学校開設の計画が進行していることが窺える。そして、9 月 15 日には仮開校式が行われている。この時は、東京富士見町の仮校舎が使川されている。

翌 34 年に、校舎を新築するため敷地を小石川区茗荷谷 32-3 番地の官有地を選定している。これが、当該地を含む戸田家下屋敷跡であったことは冒頭で述べた通りである。ここには総敷地五千有余坪と記されており、戸田家下屋敷の坪数 5,500 坪余と合致する。この工事は大倉上木組の手によって起工したとされており、同 10 月末に竣工したとある。当時の外観を知ることは難しいが、当該地に限らず見るならば、「二階建百八十余坪の面積を有し、中に四十二坪に余れる大講堂三室あり…又其の後面なる二棟二階建二百七十五坪の生徒寄宿舎食堂浴室及附属建物は同じく昨年十二月下旬に至り落成したもの…同校は城北の最高位置を占め、門内には池水を湛え、校舎の前面には小丘あり、樹木鬱蒼都塵を以て…」¹⁹ と記載されており、残念ながら当時の土地利用の外観を僅かに知ることができるのがである。以上のように、台湾協会学校は、台湾協会専門学校となり当該区へと新校舎が造築されたのである。それから、東洋協会専門学校と改称、現在の拓殖大学に至っている。

第3節 地図・絵図からみる当該地の地理的様相

ここでは、昭和期から近世前期まで残存している地図又は絵図を使用して、【地点 A】を起点としながら当該地を遡及的に検証していきたい。

冒頭で設定した【地点 A】に基づき、昭和 30 ~ 31 年の様子であるが、既に現在の拓殖大学が存立しており、【地点 A】に対して当該地の確認が可能である（第 34 図）²⁰。

次に、大正 8 ~ 11 年をみてみると【地点 A】に相違点は確認できない。よって当該地も変化はなく東洋協会大学の敷地内であると言つて良いであろう（第 35 図）²¹。

明治 44 年に入つても同様に【地点 A】は確認できる。当該区も同様の位置付けで良いであろう（第 36 図）²²。

続いて、明治 20 年であるが、【地点 A】の屈折路は確認できる。よつて、当該地も同敷地内に確認できる。しかし【地点 A】後に派生する脇道の記載が消失している他、当該地の様相は既に不明である（第 37 図）²³。

明治初頭では、上述した安藤家下屋敷が「畠」と記されている。【地点 A】は確認できるが、区画の歪みが生じており、調査区画全体にそれをみることができる。当該地の様相は同様に不明であるが、九小区の「百六十」から「廿六」周辺が当該区であると思われる。全体では



第 34 図 「東京三千分の一図」昭和 31 - 33 年
(「5 千分の 1 江戸 - 東京市街地図集成Ⅱ」柏青房 1990 年)



第 35 図 「番地界入東京全図」大正 8 - 11 年
(「5 千分の 1 江戸 - 東京市街地図集成Ⅱ」柏青房 1990 年)

大きな区画の変化は見られない(第38図)²⁴

安政6年では、近世絵図となり明治期の地図とは多少異なるが、【地点A】の屈折は確認することができる。当該地も戸田淡路守の屋敷内にあると考えられる。ここでも概ね一致しているといえる(第39図)²⁵。

嘉永7年では、【地点A】の屈折をみることができる。前節で示した「板倉地」が記されているが、【地点A】か



第36図 「番地界入東京全図」明治44年
(「5千分の1江戸-東京市街地図集成Ⅱ」柏書房 1990年)



第37図 「東京全図」明治20年
(「5千分の1江戸-東京市街地図集成」柏書房 1988年)



第38図 「明治東京全図」明治9年
(「5千分の1江戸-東京市街地図集成」柏書房 1988年)

らの当該地も、戸田家敷地内であると推測される。安政期からも区画の大きな変動は見受けられない(第40図)²⁶。

天保元年では、【地点A】を明確に確認することができる。当該地も同様に戸田家の敷地内であると考えられる。前節で述べたように、当該地の西側に簞氏の屋敷をみることができる。ここでも区画に大きな変化はみられない(第41図)²⁷。



第39図 「分間江戸大絵図完」安政6年
(「5千分の1江戸-東京市街地図集成」柏書房 1988年)



第40図 「小石川絵図」嘉永7年
(「江戸切絵図」26 岩橋美術 2006年)



第41図 「御府内沿革図書」當時之形(天保元年)
(「江戸城下変遷絵図書」原書房 1986年)

安永 8 年では、【地点 A】の屈折を確認することは難しい。しかし、僅かに曲がっている地点から【地点 A】を起点とすることは可能である。当該地においては、同様に戸田家の屋敷内に存立しているとみて良いであろう。形状は多少変化しているが、各区画に変動は認められない（第 42 図）²⁸。

享保 19 年では、【地点 A】を明確にみることができ。当該地においても同様に戸田家敷地内のやや北西に位置しているとみて良いであろう（第 43 図）²⁹。

元禄 10 年でも【地点 A】の屈折路を確認することができる。同様に該当地も戸田弾正屋敷内である（第 44 図）³⁰。

延宝期には安藤家下屋敷と戸田家屋敷の境界が引かれないと記されている。つまり、寛氏の屋敷は記されていないわけであり、如何なる様相を呈していたのかは不明である。しかし【地点 A】の屈折路は見いだすことができる。「久永丹波守」と「中川善之丞」の隣接点に屈折が確認でき、ここに路が存在していた可能性、若しくはこの屈折が後の【地点 A】となる可能性は高い。よって、該当地は区画は不明であるものの、戸田弾正の敷地内であったと推定できる（第 45 図）³¹。

寛文期に入ると、さらに区画が描かれなくなっている。



第 42 図 「分間江戸大絵団完」安永 8 年
(『5 千分の 1 江戸一東京市街地図集成』柏書房 1988 年)



第 43 図 「御府内沿革図書」享保十九寅年之形
(『江戸城下変遷絵図書』原書房 1986 年)

しかしながら、描かれている区画もある。その中に【地点 A】は含まれている。先より見てきた屈折路が確認される。よって、大枠の区画に変動は認められず、当該区も戸田淡路守の敷地内であると考えられる（第 46 図）³²。

正保期では、安藤家の下屋敷が描かれている。遡及的にみてきた区画を明確に判別することは難しい。しかし、安藤家下屋敷から伝通院へ伸びている道筋、安藤家の東側に位置する細い敷地、そこから当調査区域へ延びる道筋から近世初期の【地点 A】の原型となったであろう箇所を推定することができる。この【地点 A】を起点として、当該地の位置的把握は可能である。それによれば、当該地は「安藤右京下屋敷」内に位置するであろうことが明らかになってくる。区画は僅かに確認されるのみであるが、安藤家屋敷、伝通院、その道筋周辺の区画をみるとことによって、当該地を見出すことができる（第 31 図）³³。

以上、絵図・地図類から【地点 A】を設定し、これを起点として当該地の歴史的地理的位置を把握してきた。それによれば、当該地は近世前期には安藤家敷地内、それ以外は戸田家の敷地内に確認することができた。明治に入ってからは、官有地であったが区画には大きな変動



第 44 図 「御府内沿革図書」元禄十丑年同十二卯年迄之形
(『江戸城下変遷絵図書』原書房 1986 年)



第 45 図 「御府内沿革図書」延宝年中之形
(『江戸城下変遷絵図書』原書房 1986 年)



第 46 図 「新板江戸大絵図」寛文 10 - 13 年
(『5 千分の 1 江戸 - 東京市街地図集成』柏書房 1988 年)

は認められず、現在の拓殖大学が位置する区画が確認できる。

まとめ

最後に調査当該地の変遷をまとめておきたい。当該地は、近世初期は上野国高崎 56,000 石の安藤家の下屋敷内に位置していた。寛文 2 年に屋敷地の一部が大垣新田藩主戸田氏経の下屋敷となった。その後、隣接する周辺には若干の変遷をみたが、当該地に関しては大凡近代に入るまで戸田家の下屋敷であったと考えて良いであろう。明治 33 年まで官有地であったが、翌年に台湾協会専門学校の新校舎が建設され、当該区もその一部となっている。

註

- 1 『小日向三丁目東遺跡』(2009 大成エンジニアリング株式会社)
- 2 道路台帳現況平面図 (文京区土木部管理課土木用地係、PDF 形式「http://www.city.bunkyo.lg.jp/sosiki_busyo_dokan_tikei_tikeideta.html」)
- 3 『拓殖大学八十年史』(1980 拓殖大学)
- 4 『御府内沿革図書』(當時之形『江戸城下変遷絵図書』原書房 1986)
- 5 『寛政重修諸家譜』9 卷 245 頁。
- 6 『寛政重修諸家譜』5 卷 44 ~ 74 頁。
- 7 以下、戸田家については『寛政重修諸家譜』14 卷 382 ~ 384 頁。
- 8 『寛政重修諸家譜』17 卷 183 頁。
- 9 『寛政重修諸家譜』14 卷 141 頁。
- 10 『寛政重修諸家譜』1 卷 79 頁。
- 11 「柳營日次記」(国立公文書館内閣文庫所蔵 164 - 0001) 寛文 2 年 2 月 8 日条
- 12 「下屋敷絵図寄帳」小日向 (国立国会図書館旧幕府引継書 807-58)
- 13 『東京市史稿』市街編 27 卷 655 頁。

- 14 「諸向地面取調書」1(『内閣文庫所蔵史料叢刊』汲古書院 1982) 214 頁。
- 15 「小石川絵図」26(『江戸切絵図』岩橋美術 2006)
- 16 『拓殖大学八十年史』(1980 拓殖大学)
- 17 以下、概要については『拓殖大学百年史』(資料編一 2003)、『拓殖大学八十年史』(1980 拓殖大学)による。
- 18 『拓殖大学百年史』(資料編一 2003)5 ~ 7 頁。
- 19 『拓殖大学八十年史』(1980 拓殖大学)88 ~ 89 頁。
- 20 『5 千分の 1 江戸 - 東京市街地図集成 II』(柏書房 1990) 128 頁。
- 21 前掲註 20 123・124 頁。
- 22 前掲註 20 121・122 頁。
- 23 『5 千分の 1 江戸 - 東京市街地図集成』(柏書房 1988) 120 頁。
- 24 前掲註 23 92 頁。
- 25 前掲註 23 91 頁。
- 26 『江戸切絵図』26(岩橋美術 2006)
- 27 『江戸城下変遷絵図書』原書房 1986
- 28 前掲註 23 90 頁。
- 29 前掲註 27 111 頁。
- 30 前掲註 27 109 頁。
- 31 前掲註 27 107 頁。
- 32 前掲註 23 88・89 頁。
- 33 『占板江戸図集成』巻二 1958 17・27 頁。

第4章 04号遺構出土の貝殻群の分析

國學院大學研究開発推進機構共同研究員
阿部 常樹

はじめに

04号遺構よりマガキを主体とする貝殻群が出土した。これらは、5mm、3mm、1mm目の3枚の篩を用いた水洗選別法によって資料が抽出された。遺構内より採集された資料全体の重量は59,433g(水洗後)である。その内の一部の資料に関して分析をおこなった(詳細は第19表)。その結果、重量組成において、全体の99.96%が水棲貝類遺体であった。なお、貝類とフジツボ類以外の動物遺体は、1mm目と3mm目篩上より魚類の棘状の骨(鱗棘?)が各1点、3mm目篩上より哺乳類の切歯が1点出土しているのみで極めて少ない。このことから、共に主体的に本遺構に投棄されたものではなく、他所に廃棄されたものがなんらかの要因で本遺構内に混入したものと推測される。

以下、貝類遺体に関して水棲と陸棲に分けて詳細を述べる。

1. 水棲貝類

1-1. 概要

水棲貝類遺体は16種出土しており、最小で9,102個体、重量で58,608.1g含まれていることが推定される。以下、最小個体数組成(推定値)にて議論をおこなう(第23表)。

最も多く出土しているのがマガキで、8,669個体と推定される。これらは全体の95.2%を占める。マガキ以外に1%を超えるものは、ナミマガシワ(114個体・1.3%)とアサリ(109個体・1.2%)の2種のみであり、この2種に関してもマガキの出土量に比べて極めて少ないといえる。特にナミマガシワに関しては、近世江戸において食品とされていない貝種である。さらに、マガキの左殻のなかにその付着対象物の痕跡が観察することのできるものがあり、そのなかにはスガイ、ナミマガシワ、サルボウガイ、アサリ、シオフキガイなど本群を構成する貝殻の形状を呈するものが見られる(第47図)。また、マガキ以外の貝殻は、表面が摩耗しているものが多い。以上のことから、マガキ以外のほとんどの貝種において、波浪や潮流により潮間帶付近に漂着し集まった貝殻(死殻)が多く含まれていることが推測され、それらの貝殻の上に、マガキの幼生が付着し、カキ礁を形成したものと推定される。明治30年代の東京湾漁場調査報告の内湾漁場図においても、隅田川より西側、品川までの間にある州にマガキの採集場が示されている(東京都内湾漁業興亡史編集委員会1971, 註1)。死殻であったものの他には、そのカキ礁やその周辺に生息していたために、マガキを採集した際に混獲されたものが含まれている可能性も推測される。この点は、マガキと同じ、潮間帶の泥質及び砂泥質底を生息域とする種類が多いことからも推測される。

1-2. マガキの殻高に関するサイズ組成

5mm目篩上残留のマガキの右殻に関して、殻高30mmを基準としてそれ未満と以上に分類をおこなった(註2・第24表)。その結果、分析をおこなったマガキ資料全体の16.1%にあたる216個体が30mm未満もしくはそれと想定されるサイズのものであった。つまり、剥く対象とならない可能性の高いものがある程度含まれていることが推測される。

なお、実際にサイズ計測をおこなった結果は第25表に示す。

1-3. マガキの“剥き身痕”に関する観察

マガキの右殻において、明確に人為的なものと判断することのできる欠損を持つものがいくつか見られた。その欠損は、主に後閉殻筋痕のある側の腹縁部分に見られる。なお、明確に人為的な欠損とみられるものは、幅2mm~4mmの方形もしくは半円形の欠損である(第48図)。これらは、剥き身をおこなった際に欠損したものであると推測される。なお、左殻に関しては明確なものは観察できなかった。

2. 陸棲貝類

陸棲貝類遺体は3群出土している。1mm目篩上からはヒメベッコウ類似種(黒住2009)が4点、ヒメコハクガイ属の一種が2点、3mm目篩上からはホソオカチヨウジガイが1点出土している。1mm及び3mm目篩上残留資料ともに11%から14%しか分析していないとはいえ、出土数は極めて少ない。

江戸時代において、マガキの旬が秋から初春(3月)であったとされている(『本朝食鑑』『古今料理集』など)。この時期は、一般的な陸棲貝類は冬眠するとされているが、条件次第では移動することもあるとされている(大垣内1997)。つまり、陸棲貝類の出土量が極めて少ないことは、まず繁殖及び活動期である春から夏に本遺構が開放した状態ではなかったことが推測される。一方で陸棲貝類は殻の形成の為に石灰分の多い場所に移動する傾向があるとされている。つまり、この貝殻群は、陸棲貝類にとって条件の良いところとも考えられ、もし、ある程度の期間開放した状態であったならば秋季及び冬季であったとしても、本遺構内にある程度の数の陸棲貝類が移動することも想起される。

以上のことから、これらの陸棲貝類遺体は、自らこれらの貝殻群に移動してきたものではなく、土や落葉などを04号遺構内に投棄した際に混入したものである可能性が高い。つまり、貝殻群を廃棄後、あまり期間を置かずして本遺構を埋めた可能性が高いものと推測される。

なお、出土した陸棲貝類遺体は、3群共に開放地生息種(黒住2009)である。

おわりに

04号遺構に含まれる遺物はマガキを主体とする水棲貝類遺体群が主体で、他の遺物は極めて少ない。このことから、水棲貝類遺体群以外の遺物は、本遺構の中に主体的に投棄されたものではないことが推測された。さらに、マガキ以外の水棲貝類遺体群は、マガキを採集した際に混獲したものであると推測された。また、マガキにおいて、食べる対象として考えにくい殻高30mm未満のものが16%含まれている。以上のことから、これらの

第19表 04号遺構内資料内訳(値:重量(g))

種目	全体	分析完了率	分析完了資料内訳										不明	土		
			動物遺体			人工遺物			自然遺物							
			水棲貝類	陸棲貝類	フジツボ類	硬骨魚類	哺乳類	陶磁器	漆喰他	金属	植物	木片				
5mm	53535	8422.6	15.7	8365.7	—	0.7	—	1.4	0.5	0.1	—	—	54.2			
3mm	3157	460.2	14.6%	392.9	—	0.3	—	0.1	—	0.1	—	0.1	0.6	66.1		
1mm	2741	313.6	11.4%	313.5	—	—	—	—	—	—	—	0.1	—	—		
合計	59433															
全体量(推定)																
	58608.8	—	6.5	—	0.7	8.9	3.2	1.3	—	—	1.6	4.1				
	99.96%	—	0.01%	—	0.00%	0.02%	0.01%	0.00%	—	—	0.00%	0.01%				

第20表 5mm目篩上残留資料一覧

第20-1表 水棲貝類遺体

種別	点数	重量(g)	スガイ	アカニシ	アラムシロガイ	ウミミニナ	イボウミニア	カワニナ	ワミニナ	マガキ	ナミマガキ	アサリ	サルボウガイ	ハマグリ	ウナガシトマ	シオフキガイ	ヤマトシジミ	オオノガイ	トリガイ	不明貝	合計
			殻片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片
占数	5	○	○	1	4	1	3	1	1	112	1,343	○	18	8	○	16	17	○	8	9	460.2
重量(g)	33	23	0.3	7.0	—	0.8	0.2	—	—	351.0	2,615.7	4,072.4	637	22	124	6.9	24.3	450	49.7	32.5	351.8

第20-2表 水棲貝類遺体以外の資料

種別	点数	重量(g)
フジツボ類	○	0.7
植物	○	—
磁器	○	1.4
漆喰他	○	0.5
金属	○	0.1
土	○	54.2
合計	56.9	

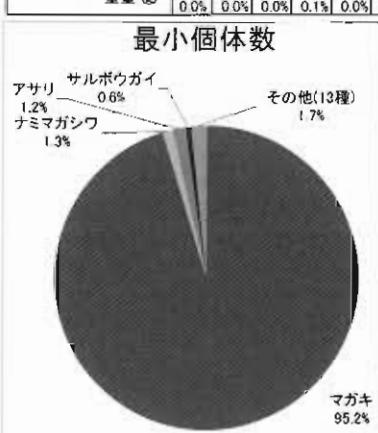
○:計数対象外資料(破片)有り

第22表 1mm目篩上残留資料一覧

種別	点数	重量(g)	1mmメッシュ										合計
			種別										
ウミコマツボ	1	—											
水棲貝類	左	7	0.1										
マガキ	右	5	—										
	破片	—	313.4										
陸棲貝類	ヒメベッコウ類似種	4	—										
	ヒメコハクガイ属の一種	2	—										
甲殻類	フジツボ類(破片)	1	—										
硬骨魚類	同定対象外	1	—										
その他	植物?	1	—										
	炭化物(木炭)	4	0.1										
	合計	313.6	—										
	0.05g未満												

第23表 水棲貝類遺体組成表(推定)

種別	スガイ	アカニシ	アラムシロガイ	ウミミニナ	イボウミニア	カワニナ	ウミコマツボ	マガキ	ナミマガキ	アサリ	サルボウガイ	ハマグリ	ウナガシトマ	シオフキガイ	ヤマトシジミ	オオノガイ	トリガイ	不明貝	合計					
点数	321	○	6	25	6	6	9	7783	3669	114	38	109	108	51	57	25	13	6	6	19	○	○	○	9102
最小個体数	32	1	6	25	6	6	9	8669	114	109	57	25	6	6	19	1	1	1	1	1	1	1	1	
合計(推定)	0.3%	0.0%	0.1%	0.3%	0.1%	0.1%	0.1%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
重量(g)	21.0	14.6	1.9	44.5	0.0	0.1	0.1	1.3	0.0	56531.5	497.7	516.8	567.6	132.8	3.8	233.3	9.5	21.0	5.1	0.6	53603.1	—	—	—
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	96.5%	0.8%	1.0%	0.2%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	



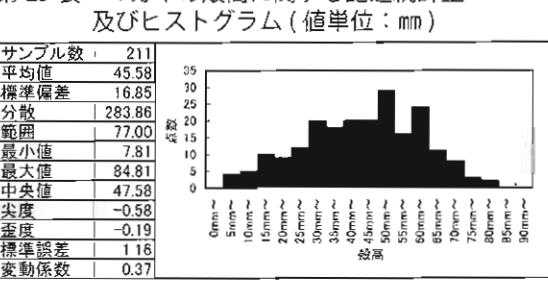
貝殻群は、海でマガキを採集したままの状態をある程度保っていることが推測される。そして、これらの貝殻群以外に本遺構に主体的に投棄されたと推定される食物残渣が含まれていなかったことから、本遺構は、マガキの調理(剥き身作業?)をおこなった際に排出された貝殻群を廃棄するためにのみ用いられたゴミ穴であると推測される。そして、本貝殻群は、陸棲貝類の分析から、廃棄してあまり期間を置かずに埋められたことが推測される。

第21表 3mm目篩上残留資料一覧

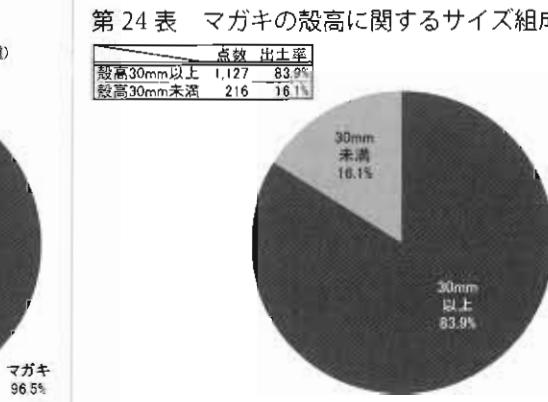
種別	点数	重量(g)	備考	3mm目篩上残留資料一覧									
				左	右	破片	左	右	破片	左	右	破片	左
水棲貝類	マガキ	96	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	アサリ	13	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
陸棲貝類	ホンオカズチウジガイ	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
甲殻類	フジツボ類	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
硬骨魚類	同定対象外	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
漆喰他	同定不可・切歯	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
金属	木片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
炭化物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	土	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	合計	460.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

○:計数対象外資料(破片)有り、—:0.05g未満

第25表 マガキの殻高に関する記述統計量

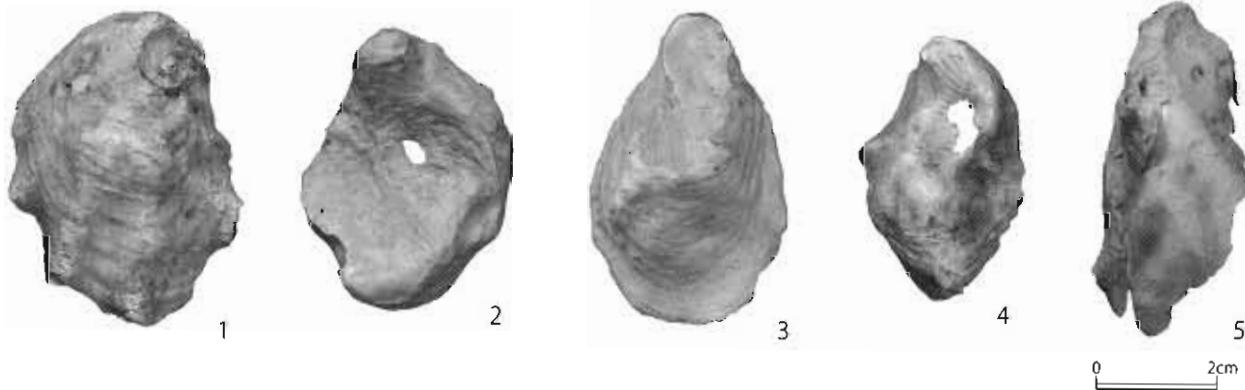


第24表 マガキの殻高に関するサイズ組成



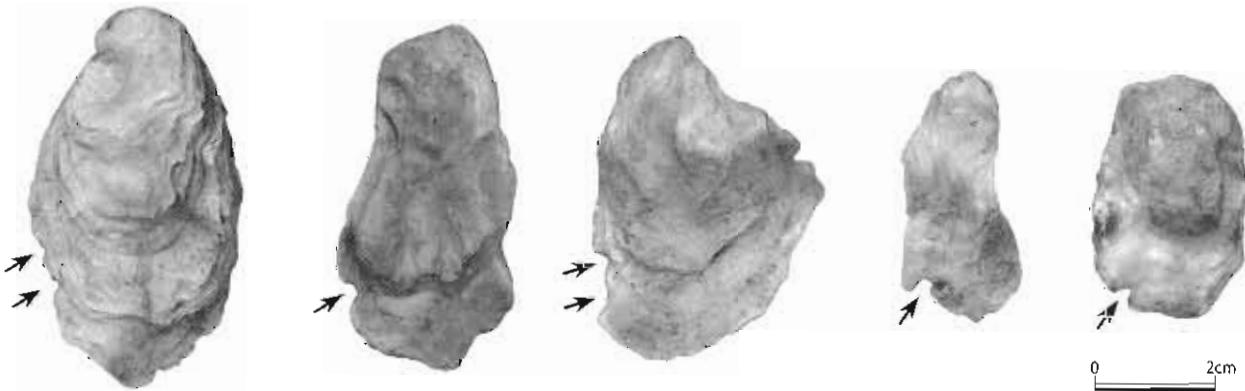
註

- 1)『本朝食鑑』(1691年刊)において、「現今江都の漁市で販売されるものは永代島の江上で採る」(以上の口語訳は島田訳注(1981)による)とされており、明治30年の調査とほぼ一致している。
- 2)以前、報告者が神奈川県横浜市金沢区上行寺裏遺跡(近世初頭)より出土したマガキの右殻に関して、剥き身痕と想定される人為的な欠損の有無によって分類し、それごとに殻高の計測をおこなった。その結果、人為的な欠損を有するもののピークが殻高35mmであり、さらに殻高25mm以下からは人為的な欠損を有するものはなかった(阿部・藤田2007)。つまり、30mm以上のものを剥き身の対象としている可能性が推測された。以上のことから、本分類をおこなうに際して、その結果を基準に用いた。

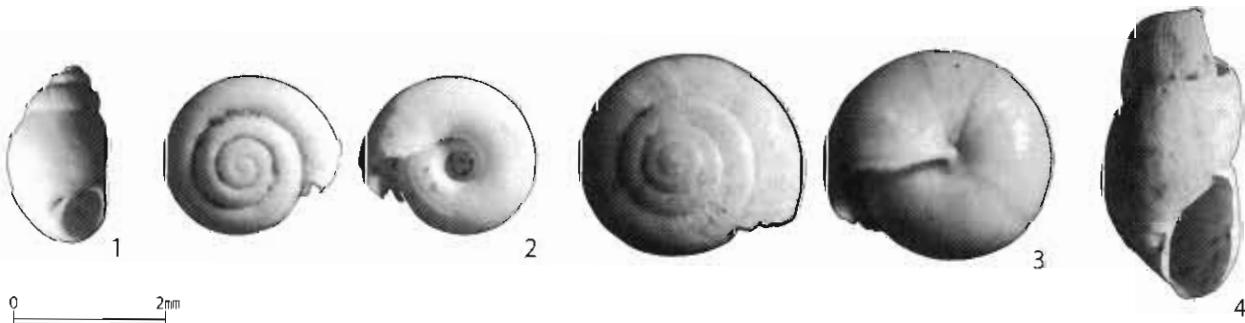


第47図 マガキの左殻に見られる付着対象物の痕跡

1. スガイ 2. ナミマガシワ 3. シオフキガイ 4. サルボウガイ 5. アサリ



第48図 剥き身痕と推定される欠損の見られるマガキ(右殻)



第49図 微小貝類

1. ウミゴマツボ 2. ヒメコハクガイ属 3. ヒメベッコウ類似種 4. ホソオカチヨウジガイ

【参考文献】

- 阿部常樹・藤田祐樹 2007 「瀬戸14番地やぐら群出土の動物遺体の分析」『上行寺裏遺跡(瀬戸14番地やぐら群)II』(53-66) 財団法人かながわ考古学財団
大垣内宏 1997 『カタツムリの生活』築地書館
黒住耐二 2009 「微小陸産貝類が示す古環境」小杉康・
谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学3 大地と森の中で—縄文時代の古生態系—』(124-138) 同成社
島田勇雄・訳注 1981 『本朝食鑑5』東洋文庫
東京都内湾漁業興亡史編集委員会 1971 『東京都内湾漁業興亡史』東京都内湾漁業興亡史刊行会

第5章　まとめ

はじめに

小日向三丁目東遺跡(及び小日向台町遺跡の一部)は、今回が第2次調査となる。調査面積は、264m²(第1地点)・220m²(第2地点)と決して広いものではないが、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代の遺物と、近世の遺構・遺物が発見されている。

本章では、今回の調査で主体をなす近世遺構・遺物の成果を概観する。また、文献調査・自然科学分析の成果や、第1地点での調査成果を踏まえ、当該地における土地利用の変遷と遺跡全体における空間的な位置付けを考えてみたい。

1. 遺構と遺物について

近世の遺構は、合計67基検出された(第4図、第27表)。内訳は、土坑14基、植栽痕3基、硬化面1箇所、溝状遺構1条、小穴(ピット)46基、性格不明2基である。これらは出土した遺物や覆上の様子から、すべて近世の遺構と考えられる。絵図や文献調査(第3章参照)の成果によると、当該地は近世前期に高崎藩安藤家の下屋敷地内であり、その後、寛文2年(1662)以降は大垣新田藩戸田家の下屋敷となって明治時代に至ったことがわかっている(西村2009)。

遺物は、総数8,819点(197,611g)が出土した(第28・29表)。内訳は、磁器747点(7,306g)、炻器274点(13,207g)、陶器1,254点(29,473g)、土器2,896点(32,548g)、瓦997点(88,943g)、鉄製品360点(1,743g)、銅製品52点(131g)、石製品50点(4,118g)、ガラス製品19点(516g)、その他(自然遺物・近世以前を含む)2,170点(19,626g)である。この他に、大量の貝類(テンバコ7箱、59,433g)が04号遺構から出土した。

出土した遺物から遺構の廃絶時期を検討すると、大きく5期に分かれる(第26表)。I期は、17世紀後葉から18世紀中葉頃に廃絶された遺構である。II期は、18世紀前葉から後葉頃に廃絶された遺構である。III期は、18世紀後葉から19世紀初頭頃に廃絶された遺構である。IV期は、19世紀前・中葉頃に廃絶された遺構である。V期は、19世紀中葉から明治時代頃に廃絶された遺構である。

以下、時期別に詳述する。

I期(17世紀後葉～18世紀中葉頃)

03号・06号・07号・08号・13号・19号遺構の6基が該当する。

調査区南西隅に位置する13号遺構以外は、すべて調査区北壁に沿って遺構が配置されている。調査区の更に北側は、当時の屋敷地の境界付近にあたり、遺構はこの「境界」を意識して、それと並行に配置されていると考えられる。

この5基の遺構は、いずれも平面形が長方形の土坑

(地下室)で、断面は箱形を呈して、壁面はほぼ垂直である。底面・壁面は丁寧に調整されて平坦で、コーナーはほぼ直角に曲がる。03号遺構は、底面に深さ0.22mほどの窪みを伴い、07号遺構は南側の壁面が掘り込まれてオーバーハングしている。それ以外はおおむね同様の形態をしており、共通性が窺える。5基のうち4基は一部が攢乱されていて全体規模が把握できないが、最も大きい07号遺構が1.62m以上(約5尺3寸以上)×1.26m(約4尺2寸)、最も小さい19号遺構が1.38m以上(約4尺6寸以上)×1.20m以上(約4尺以上)である。深さは、最も深い03号遺構が1.03m(約3尺4寸)、最も浅い08号遺構が0.47m(約1尺6寸)である。平面規模に比べて深さに格差が大きいが、上端を他の遺構に切られていたり、近代以降の削平等により上部がカットされている可能性が高い。当時の生活面からの正確な深さとはいえないであろう。

遺構の性格としては、「穴蔵」が考えられる(古泉2001)。穴蔵は防火対策の施設として、町屋から武家屋敷まで広く普及していた。考古学的には地下室の一種とされ、台地上の武家屋敷の調査などでは、天井や階段状の掘り込みを伴う大型のものとして紹介される例が多い。また、文献資料や絵図の分析から、上屋構造を持つものや建物の内部に構築される例などがあったことが知られている。地下室と分類されているものには、廻室や農業用施設などの目的で造られたものも含まれており、その用途や構造は多種多様である。

第26表 遺構廃絶年代一覧表

時期区分	遺構番号	遺構種別	遺構廃絶年代
I期	03号	土坑(地下室)	17世紀後葉～ 18世紀中葉頃
	06号	土坑(地下室)	
	07号	土坑(地下室)	
	08号	土坑(地下室)	
	13号	土坑	
	19号	土坑(地下室)	
II期	20号	植栽痕	18世紀前葉～ 後葉頃
III期	01号	土坑(土採り穴)	18世紀後葉～ 19世紀初頭頃
	04号	土坑(廃棄土坑)	
	10号	土坑	
	05号	土坑(土採り穴)	
IV期	09号	植栽痕	19世紀前・ 中葉頃
	17号第2面	硬化面	
	18号	土坑	
	21号	溝状遺構	
	P12	小穴	
	P23	小穴	
	P26	小穴	
	P30	小穴	
	P41	小穴	
	P43	小穴	
V期	16号	植栽痕	19世紀中葉～ 明治時代頃
	17号第1面	硬化面	

今回検出された5基の土坑(地下室)は、いずれも天井を持たない小型の単純な形態で、地下での作業等が想定されない。穴蔵は、火災の際の物品の応急の保管施設であったとする考え方もあり(古泉 1990)、大量の物品を収納できない上記の遺構は、あるいはそうした目的で造られたことも考えられる。なお、遺構の周辺に上屋構造を想定できるような柱穴などは検出されていない。また、5基の土坑(地下室)が同じ時期に屋敷の境界に沿って並ぶような配置から、近辺に長屋などがあったと想定される。しかし、今回検出された小穴(ピット)に、建物を想定できるような配列は認められなかった。井戸も検出されていないことから、実際の生活空間からはやや隔たった場所にあたると考えられる。

第1地点の調査においても、上記の土坑(地下室)に類似する遺構が検出されている(大成エンジニアリング株式会社 2009)。第1地点の008号遺構で、平面形が長方形を呈する半地下式の地下室として報告されている。「断面形は凹字形」、「壁・底面はほぼ平坦に構築されており、丁寧な調整が施される。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる」(註1)。規模は、2.25 m(約7尺4寸)×1.46 m(約4尺8寸)×0.48 m(約1尺6寸)で、今回調査よりもやや大きく、深さが浅い。出土遺物から18世紀中葉以降に廃絶されたとあり、今回検出された土坑(地下室)とほぼ同時期の遺構である。形態の類似性から穴蔵と考えて良いであろう。

特徴的な遺物には、07号遺構から出土した皿(B-KHN3E-02-07-02)や、08号遺構から出土した鉢(B-KHN3E-02-08-05)などが挙げられる。前者の皿は陶器製で、底部に「御菩薩」と陰刻されている。初期京焼の一つで、承応3年(1654)頃から記録にみえる「御菩薩焼」(註2)に見られる印である(河原 1981)。後者の鉢は肥前産の京焼風陶器で、見込に楼閣山水文が描かれ、底部に「富永」の陰刻がある。同様の鉢が、上記で触れた第1地点の008号遺構から出土している(遺物番号:B-KHN3E-008-5)。

II期(18世紀前葉～後葉頃)

20号遺構が該当する。

不整形で、底面・壁面に木根による凹凸が著しいことから植栽痕と推定される。長軸2.92m以上と比較的大型である。I期の19号遺構を切っていることから、19号遺構が埋没した後に植えられた植栽と考えられる。

III期(18世紀後葉～19世紀初頭頃)

01号・04号・10号遺構の3基が該当する。

01号遺構は、ローム土を採掘するために掘られた土採り穴である。底面形は不整形で、底面から壁面に工具痕が無数に観察され、このため凹凸が著しい。北側に昇降のためのスロープを掘り残しているが、成形はされず、底面・壁面と同様に凹凸が顕著である。I期の19号遺構、

II期の20号遺構を壊して掘り込んでいる。覆土中層に雑多な遺物が多く含まれる層が断面で観察され、その上から遺物をほとんど含まない土で蓋をしている。遺構廃絶後にごみ穴として転用されたことがわかる。遺物では、中国景德鎮産の磁器の青花碗(B-KHN3E-02-01-02)や中国德化窯産の白磁碗(B-KHN3E-02-01-03)などが出土している。基本的に国内産ですべての需要をまかなっていた当時の社会において、例外的な貴重遺物であり、大名家の屋敷跡らしい出土遺物といえる。

04号遺構は、マガキを調理(あるいは剥き身作業)した貝殻群を廃棄するために掘られたごみ穴(廃棄土坑)である(第4章参照)。I期の03号遺構を切って構築されている。底面・壁面は未調整で、掘削時の工具による凹凸が顕著に観察される。土層の堆積状況は、下層に貝殻が大量に集中しており、上層はそれに蓋をするように暗褐色土が堆積していて遺物をほとんど含まない。分析の結果、貝殻を廃棄して間を置かずに埋められたことがわかった。推定で8,000個体を超える大量のマガキが一時に食されたことになり、屋敷内で行われた大宴会にでも饗されたものと推測される。

10号遺構は土坑である。I期の19号遺構、II期の20号遺構、III期の01号遺構を切っている。01号遺構を切っていることから、III期の中でも比較的新しい時期の遺構と判断される。

IV期(19世紀前・中葉頃)

05号・09号・18号・21号遺構、P12・P23・P26・P30・P41・P43の10基が該当する。今回検出されたうち、最も遺構数が多い時期である。また、17号遺構の硬化面のうち、第2面目は19世紀前・中葉から後葉までの間に使用され廃絶されたと考えられる。

05号遺構は、ローム土の土採り穴である。底面から壁面に無数の工具痕が確認されて凹凸が著しい。特殊な遺物として、主に魚をおろすのに使われた出刃包丁(B-KHN3E-02-05-03)がある。

09号遺構は植栽痕である。底面・壁面ともに未調整で、木根の跡や一部に工具痕がみられ、底面・壁面の凹凸が顕著である。覆土第3層から瓦が多数出土した。遺構廃絶後に、瓦の廃棄を目的としたごみ穴に転用されたものと考えられる。特徴的な遺物に、戸田家の家紋(九曜文)が刻印された鬼瓦(B-KHN3E-02-09-01)がある。他にも九曜文の一部が残された破片などが出土している。

18号遺構は上坑であるが、使用目的等ははっきりしない。III期の01号遺構を切っている。出土遺物では、瓦が131点と比較的多く出土している。

P12は、B-2グリッドに位置する小穴(ピット)である。瓦などが218点出土しており、遺構廃絶後にごみ穴に転用したと考えられる。特徴的な遺物としては、戸田家の家紋(九曜文)が刻印された軒棧瓦(B-KHN3E-

02 - その他 - 05) がある。

第1地点の調査においても、九曜文が刻印された家紋瓦が出土している。第1地点 004号遺構の地下室から出土した軒丸瓦と軒棟瓦である(遺物番号:B-KHN3E-04-15と16)。004号遺構は、階段を伴う半地下式の地下室で、遺構廃絶後にごみ穴に転用されたことが報告されている。上記2点のほかにも、2,156点の出土遺物のうち、1,085点が瓦であった。遺構の廃絶時期は、19世紀前・中葉以降と報告されており、今回調査におけるⅣ期に相当する。

V期(19世紀中葉～明治時代頃)

16号遺構が該当する。また、17号遺構の硬化面第1面はこの時期に形成され、使用されたと考えられる。

16号遺構は植栽痕であり、平面形はドーナツ状を呈し、移植の際の根回しの痕跡と考えられる。出土遺物は23点と少ないが、明治時代の遺物を含んでいる。今回検出された遺構のうち最も新しい。

2. 当該地における土地利用の変遷

上記の時期区分をもとに、当該地における土地利用の変遷を考えてみる。

本調査区は、寛文2年(1662)以前は高崎藩安藤家の下屋敷であった。しかし、今回検出された遺構はすべて17世紀後葉以降のものであり、寛文2年に当地を拝領した大垣新田藩戸田家に関連する遺構と考えられる。安藤家の下屋敷は、元々本地点の北西に広大な敷地を拝領しており、寛文2年に戸田家に拝領されたのはそのごく一部分に過ぎない。遺構の検出がなかったことと考え合わせると、安藤家が所有していた時期は空閑地のような場所で、ほとんど土地利用されなかつたようである。

戸田家が屋敷地を拝領した17世紀後葉から18世紀中葉頃までをI期とした。戸田家の家系では、大名になる前の初代藩主氏綱・2代氏利の時期から、4代氏房の頃にあたる。6基の遺構が該当し、そのうち5基は穴蔵と考えられる。敷地の北面に沿うように配置されており、付近に長屋などの存在が想定される。

18世紀前葉から後葉頃までをII期とした。戸田家の家系では、4代氏房から5代氏之の頃にあたる。植栽痕1基のみである。I期の遺構が廃絶されてしまふくは、土地利用がなされなかつたようである。

18世紀後葉から19世紀初頭頃までをIII期とした。戸田家の家系では、5代氏之から8代氏宥の頃にあたる。4基の遺構が該当し、大型の土採り穴やマガキを廃棄した土坑などがある。I期のある程度継続性のある遺構に比べ、短期間の遺構が多いことが特徴といえる。

19世紀前葉から中葉頃までをIV期とした。戸田家の家系では、8代氏宥から9代氏綱の頃にあたる。今回の時期区分の中で最も多い11基が該当する。ごみ穴に転用された土採り穴や植栽痕など、II期、III期に類似する

遺構を主体としている。注目されるのは、09号遺構とP12、第1地点の004号遺構から出土した家紋瓦である。他にもIV期遺構から瓦が多数出土しており、この時期に、戸田家の家紋瓦が葺かれた建物が何らかの理由により取り壊され、周辺の土坑や植栽痕や地下室に廃棄された様子が見て取れる。ほとんどの瓦は二次的な被熱を受けておらず、火災とは別の原因によるものと考えられる。

19世紀中葉から明治時代までをV期とした。戸田家の家系では、9代氏綱から10代氏良の頃にあたる。植栽痕1基と17号遺構の硬化面第1面が該当するが、遺構は散漫で土地利用は活発でなかったと考えられる。

このように見えてくると、当該地における土地利用は、以下のように指摘できよう。①安藤家が拝領していた時期にはあまり土地利用がされていなかった。②I期では整然と並ぶ土坑(地下室)があり、長屋の存在が想定される。③II期は植栽痕1基のみであり、I期後しばらくは活発な土地利用がなかった。④II期以降は、植栽痕や土採り穴、廃棄土坑が主体となり、I期のように継続して利用されるような土地ではなくなる。⑤IV期に最も多くの遺構が存在し、二次被熱のない瓦が多く出土したことから、この時期に家紋瓦が葺かれた建物が、火災以外の原因により壊されたと想定される。⑥V期になると再び遺構は散漫になり、あまり土地利用がされなくなる。

3. 戸田家下屋敷地内における空間的位置付け

残念ながら屋敷地内を詳細に描いた絵図等は見つかっていないが、当該地が戸田家の屋敷地内のどのような場所であったかを考えてみたい。

寛文10年(1670)から同13年(1673)に成立した「新板江戸大絵図」(第46図)を見ると、敷地内の東側に「トダアワヂ」の記載があり、屋敷の間口が敷地の東面に設けられていたことがわかる。延宝年間(1673から1681)の「御府内沿革図書」(第45図)には、敷地の中央部に「戸田弾正」の記載があり、やはり東を向いている。この後、安政6年(1859)の「分間江戸大絵図完」(第39図)に記載されている「戸田淡路」に至るまですべて同様であり、屋敷の間口が敷地の東側にあったことは間違いないさうである。

今回の調査地点は、敷地内の北西側にあたり、敷地全体から見ると北側の隅にあたる。検出された遺構からも、I期に見られた土坑(地下室)以外は、継続的に使用されたと思われる遺構もなく、それほど頻繁に人が立ち入るエリアではなかったと考えられる。土坑(地下室)が列状に並んで配置されていることから、付近に長屋の存在が意識され、当該地は屋敷内の詰人空間(吉田1998)にあたると考えられる。

検出された遺構には、廃絶後ごみ穴に転用されたものがある。江戸の一般的なごみ処理システムは、一時的に敷地内のごみ溜(芥溜)に集積されたごみを、請負人が

有料で埋立地へ運搬するという流れであるが(小川・小林 2001)、今回の調査では屋敷内で出たごみをある程度は屋敷内で処理していたということを示している。同様の事例は、大名屋敷だけでなく、武家屋敷や町屋においても頻繁に行われていたことが、これまでの発掘調査により確認されている。第1地点の004号遺構は、先述したとおり地下室廃絶後にごみ穴として利用された。瓦を多く含み、戸田家の家紋瓦も含まれていた。今回検出の瓦を多く伴う土坑・植栽痕と同時期にあたる。しかし、18世紀前葉まで戸田家の敷地であった第1地点付近は、IV期当時は旗本茂木家の敷地であり、004号遺構の地下室も茂木家に属する。したがって、IV期に取り壊された戸田家の建物は、敷地内だけでなく隣接する旗本茂木家の屋敷地内にも運ばれ処理されていたということになる。大名屋敷とその周辺の武家屋敷の密接な関係が窺われ興味深い。

4. おわりに

小日向三丁目東遺跡は、平成20年(2008)に第1地点として、敷地の南西側を調査した(大成エンジニアリング株式会社 2009)。調査により、戸田家下屋敷と戸田家預地を画する植木列の可能性がある植栽痕などが検出された。屋敷地全体からすると、屋敷の裏手部分といつよいであろう。

こうしてみると、今回を含め2回の調査は屋敷の脇・裏手部分を調査したに過ぎず、屋敷跡や長屋跡などの主体部分の位置や配置はいまだ不明なままである。今回調査において、I期の穴蔵を利用していた人々の長屋や、IV期に取り壊された家紋瓦を葺いていた建物の存在は、敷地の中央部分と目される今後の調査において、徐々に解明していくものと期待する。
(山中)

註

- 1) 報告書本文より抜粋
- 2) 「みぞろやき」と読む。他に「御菩薩池(みぞろがいけ)」などの印がある。

【参考文献】

- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説江戸考古学研究事典』 柏書房
小川 望・小林 克 2001 「III-8 ごみ処理遺構」
『図説江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会編
河原正彦 1981 「初期の京焼」『日本のやきもの集成5 京都』 平凡社
古泉 弘 1990 『江戸の穴』 柏書房
古泉 弘 2001 「III-9 地下室」『図説江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会編
新宿区河田町遺跡調査団 2000 『河田町遺跡』 新宿区

新宿区大日本印刷遺跡調査団 1998 『市谷左内町遺跡I』 新宿区

大成エンジニアリング株式会社 2006 『三軒町遺跡』 文京区

大成エンジニアリング株式会社 2009 『小日向三丁目東遺跡』 文京区

寺島孝一・宮崎勝美 2001 「II-2 大名屋敷」『図説江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会編

東京国立博物館建設工事遺跡発掘調査団 1997
『上野忍岡遺跡 東京国立博物館平成館(仮称)外構工事地点 - I』 台東区

東京国立博物館建設工事遺跡発掘調査団 1997
『上野忍岡遺跡 東京国立博物館平成館(仮称)外構工事地点 - II』 台東区

東京都埋蔵文化財センター 2009 『春日二丁目西遺跡』 文京区

西村慎太郎 2009 「第4章 文献資料による当調査区の様相」『小日向三丁目東遺跡』 大成エンジニアリング株式会社

文京区遺跡調査会 1999 『小日向台町遺跡』 文京区

文京区遺跡調査会 2003 『大塚遺跡』 文京区

吉田伸之 1988 「近世の城下町・江戸から金沢へ」
『週間朝日百科 日本の歴史』(別冊 都市と景観の読み方) 朝日新聞社

第27表 遺構一覧表

遺構番号	遺構種別	グリット	横出標高(m)	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	切合関係(新>旧)	
									新	旧
01	土坑	A-1・2 B-1・2	25.85	不整長方形	U字形	>4.24	>2.73	0.91	10・18・P01・P34・P39 > 01 >	
									12・19・20・P49	上採り穴
02	不明	A-2・3	25.76	不詳	U字形	>0.71	>0.60	0.12	03 > 02	
03	土坑	A-3	25.77	長方形	箱形	1.53	>1.27	1.03	04 > 03 > 02・22	
04	土坑	A-3	25.77	隅丸長方形	U字形	>1.04	0.90	0.65	04 > 03・22	
05	土坑	A・B-3	25.79	不詳	U字形	>1.45	1.01	1.35		廃棄土坑
06	土坑	A-3・4	25.76	長方形	箱形	>1.38	1.27	0.63		上採り穴
07	土坑	A-4・5	25.48	隅丸長方形	箱形	>1.62	1.26	0.81		
08	土坑	A・B-5	25.60	長方形	箱形	1.64	1.02	0.47		
09	植栽痕	B-4・5	25.62	稍凹形	U字形	>1.25	1.22	0.41		
10	土坑	A-1	25.88	不詳	U字形	>0.93	>0.28	0.56	10 > 01・19・20	
11									番	
12	土坑	A・B-2	25.77	不詳	不詳	>1.34	>0.26	0.35	01・18・P36 > 12	
13	土坑	B-1	25.81	不詳	不詳	>0.79	>0.32	0.32	P33 > 13	
14	土坑	B-1・2	25.69	不詳	皿状	>3.12	>0.17	0.30		
15	土坑	B-3	25.79	不詳	不詳	>0.62	>0.18	0.28		
16	植栽痕	B-2	25.78	ドーナツ形	皿状	>2.69	1.90	0.25	16 > P37・P38	
			25.92					厚0.08	17A > 21・P40 ~ 48	第1面(17A)
									P42・P43 > 17B > 21・P40	第2面(17B)
17	硬化面	B-3・4	25.84	-	-	>3.93	>2.26	厚0.05	P41・P44 ~ P48	
			25.79	-	-			厚0.04	P40・P42 ~ P44 > 17C > 21	第3面(17C)
18	土坑	A・B-2	25.76	不詳	皿状	2.52	>0.98	0.32	18 > 01・12・P35・P39	
19	土坑	A-1	25.37	長方形	箱形	>1.38	>1.20	0.70	01・10・20 > 19	
20	植栽痕	A・B-1	25.90	不詳	皿状	>2.92	>0.79	0.62	01・10 > 20 > 19	
21	溝状	B-4	25.81	溝状	U字形	長さ1.32	幅0.18~	0.08	17A・17B・17CP44・P45・P47	
22	遺構	A-3	25.62	不詳	不詳	>0.50	>0.26	0.23	03・04 > 22	
P01	小穴	A・B-1	25.91	円形	U字形	0.40	0.30	0.17	P01 > 01	
P02	小穴	B-1	25.90	円形	U字形	0.42	0.31	0.12		
P03	小穴	B-1	25.90	円形	四字形	0.34	0.21	0.18		
P04	小穴	B-1	25.90	稍凹形	V字形	0.41	0.30	0.23		
P05	小穴	B-1	25.88	隅丸方形	皿状	0.50	0.20	0.70		
P06	小穴	B-1	25.86	稍凹形	皿状	>0.29	0.22	0.12		
P07	小穴	B-1	25.90	円形	U字形	>0.26	>0.14	1.23		
P08								番		
P09	小穴	B-1	25.82	不詳	不詳	0.74	0.38	0.52	P13・P14 > P09	
P10	小穴	B-1	25.90	円形	四字形	0.66	0.51	0.50		
P11	小穴	B-2	25.81	円形	四字形	0.36	0.29	0.16		
P12	小穴	B-2	25.80	隅丸長方形	四字形	0.96	0.62	0.42	P12 > P36	
P13	小穴	B-1	25.83	不整椭円形	四字形	1.20	0.43	0.36	P14 > P13 > P09	
P14	小穴	B-1	25.83	円形	四字形	>0.68	0.54	0.31	P14 > P09・P13	
P15								番		
P16	小穴	B-3	25.32	円形	皿状	>0.63	>0.46	0.14		
P17	小穴	B-3	25.82	隅丸長方形	皿状	0.42	0.28	0.12		
P18	小穴	B-3	25.80	円形	四字形	0.30	0.24	0.17		
P19	小穴	B-2・3	25.57	円形	皿状	>0.61	>0.34	0.21		
P20	小穴	A-4	25.80	不整椭円形	V字形	0.32	0.30	0.27		
P21	小穴	A-4	25.76	長方形	皿状	0.25	0.14	0.16		
P22								番		
P23	小穴	A-4	25.79	円形	四字形	>0.53	>0.38	0.29		
P24	小穴	B-3	25.71	稍凹形	皿状	>0.70	0.36	0.60		
P25	小穴	B-C-4	25.67	稍凹形	四字形	0.28	0.20	0.16		
P26	小穴	B-4	25.72	稍凹形	四字形	>0.79	>0.38	0.29		
P27	小穴	B-5	25.51	円形	U字形	0.28	0.24	0.60		
P28	小穴	B-5	25.65	稍凹形	U字形	0.33	0.27	0.26		
P29	小穴	B-5	25.67	不整椭円形	U字形	0.30	0.23	0.23		
P30	小穴	B-C-5	25.56	円形	皿状	>0.83	>0.48	0.15		
P31	小穴	B-5	25.66	稍凹形	四字形	>0.80	>0.44	0.21		
P32	小穴	B-5	25.64	不詳	四字形	0.54	>0.23	0.22		
P33	小穴	B-1	25.82	不詳	四字形	>0.67	>0.19	0.68	P33 > 13	
P34	小穴	B-2	25.79	円形	U字形	0.20	0.18	0.23	P34 > 01	
P35	小穴	B-2	25.76	円形	U字形	0.57	>0.33	0.32	18 > P35	
P36	小穴	B-2	25.8	円形	V字形	0.28	0.27	0.47	P12 > P36 > 12	
P37	小穴	B-2	25.78	稍凹形	四字形	0.54	0.37	0.35	16 > P36	
P38	小穴	B-2	25.62	稍凹形	V字形	0.45	0.27	0.33	16 > P36	
P39	小穴	A-1	25.50	円形	四字形	0.24	0.22	0.20	18 > P39 > 01	
P40	小穴	B-3	25.80	長方形	U字形	0.25	0.20	0.32	17A・17B・17C > P40 > 17C	
P41	小穴	B-4	25.80	不詳	皿状	>0.73	>0.54	0.23	17A・17B・17C > P41	
P42	小穴	B-4	25.85	稍凹形	V字形	0.49	0.28	0.33	17A > P42 > 17B・17C	
P43	小穴	B-4	25.85	隅丸長方形	皿状	0.69	0.41	0.19	17A > P43 > 17B・17C	
P44	小穴	B-4	25.80	長方形	V字形	0.20	0.18	0.34	17A・17B > P44 > 17C・21	
P45	小穴	B-4	25.81	長方形	V字形	0.28	0.16	0.36	17A・17B・17C > P45 > 21	
P46	小穴	B-4	25.83	稍凹形	V字形	0.49	0.23	0.58	17A・17B・17C・P43 > P46	
P47	小穴	B-4	25.80	円形	四字形	0.35	0.28	0.18	17A・17B・17C > P47 > 21	
P48	小穴	B-4	25.69	稍凹形	V字形	0.33	0.18	0.38	17A・17B・17C・P43 > P48	
P49	小穴	B-1・2	25.84	円形	U字形	0.41	0.20	0.93	01 > P49	

第28表 遺物集計表(1)

遺構番号 (遺構種別)	一括/ 層位	磁器	炻器	陶器	土器	瓦	金属製品		木製品	石製品	ガラス 製品	その他	合計					
							鉄											
							点数	重量(g)										
01号遺構 (土坑)	一括	124	58	317	753	176	128	21	0	13	0	939	2,359					
		1,039	2,527	9,057	11,200	17,323	630	40	0	267	0	1,725	43,808					
02号遺構 (性格不明)	一括	2	2	10	9	19	0	0	0	0	0	0	42					
		15	115	115	299	1,346	0	0	0	0	0	0	1,890					
03号遺構 (土坑)	一括	27	10	26	49	16	6	4	0	3	0	0	141					
		195	216	248	1,065	2,347	30	2	0	566	0	0	4,659					
	上層	3	2	10	20	9	5	0	0	0	0	2	51					
		11	66	329	172	579	11	0	0	0	0	1,348	2,516					
	中層	3	0	1	3	1	8	0	0	0	0	5	21					
		12	0	2	21	47	42	0	0	0	0	2,098	2,222					
	下層	2	2	1	7	0	1	0	0	0	0	2	15					
		7	24	5	22	0	14	0	0	0	0	3,62	3,894					
04号遺構 (土坑)	一括	5	2	9	34	10	53	0	0	0	0	0	113					
		29	5	206	85	1,032	98	0	0	0	0	0	1,455					
05号遺構 (土坑)	一括	9	12	42	39	21	2	0	0	0	0	4	129					
		88	1,011	606	938	3,859	15	0	0	0	0	31	6,578					
	上層	13	6	6	14	16	1	0	0	2	0	0	58					
		200	107	65	182	1,244	4	0	0	21	0	0	1,823					
	中層	8	1	14	10	5	1	1	0	0	0	0	40					
		74	16	1,336	504	977	95	5	0	0	0	0	3,007					
	下層	5	1	10	23	15	0	1	0	0	0	0	55					
		87	16	1,042	1,494	2,144	0	11	0	0	0	0	4,794					
06号遺構 (土坑)	一括	14	3	27	144	1	22	3	0	5	0	3	222					
		278	154	1,070	649	742	47	11	0	234	0	7	3,192					
07号遺構 (土坑)	一括	44	16	97	262	8	1	3	0	3	0	1	435					
		555	308	2,993	3,809	694	7	12	0	278	0	6	8,661					
08号遺構 (土坑)	一括	19	54	54	801	7	13	0	0	4	0	3	955					
		562	2,234	1,810	4,042	2,663	149	0	0	176	0	12	11,638					
09号遺構 (植栽痕)	括	23	5	49	9	248	3	0	0	0	0	40	377					
		281	347	728	257	23,274	32	0	0	0	0	37	24,556					
10号遺構 (土坑)	一括	11	1	8	13	5	0	0	0	0	0	0	38					
		63	6	42	189	915	0	0	0	0	0	0	1,215					
12号遺構 (土坑)	括	0	1	4	6	5	3	1	0	1	0	0	21					
		0	522	13	42	631	40	2	0	2	0	0	1,252					
13号遺構 (土坑)	一括	2	0	6	7	2	1	0	0	0	0	0	18					
		7	0	127	60	564	4	0	0	0	0	0	762					
14号遺構 (土坑)	一括	1	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	5					
		1	0	2	8	17	0	0	0	0	0	0	28					
15号遺構 (土坑)	一括	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3					
		1	0	0	6	0	0	5	0	0	0	0	12					
16号遺構 (植栽痕)	一括	2	0	6	2	12	0	1	0	0	0	0	23					
		11	0	53	8	859	0	10	0	0	0	0	941					
17号遺構 (焼化面)	第1面 一括	20	1	29	15	16	11	0	0	1	9	4	106					
		48	1	117	20	392	27	0	0	35	75	716						
18号遺構 (土坑)	第2面 括	11	0	37	15	10	1	0	0	0	0	0	74					
		23	0	139	43	275	3	0	0	0	0	0	483					
19号遺構 (土坑)	括	33	12	87	101	131	16	0	0	5	0	454	839					
		262	408	1,326	735	8,828	57	0	0	2,350	5	570	14,516					
20号遺構 (植栽痕)	一括	158	28	85	238	13	38	4	0	5	0	671	1,240					
		978	2,078	1,368	2,768	2,382	204	17	0	35	0	9,349	19,179					
21号遺構 (溝状遺構)	一括	25	5	13	75	26	7	3	0	2	10	1	167					
		409	167	281	1,270	340	16	5	0	3	481	37	3,009					
P01 (小穴)	一括	0	0	1	7	2	0	0	0	1	0	0	16					
		0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	80					
P12 (小穴)	一括	29	4	41	37	80	20	6	0	1	0	0	218					
		103	6	306	291	3,094	47	2	0	3	0	0	3,832					
P14 (小穴)	一括	5	0	4	3	1	4	1	0	0	0	0	18					
		8	0	10	3	53	16	3	0	0	0	0	93					
P16 (小穴)	一括	1	2	4	2	0	1	0	0	0	0	0	10					
		47	2	32	11	0	3	0	0	0	0	0	95					
P17 (小穴)	一括	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23					
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23					
P18 (小穴)	一括	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
		0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2					
P20 (小穴)	一括	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
		0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	6					
P21 (小穴)	一括	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
		4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4					
P23 (小穴)	括	3	1	14	3	12	0	0	0	1	0	0	34					
		7	1	112	51	602	0	0	0	3	0	0	776					
P24 (小穴)	一括	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1					
		0	0	0	0	0	126	0	0	0	0	0	129					
P26 (小穴)	一括	0	1	23	16	0	2	2	0	0	0	0	11					
		0	30	263	513	0	91	6	0	0	0	0	903					

第29表 遺物集計表(2)

遺構番号 (遺構種別)	一括/ 層位	磁器	炻器	陶器	土器	瓦	金属製品		木製品	石製品	ガラス 製品	その他	合計					
							銅											
							銅	鉄					点数	重量(g)				
P28 (小穴)	一括	1 23	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 23				
P29 (小穴)	一括	0 0	1 17	0 0	2 12	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	3 29				
P30 (小穴)	一括	2 3	1 38	4 92	2 8	0 0	0 0	0 0	0 0	1 101	0 0	0 75	0 75	17 317				
P31 (小穴)	一括	0 0	0 0	5 36	4 12	4 83	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 131				
P33 (小穴)	一括	0 0	0 0	1 7	0 0	2 54	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 61				
P34 (小穴)	一括	0 0	0 0	0 0	1 3	1 12	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 15				
P41 (小穴)	一括	1 1	3 59	24 213	61 346	7 354	10 36	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 3	4 1,012				
P42 (小穴)	一括	2 33	1 7	2 40	0 0	4 410	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	9 490				
P43 (小穴)	一括	0 0	0 0	4 10	1 4	5 178	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 192				
P47 (小穴)	一括	1 97	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 97				
P48 (小穴)	一括	0 0	0 0	0 0	0 0	3 102	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 102				
表 樹	一括	130 1,633	37 2,667	159 4,592	104 1,388	102 10,386	2 15	0 0	0 0	2 77	0 0	0 182	19 20,940	555				
糞 垢	一括	6 111	0 0	12 642	1 11	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 426	20 1,190				
合 計		747 7,306	274 13,207	1,254 29,473	2,896 32,548	997 88,943	360 1,743	52 131	0 0	50 4,118	19 516	2,170 19,626	8,819 197,611					

報告書抄録

東京都文京区

小日向三丁目東遺跡 第2地点

－拓殖大学文京キャンパス整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成22年6月30日

編 集 大成エンジニアリング株式会社

発 行 学校法人拓殖大学

印 刷 能登印刷株式会社